

374-119



1200601182283



始



類句
文範

新作文辭典

前田 晃 編
金星堂 出版

374

119



I種
W



1200601182283

序

文章は自己表現の要求からはじまつたものであるから、その極致として貴ぶべきものが獨創であることは改めていふまでもない。けれども、この獨創が自由に出せるやうになるまでには一通りならぬ精勵刻苦を要する。一面に於て人間としての修養が大事であると同時に、他面に於て自己表現の手法の上にも精進努力を重ねなければならぬ。

人間としての修養努力はしばらく措く、文章道の修行者となつて初めて文章を書き習はうとする人々のためには、既に世間にいろいろの方法が提供されてゐる。先人の美辭麗句に依つて後生の貧しい文藻を補はしめようとしたのもその一つであるし、先人の文章を模範として、作文のこつを會得させようとしたのもその一つである。この書もまたその種のものゝ一つであつて、いはゆる屋下に屋を架したに過ぎない。けれども、その編纂に當つては、出来るだけ新意を出して陳套に墮すのを避けた。新時代に適するものに

しようと思つてである。まったく文章道の楷梯に過ぎない書ではあるが、よく読み、よく味はつて、よくおぼえて活用することが出来るやうになれば、そこから自己表現の道も容易について来るであらう。

なほ、本書の第一編、『類句の部』の編纂に就いては友人土屋長村君の勞を非常に煩はした。こゝに記して感謝の意を表する。

昭和二年十二月廿一日

編者

例言

一、本書は第一編に類句を集め、第二編に文範を掲げ、その鼈頭には、古い故事熟語の中で今もなほ使はれてゐるもの、平易な解釋と、文章添削實例とを載せ、更に、附録として同訓異義の漢字の解釋を收めた。

一、類句を集めた書物はこれまでも澤山あつたが、その多くは、拔萃した句があまりに片言隻句に過ぎて讀んで興味が薄く、數ばかりむやみに多くて却つて活用の便に乏しかつた。編者は久しくそれを遺憾としてゐたので、本書にはなるべく意味の一貫した一節を取つて、讀んだだけでも服笥を豊かにすることが出来るやうにした。

一、類句は出来るだけ多く新しい時代の語句を集めようと努めた代りに、文範は、むしろ明治以降の文章界の體様を展觀することの出来るやうにと、各體に涉つて、諸家の文章を網羅するに努めた。従つて、これには文語體の漢文書譯體や擬古文體や雅俗折衷體もまじつてゐて、類句の全く口語體に限つてゐると

明かな對照を見せてゐる。類句の活用が將來に向つてゐるのに對して、文範は過去の回顧にも便せしめようとしたのである。

一、文範に收めた文章には、讀者に自己の表現の道を發見する暗示を與へようとした老婆心から、一々評釋を附しておいた。そこには編者の文章觀も多少は寓してある。

一、同訓異義は、編者が嘗て『文章世界』の記者をしてゐた時に、諸書を參照して作つたもので、常に座右におくと、文章を書く上に非常に助けになる。其の利便を思つて、よく使ふ故事熟語の解釋と共に本書に收めたのである。

目次

第一編 類句の部

第一章 季節

新年	二
早春	三
盛春	六
晩春	八
夏	九
初夏	九
盛夏	二
晩夏	三

第二章 植物

初秋	三
仲秋	六
晩秋	七
冬	三
初冬	三
嚴冬	三
歲暮	四
祭禮	五
春の植物	七
櫻の花	七
梅の花	八

梅・桃の花.....	元
菜の花・其他.....	三
春の草.....	三
夏の植物	三
牡丹.....	三
薔薇.....	三
月見草・其他.....	三
若葉・青葉.....	三
秋・冬の植物	四
木犀.....	四
コスモス・其他.....	四
秋草.....	四
稲.....	四
紅葉・落葉.....	四
樹木	四

柳.....	四
銀杏.....	五
松.....	五
樺・其他.....	五
果樹.....	五
第三章 光線	五
日光	五
春の日.....	五
夏の日.....	五
秋の日.....	六
冬の日.....	六
曙・日の出.....	六
日没.....	六
月・星	六

春の月.....	七
夏の月.....	七
秋の月.....	七
冬の月.....	七
星.....	七
朝	七
春の朝.....	七
夏の朝.....	七
秋の朝.....	七
冬の朝.....	七
夕	七
春の夕.....	七
夏の夕.....	七
秋の夕.....	七
冬の夕.....	七

春の夜.....	七
夏の夜.....	七
秋の夜.....	七
冬の夜.....	七
夜	七
第四章 天象	七
火	七
灯	七
空	七
春の空.....	七
夏の空.....	七
秋の空.....	七
冬の空.....	七

風	二二
春の風	二二
夏の風	二三
秋の風	二三
冬の風	二四
雨	二五
春の雨	二五
梅雨	二七
夏の雨	二六
暴風雨	二三
秋の雨	二三
時雨	二三
雪	二四
雲・霧・其他	二七

雲	二七
霧	三一
霞・靄・露	二四
第五章 地象	
山	二六
水	二六
春・夏の山	二六
秋・冬の山	二六
丘	二四
河川	二四
湖	二五
沼	二五
海洋	二五
春・夏の海	二五
秋・冬の海	二五

第六章 都會と田舎

海岸	二五
港	二六
灣	二六
波	二六
森林	二六
都會	二七
晝の街	二七
夜の街	二七
店	二七
工場	二七
カフェー・酒場	二八
劇場・其他	二八
場末・郊外	二八

音響	二八
田舎	二九
春・夏の野	二九
秋・冬の野	二九
田舎町	二九
村落	二九
漁村	二九
田圃	二九
田舎道	二九
温泉場	二九
寺院・古蹟	二九
墓地	二九
住居	二九
家屋	二九
庭園	二九

浴場.....三三

乗物.....三三

船.....三三

汽車.....三三

電車・其他.....三三

第七章 動物

獸.....三三

犬.....三三

猫.....三三

牛.....三三

馬.....三三

羊・其他.....三三

鳥.....三三

雀.....三三

第八章 人間

男性.....三三

少年.....三三

青年.....三三

中年.....三三

老年.....三三

小兒.....三三

雜.....三三

女性.....三三

娘.....三三

中年.....三三

老年.....三三

妻.....三三

藝者.....三三

雜.....三三

身體.....三三

肉體.....三三

男の顔.....三三

女の顔.....三三

男の眼.....三三

女の眼.....三三

唇.....三三

鼻.....三三

髮.....三三

髭.....三三

手.....三三

聲.....三三

服裝.....三三

表情.....三三

戀の表情.....三三

笑の表情……………三二
 悲哀の表情……………三三
 怒りの表情……………三四
 雑……………三五

動作……………三六

戀の動作……………三七
 男の動作……………三八
 女の動作……………三九
 雑……………四〇

心理……………四一

戀の心理……………四二
 悲哀の心理……………四三
 惱みの心理……………四四
 不安の心理……………四五
 喜びの心理……………四六

追憶の心理……………四七
 夢の心理……………四八
 雑……………四九

氣分……………五〇

神經……………五一

感覺……………五二

病……………五三

死……………五四

戰爭……………五五

第二編 文範の部

敘事文

楊弓店 (森鷗外)……………四四
 利根川の土手 (田山花袋)……………四五
 月見草 (大町桂月)……………四六
 猫の最後 (夏日漱石)……………四七
 渚 (寒川鼠骨)……………四八
 狗 兒 (二葉亭主人)……………四九
 夏なき里 (田岡嶺雲)……………五〇
 片意地 (窪田空穂)……………五一
 舞 妓 (高濱虚子)……………五二
 質 屋 (徳田秋聲)……………五三

抒情文

夜行軍 (澁川玄耳)……………五五
 「西郷」 (中村星湖)……………五六
 芝 居 (永井荷風)……………五七
 魔 (泉鏡花)……………五八
 北國の淨罪界 (谷崎潤一郎)……………五九
 つるし大根 (島崎藤村)……………六〇

ヨルダン河 (徳富蘆花)……………六一
 銀杏の葉 (水野葉舟)……………六二
 二葉亭主人 (池邊吉太郎)……………六三
 鐘 聲 (落合直文)……………六四
 溝渠の水 (北原白秋)……………六五
 雁がね (樋口一葉)……………六六

虫の音 (永井荷風) 四九
 落椿 (薄田泣菫) 四七
 湯槽の中 (夏目漱石) 四三

書翰文

禁煙 (二葉亭主人) 四七
 萬金も青春を買ふ能はず (竹越三又) 四六
 世の中は沙漠に等しい (高山樗牛) 四三
 汽車の中より (大町桂月) 四四
 南洋の島懐しく (齋藤野の人) 四九

日記文

甘き哀感 (國木田獨步) 四三

十五日間 (尾崎紅葉) 四九
 看護 (與謝野晶子) 四五

論説文

空拳か實拳か (徳富蘇峯) 五〇
 創作 (上田敏) 五五
 二宮尊徳の教訓 (山路愛山) 五八
 詩人と宗教家 (岩野泡鳴) 五三
 女子の三種類 (堺利彦) 五六
 東洋の花園 (竹越三又) 五三
 策の伊藤公 (黒頭巾) 五八
 眞面目な生活 (相馬御風) 五九
 實世間の眞相 (齋藤綠雨) 五三
 日本の道學先生 (内田魯庵) 五五

静思と活動 (三宅雪嶺) 五〇

翻譯文

切諫 (坪内逍遙) 五五
 臥床 (二葉亭主人) 五三

敘景文

武甲山 (大町桂月) 五二
 長江の落日 (徳富蘇峯) 五六
 妙義道 (森田思軒) 五七
 噴火口の石壁 (吉江孤雁) 六一
 昇仙峽 (遅塚麗水) 五四
 夕暮 (幸田露伴) 五七

庭 (高濱虚子) 五八
 行潦 (水野葉舟) 五三
 海の上 (徳富蘆花) 五九
 雨の青木ヶ原 (河井醉石) 五七
 春 (永井荷風) 五九

よく使ふ故事熟語

いと 五九
 ろ 五九
 は 五九
 に 五九
 ほ 五九
 へ 五九
 と 五九

文類
範句
新
作
文
辭
典

前
田
晁
編

ゆ き さ あ え こ ふ け ま や く お の う む

ゆ	き	さ	あ	え	こ	ふ	け	ま	や	く	お	の	う	む
.....
六五	六五	六九	六一	六〇	六九	六五	六五	七一	六九	六〇	六三	六〇	六四	六五

目
次

す せ も ひ し み

す	せ	も	ひ	し	み
.....
七九	七九	六六	七〇	七〇	六六

一四

第一編 類句の部

第一章 季節

春

◇新年

午夢じめや、何かの取替へられた神棚に、燈明の灯が、ゆらゆらと揺いでゐた。四條派風の古畫の緑青や、胡粉の所々剥落ちた六枚折の屏風の立廻された座敷の床に、飾りつけた鏡餅や、松竹梅の生花などが床しく眺められた。(秋聲)

屠蘇の酔の廻つたらしい廻禮の人々が通る。塗

り立てのゴム輪の俵が何臺も往來する。立矢の字の崩えたつたやうな鬱金の扱帯をだらりと下げた娘達が、カチンカチンと羽根を衝いてゐる。皮羽織を着た鳶の頭が、輪飾の下を潜つて、手拭を配つて歩く。獅子舞の太鼓の音、紙鳶の呻り……(谷崎潤一郎)

新建の門には、松が立てられてあつて、子供等の風に見える程の微かな柔かな風が、静かに吹いて通つた。綺麗な晴衣を着た女の兒が遊んでゐる傍を、酒屋の御用聞が、小さつぱりした扮装をして通つた。

元旦と云へば、何よりも愉快である。一歳また一歳、終に白頭翁となると知りながら、すべてのものが、新しくなるといふ感じが、平凡陳腐のために惱

(花袋)

れた頭腦を掃除して呉れるやうに思ふ。ポーとなつて働きを中止したかと絶望した心が、俄かに蘇生したやうに感ずる。(梅溪)

眼を轉じて下の方を眺めると、小さな原を挟んで、松本の町が明るく見える。そこにもこゝにも日の丸の旗が見えて、眼の下の冬涸れの川原に架した木造の橋に、赤い帯をして頭に赤い鳥の羽毛を立てた軍人が、さしかゝつたりした。私は考へた——ほんとに今日は元日なのだ、私のやうにこんな静かな孤獨な元日を、曾て如何なる人が迎へたであらう？ 私はその欄干へ窮屈に腰をかけたまゝ、自分の現在の生活を考へて見ないではゐられなかつた。私には、私のすべてが掌のうちのものゝやうに明らかに見えた。(原田實)

◇早春

春が再びめぐつて來た。清水へ來てから二度目の春である。裏の竹藪からは終日朗かな小鳥の啼く音が聞えた。それにつれて家に飼つてある目白も高音を張つた。裏の竹藪から、谷を隔て、續いてゐる梅林(興正寺別院下から清水寺へ行く近道に當つて居る)の梅も見頃に近く、奥の間の縁側に出ると、赤い毛布を掛けた掛床几や、ビール、サイダなどと染め抜いた赤や青の小旗が樹間に隠見して居る中を、瓢箪を携へた梅見客が三々五々と逍遙して居るのが手に取るやうに見られた。東山遊覽客も一日と殖えて來て、前の坂を上下する人の下駄の音や車の響も、終日長閑に麗か

に聞えた。向ひの瓢箪屋で絶間なく客を呼ぶ聲も、恰も鳥の高音を張るやうに景氣づいて居た。(加能作次郎)

吹く風が時に冷たいこともあるけれど、日の光も空の色もだいぶ春めいて来た。都のまん中で塵にまみれて醜態してゐる身にも、春としなれば草の芽吹く遠い故郷の野原が思ひ浮べられる。まだ黄色く枯れたまゝでゐる草土手の日當りに軽く身を横たへて、夢みるやうな空想に耽つた少年の頃の懐しさ。微かに耳に通つて来るせゝらぎの記憶なども鮮かに蘇つて来る。ほんとに長閑なのは早春の頃の思ひ出だ。(前田晃)

薄暗い林の奥からは春らしい若芽の匂ひだの温つた土の匂ひだのがしつとりとあたりへ溢れて来た。その中に何か明るさうな鳥が時たま遠くに啼く聲がし

た。(芥川龍之介)

あの、光つた針の風がいつの間にか薄いふくらみに若がへつて、晝のうちにはしきりに冬の冷やかさをふりすてやうとあせつてゐたが、早い夕暮にびつくりすると、あわてゝ家々の軒下に、濃い影をつくり出して聲を呑む。

薄暗を溶かした澄んだ感じだが、かへつて眞晝より子供たちに自由をあたへると見えて、唄つたり、駈け出したり、笑つたり、しやべり合つたりするごつちやなさわがしさが新に一しきり町から町を漂ふ。

春といつて、横に廣がつた薺が枝を束ねた桑畑の畝間にすつと延び出して僅に白い花が見え出して、

まだ菱が首を擽げない頃は其短い麥の間に小さな體にしては恐ろしげな毛を頭に立てた雲雀がちよろちよると駈け歩いてゐる。(長塚節)

それは村々に雪が消え、ほかほかと日の光が畑土に沁みて地雷があたたか湧くころ、草山には野火の烟が空になびいて、雲雀が青い空に稍せはしい音いで刺繡をはじめめる。(夕暮)

暖かい穏かな午後の日光が一面にさしこむ表の窓の障子には、折々軒を飛ぶ小鳥の影が閃いて、茶の間の隅に、いつも薄暗く引込んだ佛壇の奥迄が明るく見え、床の間の梅はもう散らうとしてゐる。(荷風)

私は、打たば鳴りさうに、ゆつたりとさし込む初春の日影を受けて、張り明るんでゐる障子の背巾を

眺めながら、暫くはそのまゝ床の中におて、私にとつては珍らしく樂天的な、この平和な氣持を樂しんでゐた。縁の外には雀が啼いてゐる。私は、暖かな日影を心から祝福した。(原田實)

私は、わが北方に於ける早春の事を覚えてゐる。峡谷の所々には、まだ雪が残つてゐたが、方々の草場には、もう新しい草の芽が、雪にうもれた去年の冬越しの灰色の中に、喜ばしげに樂しげにをどり出しつゝ、青すんでゐた。太陽は輝いてゐた。そして公園の柔かい小徑の上には私達の足跡——一つは大きな踵の、一つは軽い小さな踵の二人の足跡が残つたのである。

春はとても来さうもないやうに見えた。四月は

すつと北風が吹いて夜は霜が降つた。それでも眞晝のうちには、太陽が暖かに照つて、四五疋の大きな蠅がぶん／＼と飛びまはり初めたり、雲雀が名譽をかけて、今が夏の最中であると言ひ觸したりするほどだつた。

(ケラン・前田晁譯)

◇盛 春

實に春は空想勝な心を募らせる。天も地も物珍らしいおいたちの姿に、暖かい若々しい思ひを籠めて魅するやうな微かな響が常に波うつ静かな空氣に傳はつて来る。無から有が生ぜられるやうな、成長する姿を見ると、そのかすみの奥、微かな響の傳つて来る遠い國に、人の見ることの出来ないものがあるかともお



日はボカ／＼と照り、風はソヨ／＼と吹き、刈残さ

れた草の根は蘇生つて其處ら中の列樹通りの幅の狭い芝生や石疊の際から萌出し、白樺やボブライヤ山櫻は柔かな香のある若葉を開き、菩提樹の新芽は脹れ出し、鴉や雀や鳩は春の喜びに充ちて巢の仕度をし、日當りの好い温かい壁には蠅が集つてゐた。

(トルストイ・魯庵譯)

あたり一めん、アカシヤの花が――白や、黄色の――が繁く敷かれてゐる――太陽の光は到るところにかじやき、地上にも、大空にも――しづかな春のよろこびがかじやいてゐる。通りの真中を龍毛の生えた耳をもつてゐる小さな子供の驢馬が蹄の音を立てながら走つてゆき、重さうな馬はのそ／＼と走つてゆ

もはれる。春の来る度に私の心に浮ぶ様々の思ひ、私の胸に起る波濤はその見えないものを見たいと思つてあこがれて居るのではあるまいか。(葉舟)

京の町を包む山々には、そのうちに、いつかしら若芽の緑が、くつきりと色づいて来て、執念深い北山の雪がすつかり消えてしまふと、やがて圓山で名代の枝垂櫻が、暖かなひと雨ごとに薄紅い唇をちらほらと綻ばせはじめました。(長田幹彦)

何十萬といふ人間が一心になつて、自分達が群居する小ツぼけな土地を變改しようと、石を敷いたり、草を根こぎにしたり、木を伐倒したり、鳥や獸を追出したたり、石油や石炭の煙で空氣を充たしたりしても、春は矢張春だ、町の真ん中だつても。

き、人間はいそぎもせず歩いてゐる。――誰も彼も皆、花の咲いてゐるアカシヤの蜜のやうに甘い匂ひの一ぱいにみちてゐる空氣の中で、出来るだけ長い間太陽に照らされてゐたいと思つてゐるといふことが明らかに解る。(ゴルキイ・白光譯)

春、河は氾濫して廣く流れ、暗澹とした、鉛のやうな、逆巻く大浪が奔騰した。河岸は白鳥、鶯鳥、鳴などの群で白く覆はれた。森林では生活が初まつた。そこでは凡ての獸が再生して、森は熊、麂、狼、北極狐、梟、松雞などの騒ぎを物々しく反響した。濃い緑色の雑草が生長して花を開いた。夜は縮まり、晝は伸びた。朝暾は幅廣く、藤色であつた。黄昏は蒼白く、緑を帯びて動き易く、その中を村の娘達は、河

のほとりの崖の上で、ラーダ女神の歌を歌った。朝焼と共に大きな太陽は、多くの春の時間をば天空の己が旅行に過さんため、水々しい青空にその姿を現はした。春の祭りは来た。その日は太陽も微笑むといふ傳説があり、人々は太陽のシムボルなる赤い卵を取り交はすのであつた。(ヒリニヤーク・平岡雅英譯)

◇晩 春

庭には白木蓮が枝一杯に咲いてゐた。空からの白さで明るく透けてゐるやうに思へた。花の咲く時分になつてから、陽氣がまた後戻りして来て、咲きさうにしてゐた花を暫し躊躇させてゐたが、一兩日の生温かい暖かさで、それが一時に咲きそろつた。そしてそ

の下の方に茂つてゐる大株の山吹が、二分どほり透明な黄色い苔を綻ばせて、何となし晩春らしい氣分をさへ醸してゐた。何かしら、例年の陽氣に見られない、寒さと暑さの混り合つたやうな重苦しい感じがそこに淀んでゐるやうな日であつた。それは全くいつもの春には見られないやうな、妙に拍子ぬけのした氣分であつた。(秋聲)

京都のゆく春の夕べは、私が今まで経験したなかで最も深くその春愁を覚えさせます。東山に萌ゆる若葉の色彩、鴨川に咽ぶ河瀬のさゝやき、それに滑らかな人々の言葉の調子までが、そつくり春愁を覚えさせる道具立になつてゐます。(長田幹彦)

一重ざくらはもう盛りを過ぎてゐた。彼岸に近

い日は暖かで、芝草の若い緑は美しく萌え出してゐた。萬兩の赤い實の鈴生に生つた鉢や萬年青の生々とした鉢などが踏石の上に置いてあつた。藍の模様は鮮かに出てゐる手水鉢の水に日の影が綾をなして光つた。庭には小鳥が囀つてゐた。(花袋)

細かた苔に蒼んだ古い庭土の窪みなどに、どこから飛んで来たか櫻の花弁の三つ六つ七つ散り敷いてゐるのは、行く春の藹たけて艶やかなる風情だつた。

(里見葦)

夏

◇初 夏

夜の明けたやうに、パツと流れてくる日の光の強さはもうすつかり夏である。家を廻る樹々の濕つた木の葉、面の一枚一枚はそれから滴る雫と共に、黄金のやうに輝く。重なり合つた薄暗い木立の間には其處にも烈しく射し込む日光が風の來るたび動揺する影と光の何とも言へぬ美しい網目を作つてゐる。往來を隔てた千駄木の崖の下の方で蟬の聲が逸早くも今年の夏の新しい歌を奏で出した。幾匹の白い蝶が何時の間にか生れて何處に今日までの雨を凌いでゐたのか、まるで夢から出たものゝやうに、ひらくと日の光の中を飛んで来る。(荷風)

伸び切つた若葉の尖つた葉末に雨の雫の滴りもせず留つてゐるのを、曇りながら何處かしらばツと

明るい空の光が寶石のやうに麗はしく輝かす。石に蒸す青苔にも樹の根元の雑草にも小さな花が咲いて、植込の陰には雨を避ける蚊の群が雨の糸と同じやうに細かく動く。(荷風)

初夏のしめやかな、艶かな、銀のやうな月の光に頼へてゐる木の葉が、ちやうど銀笛を微かに鳴らし、でもゐるやうに、葉と葉とが摺れ合つて美妙な音を立てゝゐる。(未明)

四月の末から五月にかけて、若葉の色が次第に濃やかになると、氣も軽く、心ものびやかになつて、單衣一枚で、ブラリと外に出るやうなことが多い。夕刻、其の日の用事を済ませて、自由の身になると、若い心が俄かに解放された嬉しさに頼いて、何處かしら、

身軽に歩き廻りたくなる。(梅溪)

初夏の頃の空の色、海の色、新緑と同じ色彩で萬遍なく塗られてゐる。初夏の自然は、此の新緑の色で持ち切つてゐる。人は行くも歸るも青い一踏の單調に飽いて、見上げる空も青い、遠い眼をやる海の色も青い。(薰園)

五六日たつと、五月雨が止んだ。重い雲が一重づゝ剥けた。雲切れの間から雨に洗はれた青空が見えて来た。日の光りが地上に落ちた。肌からは湯氣が立ち上る。ぐつたり垂れてゐた草の葉が勢よく頭を上げる。樹々の芽が伸び出した。(孤雁)

碧の空をふわりと一片の雲がちぎれて飛びそれが丘を過ぎる。若葉が暗く明るく、陰影が身を包

んで不思議な思ひがする。行きすぎるとばつと明るく、葉と葉が揺れて日影を洩らす。(孤雁)

其處らの木立は、見るからにすく／＼してゐる。そのちいさな、やつと今、世の光に觸れたばかりといふやうな木の葉の一つ一つにも、若い力の充ち溢れてゐるのが感ぜられる。思ふまゝに根を張り枝を張つて何處々々までも伸びて行かうとするやうな生氣の充ちた木立を仰ぐと、上に高く空はからりと晴れ渡つて、其の所々を、白いあつさりした雲が、ふわり／＼と青い地色をぼかすやうに漂つて行く。大きな平和の中に一つ一つの小さな活動が包まれてゐるやうな氣がされる。(前田晁)

盛夏

庭前の木々の葉裏は光り輝いて、苔蒸す石燈籠や、飛び石や、土塀の白壁や、赫黒い土の面などに、ぎら／＼と浮び漂ふ日光の斑點は、恰も藻をくゞる金魚の片鱗のやうな、水面を流れる油のやうな、重い、眩い、さうして新鮮な反射を見せた。(谷崎潤一郎)

乾き切つた白い道が斜にきつて、其の上をぎらぎらきらめく午後の日射しが焼けつくやうに照り付けてゐる。道の側には、處々に古池のやうな水溜があつて、眞蒼にとろめいた水垢が浮いて、菖蒲や、蓮の腐つた葉が饅え込む毒水のいきれの中に、痣のやうな眞黒な斑紋をつくつてゐる。(長田幹彦)

男も女も、からだに熱い息を吐きかけるやうに感じながら、そろり／＼一條になつて居る町の中を歩いて来た。この群の中の女の兒の赤いバラソルが、日の光に鋭い反射をして燃えて居た。日は研ぎ澄した銀の色である。(葉舟)

白熱の夏の光が、ぎら／＼と目もまばゆいやうに照らして、廣い街頭には人通りもない。まるで夜が更けたやうに、白日の寂寞がその心を漲らして居る。緑葉の陰はせまはつきりと地に印されて、風が吹けばさや／＼と音をさせる。(葉舟)

眞夏の日には、北國では、大地は花嫁である。地面は歡びに充ち、小川は愈々流れ、牧場の花は愈々大録に觸れられず、そしてすべての鳥が歌ふ。鳩は樹

から飛んで出て小舎の前に止まる。

(ストリンドベルヒ・原田實譯)

晩夏

朝夕いくらか樂になつたかと思ふと共に、大變に日が短かくなつた。毎朝起きて見るたびに竹垣に咲く朝顔の花の輪が小さくなつて、四日が燃ゆるやうに狭い家中に差込んで来る時分には、近所一面に啼く蟬の聲が殊更に調子せはしく聞える。八月も半ば過ぎてしまつたので、竹垣を越して裏手の玉蜀黍の畠に吹き渡る風の響きが、夜などは折々雨かと誤まれた。

(荷風)

その家のとなりは杉垣になつてゐる。蜘蛛が巢

秋

初秋

を張つた下葉には、長い街道に疲れて歩くときの重い足を思はせるやうな、白い土塵埃が溜つてゐる。と、どこかで、みんなん蟬がやう／＼傾いて行く暑い日を送るやうに、みんな／＼と鳴いてゐる。(鈴木三重吉)

一週間以來の好天氣が続いた。炎天の空は深海の水のやうに眞青で、大地には残暑の苦熱が厳しかつた。(谷崎潤一郎)

日にまし秋が来るのを思はせるやうな蜩の鳴聲が何處かの森で涼しく、聲をたゞいてゐるやうに今日の夕ぐれを惜しんで泣いてゐる。(未明)

一しきり残暑の夕日が眞晝のそれよりも烈しく廣々とした河面一帯に反射して居たが、忽ち燈の光の消されて行くやうに、あたりは全體に薄暗く灰色に變色して来て、満ち来る夕汐の上を滑つて行く荷船の帆のみが眞白く際立つた。と見る間もなく初秋の黄昏は幕の下るやうに早く夜に變つた。流れる水がいやに眩しくぎら／＼光り出して、其の上に浮ぶ渡舟に、乗つてゐる人の頭の一つ一つまでを墨繪のやうに黒く染め出した。堤の上に長く横はる葉櫻の木立は、此方の岸

から望めば恐ろしい程眞暗で、一時は面白いやうに引きつゞいて動いてゐた荷船はいつの間にか一艘も残らず上流の方に消えてしまつて、釣の歸りらしい小舟が處々、木の葉のやうに浮いてゐるばかり、見渡す隅田川は再び廣々としたばかりか、靜かに寂しくなつた。遙か河上の空のはづれに夏の名残を示す雲の峰が立つてゐて、細い稻妻が絶間なく閃めいては消える。(荷風)

夜は逸早くも秋になつて居た。蟬の、秋の先驅であるさまさまの蟲が、或は草原で、或は床の下で鳴き初めた。楽しい田園の秋の豫感が、村人の心を浮き立たせた。村の若者達は娘を捜すために、二里三里を涼しい夜風に吹かれながら、その遅い歩みで歩いた。或る者は、又、秋の村祭の用意に太

鼓の稽古をして居た。その單純な鳴りものゝ一生懸命なひびきが、夜更けまで、野面を傳うて彼の窓へ傳はつて來た。(佐藤春夫)

雨戸を一枚繰つてみると、戸外は、案に相違した空模様だつた。何處を見ても、眞白な綿のやうな雲が一面に浮いて、その隙間からは碧玉のやうに、澄み渡つた蒼空が、ちらちら顔を出してゐる。薄黄ろい弱しい日射しは、その間から斑にこぼれて、その光に照らされるものは、何から何まで、菱角の縁にかゞやく五彩のやうな冷たい色を現はしてゐる。(長田幹彦)

晝の日盛りは、さすがにまだ厳しい残暑の陽光が地上に照りつけて居るけれど、朝夕の涼しさ、殊に夜更から曉頃の身にしみるやうな冷気は、何といつ

ても秋だ。夜毎に天の河の流れが白くなり増さり、夕嵐にさざら波立つ海の色も思ひなしか濃く深くなつた。裏の畑の黍の葉を渡る風も、まるで枯葉でも吹くやうにからく鳴つてゐる。(加能作次郎)

草には未だ露が乾かぬので、歩く度び足の甲が冷々する。グツと尻端折になつて、草の中を踏み分けて行くと、足元から羽虫がビヨイ／＼飛出して、細かな草の實は粉糝のやうに脛へ粘り付く。澄切つた初秋の朝の太氣は冷たく唸に沁みて、深く吸込む肺にも軽い抵抗を覚える。(田村俊子)

新秋九月と云へば、爽々した涼しく物の翻へるやうな、快く人目を刮きさせる感じを興へる。名ばかりの秋の、八月の熱さにわびてゐる間に、いつかその

月も終つて九月になつた。頭を擡げて見た空の色が、何かしら、本當の新しい秋の色になつてゐるやうである。木の葉、草の葉などに觸れる音色が、整つた秋の感じを聴くやうでならない。(薰園)

暫く止んで居た風が又吹き出した。と露を含んだ冷たさが肌に感じられて、袂などもしつとりするやうだ。……ふつと遠くで何か音がした。その響が、しんとした廣い寺の堂で反響するやうに、そこらに傳つて行く。あたりに悲しみを含んで居るやうだ。(葉舟)

裏町にも秋風がたちだした。蚯蚓が鳴いたり敏感な公孫樹が、いち早く散りそめて、毎日森の上に昇る月の位置もだいぶん變つてゐた。(中河與一)

◇仲 秋

秋が深くなつて来た。彼は長らく望んでゐた郊外へ變つて来た。家の前には通りから玄關まで花に包まれた小路があつた。庭には薔薇や糸菊が芒の中に混つて咲いてゐた。苺畑はダリヤの花畑と並んで明る隣りの空地の方へ擴つてゐた。花畑の中には小さな一つの井戸があつた。朝な朝な彼の庭には井戸を中心にして霏が立つた。夕暮れからは霧が野の方から流れて来た。(横光利一)

二三日しとくと降り續いた秋雨もからりと晴れました。深い藍色の空から、秋らしい澄みきつた日光が狭い庭一ぱいに溢れ落ちてゐます。どこかでおか

め蟋蟀が、退屈さうな聲でいい、いい、いいと單調な歌を繰り返してゐるほかには、何一つ聞えませんが、櫻の葉は、もう黄ばんでゐます。なかにはもう眞紅に染まつてゐるのさへ見られます。

『ほんたうに感じ易い木の葉だ。』
私は獨語をいひながら、じつと木の枝を見上げました。(泣菫)

青い空は、澄んだ瞳のやうに葉の落ちつくした木の間から、靜かに覗きこんでゐた。下の窪地には、二三日前に降つた雨が溜つて、浅い水は渺茫たる天空を淋しげに映じてゐる。底には枯れた木の葉が沈んでゐた。折々、夢のやうな白雲が、急しげに日にまし青白く冴えて行く空を走つた。(未明)

窓に薄日がさして、微かな風の音がする。空の澄んで居たやうに、吾々の五感が澄んで沈んで来る。遠くから物の響きが傳はつて来て、自分達の心がこの身體から離れて行くやうだ。幽寂の情が迫つて来る。

(葉舟)

何時の間にか秋が深くなつて、縁の日射しの色が水つぽく褪めかけて来た。さうして秋の淋しさは人の前髪を吹く風にばかり籠めてでもおくやうに、谷中の森はいつも隠者のやうな靜かな體を横へてちつとしてゐた。その森のおもてから目に見えぬほどづゝ何處からともなく青い色が次第に剝けていつた。(田村俊子)

秋は收穫の時であるとして、極めて明るい見方をする人もありますが、私は如何しても秋はうれしい、

◇晩 秋

明るい気分にはなれません。やつぱりぢいつと落ちていて、獨りで思索するに最もふさはしい時であると思ひます。飾らず、衒はず、楚々として咲いてゐる秋の草花を見ると、殊にさう思ひます。(吉田絃二郎)

再び晴れた青空を見ることが出来た時、その青空の色がもう水のやうに澄み盡してゐた。さうして身にしみて冷めたい風が吹いた。(久保田万太郎)

来てとまつた。さうして秋はますます深くなると、庭の土に映る草の影が一層美しくなつて来た。彼の散歩はいつも自分の家の庭の中を一度丹念に廻つてみて、それから芒の群がつた廣々とした野の方へ歩いて行くことであつた。(横光利一)

秋も十月の末になつた。この頃になると、どことなく、そこら一體に哀調が籠つて居て、凡てが冷やかな地の底に吸ひ込まれてしまふやうである。その中でも、光と音とが、とりわけてその心を表はすものだ。(葉舟)

松林の間には午後三時すぎの日影が美しく斜にさし透つて、下の草藪では鈴虫の衰へた聲がする。秋は日に／＼深くなつた。寺の境にひよる長い榛の林が

あつて、其向ふの野の黄ろく熟した稲には、夕日が一しきり明るく射した。鴻の巢に通ふ縣道には、薄暮に近く、空車の通る音がガラ／＼といつも高く聞える。(花袋)

晩秋の日は眠つてゐるやうに静かであつた。生温かな、うす黄色い日の光りが、南向きの窓の障子に當つてゐたが、いつしか音もなく氣のつかぬ間に消えてしまつて、うら寒い灰色に變つてゐた。(未明)

堂の裏にある十數本の楓は、人里離れて居ると高臺である爲とで、頗る色が鮮かである。私は其の下崩れかけたベンチに掛けて、よく長い間煙草を吸つた。直ぐ足許の先は截つ立つた崖で、前望すれば豁如とした眺めである。遙かに田圃を挾んで、東山の北

端の鹿ヶ谷や銀閣寺の裏山と相對して居る。眼の下の田の稻は既に刈られて、株ばかりの凹地には冷たさうな水が薄墨色に溜つて居る。百姓は一人も仕事に出て居ない。市街を一步去つた洛北の晩秋は蕭々たる眺めであつた。(伊藤貴麿)

秋も末のことである。亭はもう厚い木の葉の屋根を失くして了つた。で、今は唯だ遅く芽ぐんだ柔らかな蔓が、僅かに多少の葉を残してゐるに過ぎない。が、その葉の散つて了はない前に、今やいよ／＼去らんとしてゐる夏が、残んの色彩をすつかりそれへ注ぎかけたので、小枝は、まるで赤や黄色の花を着けたやうに美しく垂れ下つて、此處暫らくの間、淋しい秋の眺めに満ちた庭園を賑やかにしようとしてゐる。

(ケラン・前田晁譯)

夜明け毎に、朝は日を追つて鈍くなり、あだかも白い霜の冷めたさに痺れて了つたものゝ如く、悲しげな静寂のもとに、生命あるものはすべて地上から、退潮の遠のく有様に思はれてならぬ。もう光線を出しつくしてしまつたやうなどんよりした太陽が、無限の深淵からのぼるかのごとく輝かな姿を現すけれど、何處か東の方からさ迷つて来た鴉の類ひは、淋しくそのめぐりに輪を描いて飛びまはり、または田野の上を低く長く掠めて過ぎ行き、啼く聲が張りがなくて嘆いて居るが如くである。(レイモント・朝鳥譯)

朝が重なるにつれて愈々寒く、愈々光薄く、裸かの果樹園に煙が低く流れ、小鳥の群は、次第に樹木

を離れて、穀倉の檐の方にせめてもの暖かみを求めに
来はじめ。屋根の棟や枯木の枝にとまつたり、或は
地に翼を觸れるほどに低く飛ぶ鴉の群は、聲が嘎れて、
丁度、近づいて来る冬の挽歌を前觸れでもする意味で
鳴いて居るとしか思はれない。(レイモント・朝鳥譯)

朝が重なるにつれて村人が眼を覚ますのも何う
やらおそくなつて行き、草を喰ひに行く家畜の歩調も
鈍くなる。納屋の扉を開くにも、以前のやうな軋む響
が力が無くなつて、枯れた畑に野良仕事する男達の聲
も、何かに蔽ひ塞がれたやうに生氣が抜けてしまつて
居る。その心臓の鼓動だつても力が弱つてゐるに違ひ
ない。もとより野に出て来ることも時たまで、しかも
畑の上、小屋のまはりなどで、やゝともすれば咄嗟に

ぼつねんと手を休めて、鉛色のどす暗い地平の果をぢ
つと見つめがちである。黄色に變つた牧場で、角のあ
る巨きな頭を、時々、空にもたげて、けだるさうに反
芻を嚙んで居る牛の眼もまた、やつぱり鉛色の、どす
暗い彼方を見る——それは遠い、遠い彼方! 虚ろに
響くその啼き聲が、荒廢の地面を反響もなく消えて行
つてしまふ。(レイモント・朝鳥譯)

こんな時には、よく夕暮れ前に、つめたい雨が
降つて来る。そして時がめぐるにつれて日が暮れた後
までも降りつゞくやうになる。——その長い秋の黄昏
時の夕榮えは小屋の硝子窓に映つて、黄金の花のやう
に燃えたち、荒れた道のぬかるむ水の上に鏡のやうに
倒影を描く——それが、夜なかになると冷たい濕つぽ

い嵐に吹きちらされ、飛沫となつて窓を打ち、果樹園
の樹々の間をわたり、嗚咽するやうな物音をさせる。

(レイモント・朝鳥譯)

到る所で、自然は何かかう望みの絶えた、衰弱
したやうなものを吐いた。地は暗い部屋に坐つて過去
を忘れようと努めてゐる衰へた女のやうに、春と夏と
の追憶で苦しめられて、そして避けることの出来ぬ冬
を平氣で待つてゐるやうに見えた。世界は何處も彼處
も、暗くて、底の知れないほど深い、氷の坑であつて、
其處からは、キリイロフも、アボオギンも、將た又た
赤い半月も、何もかも、逃れる途はないやうに思はれ
た。(チエエホフ・前田晁譯)

牧者と別れて、メリトンは森に沿うて歩いて、

それから、だん／＼沼の中へ沈んで行くやうな牧場を
通つた。水は足跡に湧き、錆色の蘆の葉は踏まれるの
を恐れるやうに曲つた。沼の向うに、ルカ爺さんの話
したベスチャンカの土手の上に、柳が立つてゐた。其
の柳の向うに、青い畑の中に地主の納屋が立つてゐた。
あたりの世界は、やがて陰氣な、避けることの出来な
い時が来て、野は暗くなり、土地は泥だらけで冷くな
り、泣いてゐる柳は一層悲しんで其の幹を涙が流れる
やうになり、鶴だけ獨り此の全體の不幸を免れるが、
彼でさへ、自分の喜びを鼻にかけて、悲しんでゐる自
然を怒らせてはならぬと思つて、退屈な、沈鬱な、歌
を歌つてゐるやうになることを豫示してゐた。

(チエエホフ・前田晁譯)

冬

◇初冬

北の國の冬は思つたよりも早く来て、慌たどしい北風が一夜の中に、落葉松の梢を黄褐色に染めてしまつたかと思ふと、すぐそのあとから凍えたやうな灰色の雲が、海の彼方から、ひつきりなしに流れて来て、夜となく、晝となく、寂しい氷雨がはら／＼と亞鉛葺きの屋根に降り瀧ぐやうな日が、幾日となく續いた。(長田幹彦)

初冬の晴れた朝であつた。日影が半明けた窓障

子から明るくさし込んで、机の上に取りひろげられたその手紙を鮮かに照した。庭の垣根の縁にある茶の花や、紅白の山茶花や、薄霜にぬれた椿の葉や、處々紅葉した楓やが、すべてくつきりと晴れた空の中に見えてゐた。(花袋)

冬は、或日出しぬけに來た。又自然の力が、恢復されたやうに來た。荒々しく來た。或る朝目さめると、ばつと外には、日の光りが、黄金色に輝いてゐた。家の内までも、透きとほるやうに明るかつた。自分床から跳ね起きた。と急に寒さが身に泌み渡つた。(千家元慶)

◇嚴冬

あちこちにひよ／＼と立つた白樺はおほかた葉をふるひ落して、なよ／＼とした白い幹が風にたわみながら光つてゐた。小屋の前の亞麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い莖が青い色を見せてゐた。あとは小屋も畑も、霜のために、白茶けた鈍い狐色だつた。(有島武郎)

木枯が吹き荒んで居る。町といふ町は乾ききつた、油のぬけた色をして凍つて居る。歩いて居る人も皆、首を縮めて着物を重ツくるしさうに着て、目を一つ處にあつめ、せつせと急いで行く。(瑛舟)

向ふに裸になつてゐる棕の大木の間から、測候

所の古びた屋根の上に風見の矢の列が老い剥けたやうに凍えてゐるのが見える。雨の降らない日でも、どんよりした空はいつでも陰鬱に壓へ下つてゐた。わたしの日々の淋しい心持は、丁度その陰氣な空の色に似てゐた。(鈴木三重吉)

着いた朝は空が美しく晴れてゐたが、寒氣は、恐ろしく厳しかつた。寒氣のために、背筋から腰骨のあたりがしく／＼疼きだして、どうしても、じつとして寝てゐられなかつた。ふと眼を睜けると、四邊は夢のやうに薄暗い。蒼ざめた陰鬱な光は凍へついたやうな、板壁の面に朦朧とほのめいて、火の燃え落ちたストーヴの鐵肌は妙に薄白くちろ／＼と光つた。(長田幹彦)

吹き曝したやうな往來の、人の足跡のついたな
りに、かち／＼になつてゐる土の上を、硬い鉋屑の巻
けたのが、吹いてゐるとも見えぬ風に、止り／＼して
は、ころ／＼と小寒く轉がつてゐる。(鈴木三重吉)

雪は層をなして積り、晝と夜は、青かつた。短
い日の出と日没には――藤色を呈した。蒼白く弱々し
い太陽は、やつと地平線上に現はれて、三時間ばかり
停まつてゐるのみで、いかにも遠く他所々々しく見え
た。残りの時間は夜であつた。夜は極光が落着かぬ
線條を投げた。嚴寒は、到る處に氷柱を懸ける乳のや
うに、白い霧となつてさまよつた。砂漠の如き静寂が
あつた、それは死を語つてゐた。

(ピリニヤーク・平岡雅英譯)

◇歳暮

ローン河の低地を蔽ひ盡す冬の雪に包まれて、
日頃は眠れる如くに寂としたリヨンの市街も、今日は
さすがに行く年の、夕暮近くからは、殊更に、さまざま
まな街の物音、さながら夜半の嵐、夕の潮の吹ゆるが
やうに、薄暗い五階目の、閉切つた吾室の窓まで、響
いて來るのであつた。(荷風)

永遠の叫びを上げる水音の中に、自分は遙か彼
方の、市廳の大時計が、千九百〇七年を葬り去る十二
時の鐘を聞いた。一つ二つ打ち出す鐘の音は長く／＼
……自分が遅い歩みで、廣い橋を渡り盡しても、最後
の十二度目の鐘は猶ほ打ち終へなかつた。(荷風)

一年の日が今日で終るといふ夕暮に、空が青く
澄んで、高く見上げる眼から胸へ寒い光りが傳はる時、
いかに虚心でゐても、一年の中の彼の事此の事が、閃
くやうに感ぜずには居られぬ。(薰園)

角の呉服店では、屋根に澤山の電燈をつけて、
赤い布で表を飾つた下にいろ／＼の柄のモス友禪など
が下げ塞がれて、華やかに目立つてゐるけれど、たゞ
この近所の汚ならしい女の子たちが、蓄音機の音に集
つてゐる外客足もない。交番の横手に、鮭の切
身を賣る屋臺店の前に、貧しさうな女たちが子を負つ
て立つたりしてゐる状が、いかにも場末の町のせちが
らい年の暮らしくて小寂しい。(鈴木三重吉)

祭禮

の注連繩が引いてある。酒屋や青物屋の賑やかな店に
交つて、商賣柄でか、綺麗に障子を張つた表具屋の、
ひっそりした家もある。どれを見ても年の改まる用意
に、幾らかの潤飾を加へて、店に立ち働いてゐる人
さへ、常にない活氣を帯びてゐる。(天外)

祭禮

長阪の旅所のひろい庭では、冠をつけた神官達
が、悠揚迫らざる笙や、箏の調子につれて、昔の東遊
びの舞踊を舞ひ、僧は僧で、その山特有の一種古雅な調
子の足取りで、その大きなひろい裾を翻して見せた。
その旅所の廣庭――それは平生は全く人氣なく暗く

閉ざされてあるのであつたが、その日ばかりは晴れやかに、さながら遠い昔のある一日が俄かに再びそこに蘇つて来たかのやうに、今の世とは全く異つた色彩と気分とをあたりに漂はせた。白い袖の長い衣服、冠の高く翹つた人達の姿、笙の音の静かな調子、もし其處に、それを見物する群集の中に、眞紅のバラソルをかざした肥つた外國婦人が雜つてなかつたならば私達の心は、遠く千年の昔の世に夢のやうに誘はれて行つてしまつたに相違なかつた。(花袋)

村祭といふと私は直ぐに神樂を思ひ出すと同時に、あの夢畑のなかに立てられた白い幟を思ひ出す。あの幟の風にはためく音は子供の心を新しくする。遠い森を背景にし、麥畑か茶畑を前景にした幟のしろさ

はほんとに子供の心を漂白してくれる。(夕暮)

花飾りをした網代車がぎい／＼と軋音をたてながら牛に曳かれて練込んで来た時には、私達はもう片唾を呑んで見入らずにみられなかつた。そして午さりの明るい日射しに照り映えるさまざまの衣の色彩や今の時代にあるまじいゆるやかな足なみや、冠につけた葵の葉の風にゆらぐ様を見入つてゐるうちに、私達はいつしか我を忘れて、大宮人が櫻かざして夢を見てゐた平安朝の長閑けさのなかへ引き入れられてしまつた。(長田幹彦)

墓場を片側にした裏町には赤提燈の灯がところどころに表の賑やかさを少しちぎつて来たやうな色を浮べてぼんやりと滲染んでゐた。その明りの蔭に白い

浴衣の女の姿が媚いた袖の靡きを見せて立つてゐた門もあつた。(田村俊子)

鼻の先の金色に光る獅子の後へは同じ模様衣裳をつけた人達が幾十人となく隨つて、手に手に扇を動かしながら、初夏の日の當つた中を揃つて通りました。それ獅子が来た、御輿が来たと言つて、子供等は提灯の下つた家の門を出たり入つたりしました。(藤村)

提灯や旗が家々の軒を飾る。玩具屋が店を擴げる。風船屋が通る。太鼓が人々の歩調を揃へる。蓄音器が行く人々に忘れてゐた唄を思出させる。叫ぶ聲や笑ふ聲が街中を急にひろびろさせる。お宮は、菓子屋と、おでん屋と、見せ物小屋と、そして人で一杯である。樂隊の音、お神樂の音——(飯田豊二)

第二章 植物

春の植物

◇櫻の花

柔かい褪紅色の煉瓦、沈鬱な灰青色の窓、玉冠の縁邊に似た白煉瓦入りのゆるい窓上の曲線——それらをうしろに、胡粉に薄べにを溶いたやうな、白粉の女の酔つた眼もとのやうな放漫な櫻の花が、飽き狂うたやうに咲いてゐた。(藤森成吉)

天蓋のやうに枝を低く差しのべた櫻の木、す

つと伸びた若木の枝は幾つも蕾を出し、其一つのふくらんだ蕾には褐色の萼が鋸のやうに切れて、淡紅い花瓣はまだ巾着形につぼんでゐるが、頭の所は僅かに白く綻びかけてゐた。それが暖かい香ばしい匂ひに満ちた空の中、静かに呼吸を續けてゐる、上の方では青い空が蕩けるやうに笑つてゐる。(星湖)

ふと眼の下に咲き匂ふ地主櫻の美しい姿が眼に入つて来た。此處から見ると、この花の姿は又格別でぢつと見つめてゐると、白い泡沫のやうな花の塊が、もくもくと谷の底から湧き上つて来るのではあるまいかと疑はれる。月の光は飽迄も鮮かに、その花の色に牙えて、ともすると、そこに示現してゐる花の姿が、夢中に送る幻のやうに、渦巻いて、觸つたら、消えもし

かねまじいあえかさを見せてゐる。(長田幹彦)

軒近くに咲き亂れてゐる一本の乳色の櫻の花は風もないのに、散つて、濡めつてゐる地面にひたりひたりと食付いてゐるのやら、たどどんよりと白く梢に身動きもしないで、風の來るのを待つてゐるげな風情なものもある。(未明)

始めは一片と落ち、次には二片と散る、次には數ふるひまに只はらくと散る。此間中は見るからに萬紅を大地に吹いて、吹かれたるもの地に届かざるうちに梢から後を追うて落ちて来た。忙しい吹雪は何時か盡きて、今は残る樹頭に嵐も漸く収まつた。星ならずして夜を護る花の影は見えぬ。(漱石)

◇椿の花

深山椿を見る度に、いつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣りよせて、知らぬ間に嬌然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃は既に遅い。向う側の椿が眼に入つた時、余は、えゝ見なければよかつたと思つた。あの花の色は唯の赤ではない。目を醒ます程の華美の奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。(漱石)

見てゐると、ぼたり赤い奴が、水の上に落ちた。静かな春に動いたものは只此の一輪である。しばらくすると、又ぼとり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、固まつた儘、枝を離れる。(漱石)

老いた椿が崩れた塀の直ぐ側に高く突つ立つて一つの木に赤い花や、白い花や、紅白染め分けの花を着けてゐた。形を崩さずには落ちた花が根方に堆かく繪の具を棄てたやうに見えた。(小剣)

◇梅・桃の花

このかすかた梅の匂ひにつれて、牙え返る心の底へ、しみ透つて來る寂しさは、この云ひやうのない寂しさは、一體、どこから來るのであらう。彼は、青空に象徴したやうな、堅いつめたい花を仰ぎながら、何時までも、ぢつと佇んでゐた。(芥川龍之介)

窓から眞面の火影を浴びた紅梅と、今一株枝の張つた古木の梅が、虚池の向ふの植込の闇を白々と咲

匂つたが、折々風が来て、パツと香を散らすと、常盤木の群は、争つて、それを吸合ふやうに、ひしめいてゆれた。(風葉)

古き伊太利亜の戀を思はせる天鷲絨の光澤を誇つた薔薇の花の紅でもない、また近世的詩人が青春の血の滴りかとも思はれる水晶のやうな柘榴の實の紅でもなく、恐しき墮落の女性の、重苦しき惱みの色のダリヤの紅でもない。桃の花の紅は、唐縮緬の昔からある極つた模様染色の唯うつくしく戀知らぬ日本のムスメのあどけなさを歌つてゐるのだ。(荷風)

さういふ風が幾日もく吹きつゞいて、やつと穩かな晩春の日にかへつた時に見出した桃の花は、どうなつてゐたであらう? 咲いて、咲いて、咲き揃つ

て、そして、散つてしまつたか? 否、否、否。實に驚いたことには、大きい梅の木の花が散りきらずに、そのまゝしほみついたと同じやうに、この桃の蕾も咲ききらずに、そのまゝ固くしほみついて、すつかり色が變つてしなびてゐた。(前田鼎)

菜の花・其他

黄色い菜の花が織物の地で、白い梨子の花は浮織りになつてゐるやうだ。殊に梨子の花は密生してゐない。其粗い隙間から菜の花の透いて見えるのが際立つて美しい。(蘆子)

薄暗い道の兩側は菜の花が灰白く、其花の匂ひが夕風の靜かな空氣にしつとりと漂つてゐる。花の薫

といふよりは、寧ろ野の匂ひである。(風葉)

振り廻した杖の先の盡くる、遙か向ふには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には、薄紫の遠山を漂渺のあなたに描き出してゐる。(漱石)

障子があけはなしてある座敷越しに、遠く田圃向うの畑を見渡すと、菜の花が黄いろく咲いてゐる。その菜の花のなかを大きな人の頭が動いてとほる。その人の頭が此方を見て鳥渡お辭儀をしたと思つたら、つと見えなくなる。するとそのあとから白い手拭をかぶつた若い女が矢張りお辭儀をして行く。(夕暮)

高い松の梢に絡はるやうに咲いてゐる藤の花を

眺めた。藤の紫の花は、青空へ向いて心高く咲いてゐた。と見ると、此方の杉には白い藤の花が咲いてゐた。上から垂れ下つてゐる花房に暮春の薄日が滲んでゐた。(薰園)

青い木の葉がくれ、或は青草に交つたりして、躑躅の花を見るのは、色の單調に飽いた眼に、ゆかしい感じを持たせる。其の紅いものにも、白のものにも、又黄ばんだものにも、すつきりとして爽やかなところに、人を惹き付ける趣がある。(薰園)

田の畔には、茅花がほほけて、きんぼうげや狐の牡丹が黄いろい金平糖のやうな花をつけてゐる。すかんぼも紅い穂を出して、風に吹かれてゐる。(夕暮)

◇春の草

そこには鹿が喰べ均しでもしたやうに、綺麗に短かく生えた小さい芝生があるのであつた。丁度大名行列の毛槍が並んだやうに、傘を疊んだ形の、紫の粒々のついた草花が列をなして生えてゐる。

(鈴木三重吉)

秣場はまだ黄色くつて、たゞ日當りのいゝ草地の此處彼處にいくらか緑の色が見え出してゐたばかりであつた。けれども、若し諸君が地面の上に横たはつて見たならば、其處に無数の小さな芽生——濃く密集したのや、緑色の縫針のやうに細いのや——が、おづおづと頭で土を押し上げてゐるのを目にすることが出

来たであらう。所が冷たい北風が無残にも其の上を吹き拂つたので、尖端は黄いろく色が變つて、また這ひ込みたがつてゐるやうに見えた。けれどもそれは出来なかつた。で、ちツと静かに待ち構へて、たゞ眞晝の太陽の輝く時にのみ少しづつ芽を伸ばした。(ケラン・前田晁譯)

そこで無限の活動が始まつた。あらゆるものが後れてゐたので、一時に失はれた時間を取返さねばならなかつた。花瓣は膨らみ切つた苔を破つて小さな音を立て、飛び出すし、大きな芽生や小さな芽生は不意に一齊に突進した。彼等が今は右、今は左を、迅速に莖を押し出すさまは、さながら緑色の足で蹴りつゝあつたかのやうであつた。秣場は花と雑草とで燦爛と飾

られ、海の方にだらだら下りになつてゐるヒイスの生えた荒地は明るくなり初めた。(ケラン・前田晁譯)

夏の植物

◇牡丹

花が……温室の渦を巻いて居る蒸發の中で、様様の草や木の葉が緑の色を廣げて居る中で、深紅の牡丹の花が呼吸をしてゐる。燃えるやうな呼吸をしてゐる。脈膊の高い激しい興奮の爲めに絶間なく戦慄して居る。息苦しさうな。……花は、その瓣の燃えて居る力の爲にあえいでゐる……(葉舟)

牡丹

花は其の命のまゝに咲いて居るのだ。かう思つて居る時に緋の牡丹の花が少しゆらいだと思ふと、はらりと散つた、散つた花瓣が地の上に重なつて、其跡に二つに別れた、子房が緑色をして顯はれた。そして、其周圍に、老い凋れた雄蕊が着いて残つて居る。牡丹の散つた時、私は花の散る音を聞いたと思つた。それは耳に聞えた音ではあるまい。心に響く響であらう。しかも天地に響き渡る音のやうであつた。(葉舟)

次第に夜が恐ろしく花の肌を刺して来る。この屋根を包む闇の中には、乾いた刺すやうな寒さがある。その痛さが……花の熱い呼吸をして居た瓣の上に縮み上らせるやうな、針を刺す痛さがいつとなしにこの花を襲ひはじめた。その寒さの針にさゝれた折ふしに、

全身が支へられないやうに痙攣をしまじめた。この時には一秒毎に移つて行く時の姿が明かに見える。……いや、一秒を百にも千にも割つた時の脈を打つ姿までが花には感じられる。(葉舟)

見る見るうちに花瓣は膨れ上る。新しい光澤のある大きな瓣の相抱いてゐたのが手をゆるめる。去年の冬より籠めに籠めた力が此一時に發現するやうに花は満身の力をこめて開く、今迄葉蔭にあつた苔は程なく一本の枝頭に大きな黄金の盤と輝いて、其苔をかくしてゐる二枚の葉は三枚の瓣のために忽ち壓伏される。(虚子)

◇薔薇

彼は一つの謙遜な製作にとりかゝつた。それも矢張り薔薇であつた。一輪の薔薇が風もない静かな庭の中で身を慄はせた。見ると一枚の花弁が草の葉の上に落ちてゐた。彼はその後の静かな淋しさを畫きたかつた。一枚の花弁を失つた姿の花が俯向いて咲いてゐる。たゞそれだけの單純な心境が彼を牽きつけたのだ。彼にはその薔薇の何の意味もない默然とした感興が、色彩の華やかなそれだけに淋しくて面白かつた。(横光利一)

薔薇の花を盛りあげたコツプを手にとりあげた。最初は、それを目の高さには持上げて、コツプを透

して見た。緑色の葉が水にしたされて、一しほに緑だ。葉うらがとところどころ銀に光つてゐる。そのかげ

にほの赤い刺も見える。(佐藤春夫)

大きな瓣は卵色に豊かな波を打つて、夢から醒

れるやうに口を開けたまゝ、ひっそりと所々に静まり返つてゐる。香は薄い日光に吸はれて二間の空気の裡に消えて行く。(漱石)

花で蔽はれた大きなばらの木が、テラツスから彼女の窓まで届いてゐて、それが、甘い、柔らかな香を夜の中へ、そよ吹く風に漂はせて吐いてゐた。で彼女は暫くの間ちつとそれを吸つてゐた。上弦の月が暗い空に浮んでゐた。左の方は幾らか咬み切られて、そして時々薄い霧に蔽はれた。(モウパッサン・前田晁譯)

薔薇、薔薇、到るところ薔薇である。あるものは紅血に、あるものは着白く、純白に、またあるものは深紅の條を引いて居る。墓碑も、小徑も、既に葬られた場所も、やがて葬らるべき地面も、すべてこれ等の花で覆はれて居る。その強い花の香は、眩暈を起させ、頭や足をふらつかせる。(モウパッサン・孤雁譯)

◇月見草・其他

丁度今から二十分ばかり前には、この黄昏の斜光はまだ明かに白くあたりを見せて居た。たゞ光から来る熱はすっかり衰へて居て、土からは俄かに水蒸気が盛んに立ち始めて来た。それにどこからともなく、暗が溶け込んで來始めた。白い光は微かな黄い暗色を

帯びた冷い光に成り、それに次第に闇が深くなると、光は乳色をして来る。この秒と分との間に、月見草の花は長い鞘形の萼の上の端の方に、内のものがふくらんで押し上げて来る。其の中には急速な呼吸が始まつたに違ひない。柔いものに俄かに強い呼吸が起つて、その力で細胞が動き始めて来た。(葉舟)

路の両側を縁取つて、いたどりが長く伸び、頂きに薄白く穂のやうな形の花をつけてゐる。水に近く月見草が砂地に生えて、下葉々々は波に咽び、寄する波に一樣に陸に向ひ、引く波にまた水に向ふ。夕月の下に湖の縁を繞つて咲いてゐる此等の花の連なるのを眺めたならばと思つた。(孤雁)

向ひの土手のしつとりと濕つた青草の中に、黄

色い月夜草が群つて咲いてゐる。その先に遙かに續く鹽濱の、黒ずんだ砂の色もしめやかな朝である。向うの方でその砂を掻いてゐる人の形が、二つ三つ、黒く小さくなつて見えてゐる。(鈴木三重吉)

机の隅に方二寸ばかり押しあけて、一輪の雪白の芍薬が挿してある。昨日の午後切つて来て、今朝少し萎えてゐたが、切口を焼いて挿し直したら、また勢ひがよくなつた。まつ白な花瓣から葎にかけて、小さな黒蟻が二疋あちこちしてゐる。(牧水)

長い山路を辿つて来て非常に疲労した時、不圖、傍らの叢の中に一本の百合の花が、暑さを忘れたやうに、すつきりして爽かに、咲いてゐるのを見出すと、急に新しい戀人を發見したやうに感じて、ちつ

とその方に眼を向けた。(梅溪)

「さいなら」「さいなら」と叫びながら、各自京への土産に川かみから折つて来た卵の花の束を高くささげてそれに答へた。弱々しい白い花瓣ははらくと雪のやうにこぼれて、見送る人々の影は漸次と闇につつまれて行く。(長田幹彦)

一つしか點してゐない置ランプの薄ぼんやりした灯に、畫の手の本の切らしい、紅葉葵の花の赤いのが哀れつぼく目立つてゐる。禮吉には哀れを帯びて見える色が何だか自分とおとわとの戀の色のやうに小さく見入られた。(鈴木三重吉)

栗の葉の先が長く少し垂れたやうになつてゐる。その梢に丁度花が咲いてゐる。ぼつと白っぽい黄

色に淡く、しかし鮮かな色をしてゐる。(葉舟)

菩提樹の下は涼しくて静かであつた。飛んで居る蠅を蜜蜂も、この木蔭に来てはその聲をひそめらる。金色の影もさゝない濃緑の鮮かな草の葉が、風にも靡かないで立つて居る中を、丈高い花の莖が、恍惚としたやうに静かに垂れ下つて居て、その甘い香りが息づく毎に腹の底までも流れて行く。腹も渴いたやうにそれを吸ひ込むのであつた。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

一本ぬき、二本ぬき、五本六本と今は兩手に握りきれない程の茅花の穂を抜きとつたので、私はふところになでこんで、猶一心になつて抽いてゐる。いくらか抽いても抽いても日に光る茅花の穂立が減つたとは

思はれぬばかりか、あとからあとからついついとあらはれてくるやうにさへ思はれる。そして、私の小さい體が埋もれてしまひさうにさへ思はれる。

私はぼつとなつて見廻した。地ほこりのした南風が林の方から野を越えてくると、日がゆらゆらと揺れて前もうしろも見限りは銀いろの波の光りの盛りあがりである。(夕暮)

若葉・青葉

草も木も一齊に生ひ立ち、芽をうみ、葉をつくらうと生き生きと努力してゐる爽かな周囲のなかに、彼はしづかに生物の營みの聲を聞いてゐる。じぶじぶと草の根がぬるんだ水を吸ひあげてゐるのも此える、

若い葉がちらちらとうまそうに光を吸つてゐるのも聞える、彼はうつとりしてゐる。(藤森成吉)

(佐藤春夫)

新緑が日に光るそれが……葉間から洩れて其處等を歩いてゐる人達の肩に落ちる。地上に濃淡の縞をつくる。樺の若葉、槐の若葉、楓の若葉、それがざわざわと重り合つて、涼しい影を其處此處に布いた。公園だけに、塵一つないほどにあたりが綺麗に掃除してあつた。(花袋)

何處を見ても、若葉の緑は、洪水のやうに漲り溢れて、日の光に照されるその色の強さは、閉めた座敷の障子にまで反映する程なので、午後の縁先などに向ひ合つて話をする若い女の白い顔をば、色電気の中に舞ふ舞姫のやうに染め出す。(荷風)

私は、屋根に匍匐して棟の方に登りはじめた。しつとりと濕つた古い萱屋根の表面は腐つて、軟い堆肥を踏んでゐるやうだ。青い草や木の葉が一面にうつすらと生え、なかには二三年生えの栗の若木が、眼ざめるばかりの鮮緑な若葉をひろげて、風にゆらいでゐる。

私は、まるで岡のやうな屋根の草を冷たく踏みつけて、頭の上に、ともするとひやつと觸れさうな空を感じ

じながら、静かに上の方へ、上の方へと登つて行く。(夕暮)

重く水蒸氣を含んだ空気が濺んで動かない。あたりがどんより濁つて居る。青葉はしづれて、次第に黒ずんだ色に見える。遠い市街の方から響いて来る汽笛が、倦く耳を打つ。(葉舟)

雨は折々降り止む。すると、空は無論隙間なく曇りきつて居ながら、日が照るのかと思ふ程に明るくなつて、庭中の樹木は茂りの軽重に従つて陰影の濃淡を鮮かにし、凡ての物の色が黄昏の時のやうに浮き立つて來るので、感じ易い心は直様秋の黄昏に我知らず耽るやうな果しの無い夢想に引き入れられる。(荷風)

でもゐるやうにびつたりと小枝に引つ着いて、自分を可愛がつてくれる日光の中に物なつかしくそよ／＼と戦いてゐたこまかい緑色の若葉が、いつのまにかすつかり大きく黒ずんでしまつて、どれも／＼恐しく尖げ尖げた鬼葉になつてゐます。(田村俊子)

正面の崖の裏白羊齒の廣い葉は、六月の日に心持汗ばんだ緑に濡れて、水に影を浸してゐる。その羊齒の葉に重つてなびきあつた篠竹が、雨あとのしつとりとした空気を感ぜ、しなだれかかるやうに梢を撓つて、水に近々とのぞいてゐる。その上は靄つぼい光に霧つた靄空が遙かに行きわたつてゐる。(夕暮)

私の足もとには、石菖の葉がつんと鼻にくる神經性の香氣を秘して、葉さきに露をふくんで、青く隙

間なく生えてゐる。うしろは、ひいやりとするほどいつばいに草の盛りあがつた大屋根である。屋根ではあをいがないて、草のほひが空にわきのぼる。(夕暮)

すべての樹は、土の中ふかく出来るだけ根を張つて、そこから土の力を汲み上げ、葉を彼等の體中一面に着けて、太陽の光を思ふ存分に吸ひ込んで居るのであつた——松は松として生き、櫻は櫻として、槇は槇として生きた。出来るだけ多くの太陽の光を浴びて己を大きくするために、彼等は枝を突き延した。

(佐藤春夫)

秋・冬の植物

◇木 犀

外を出歩くと、どこからともなく木犀の匂ひの燻つて来るのもこの頃です。日あたりのいゝ路の片側は温もりながらも、日蔭になつた片側は冷々とした付近の大氣に、煙のやうに漂よつてゐるこの匂を嗅ぎつけると、誰でもが、

『あゝ、木犀だ。もう木犀が咲く頃になつたのかな。』と、いくらか苦味のあるその匂ひを、胸一ぱいに味はひながらも、別段どこぞといつて、花の在處を詮索しようとは思ひません。それは一つには、木犀の木は

花が細かい上に、葉が無表情で硬つぱしくて別に見どころがないのにもよりますが、一つにはまた、その香度が高くて一本の花の匂ひは一丁四方にも達くので、ちよつと爪立ちをして垣外から覗き込んだぐらゐでは木の在處を突きとめることが出来ないのにもよることです。(泣菫)

十月の晴れた日の午後、静かな大氣にこの花のぶんぶん焚きこめてゐる匂ひのなかに立つと、日光も、路の小石も、乾からびた牛の糞も、高い鶏の聲も、通りがりの主婦さんの笑顔も、さては一寸した自分の考へ事までも、みんなこの花の匂ひが滲み込んでゐるやうに感じることがあります。そんなときには、どうかすると、この木のもつてゐる微かな脈膊をすら、

私達の氣持に感じることがあるのです。ほんの一瞬間ですが、さういふ感應はなかく忘れがたいものです。(泣菫)

◇コスモス・其他

森の梢の赤い葉、黄色い葉が凋落の一瞬前を引きちぎまつてじつと動かすにでもゐるやうに僅かな風ののよきも見せず居る。静寂な、際限のない、銀色に塗りこめた廣い平野のところどころに、薄赤いコスモスの花がひよる高くもつれて中間に匹田紋を散らしてゐる。(田村俊子)

私の佇んだ杉垣の角に、コスモスの花が、もう咲きしまひらしく覗いてゐた。私は、そのほろ／＼し

い淋しい花の下に立つて待ちあぐんでゐた。

(鈴木三重吉)

つゝましい、小さな紫蘇の花が白く咲いて、その紫蘇の穂が毎日のやうに寸を伸ばして往く頃となりました。

この頃、紫蘇の匂ひを嗅ぐと、それとなく一味の悲哀が胸に滲み入ります。その悲哀は空高く掌面を擴げてゐる喬木のものではなく、地べたに腹這つてゐる草のもので、その根は深くつめたい大地のなかに曳いてゐます。

土の悲しみ。

仄かなその悲しみのうちで、聲に出して歌へるものは昨日まで草にばかりそれを歌ひました。歌ひ残して

あるものは、蟋蟀が金の鈴を轉ばすやうな聲で、今それを續けてゐます。唯しづかな無言でなくては現はしきれない悲しみだけが、残されて紫蘇の匂ひに滲み徹つてゐるのです。(泣菫)

前の日、一寸土手の野草の花の中で逢つた女の子が、その翌朝、私の生籬の向うの畔道を彼方行き此方行きしてゐる。可憐なその子の姿が見えたので、何をしてゐるのかと眺めてゐると、その子が、やがて私の門口に来て、小さな白い菊花植物の花束を、その花だけ出した。さうして、上げませうと差し入れた。(白秋)

殆ど全部ダリアの花で埋つてゐた。華洲園と書いた木札の立つてゐる入口の軽い傾斜の坂道を登るとばらくと並んだ稚松の間から、廣い花園の一端が見

えそめて、やがて露を帯びたその花が、山深い湖のやうな静けさで、身のめぐりに咲き亂れてゐるのを見るのであつた。(牧水)

静かな庭に寂しい山茶花の咲いてゐるのは一層閑寂の心持を起さしめる。建仁寺垣よりも一尺ばかり高い樹に、眞白に少し薄紅を潮した、一重の花が二十ばかり濃緑の葉に混つて着いてゐる。枝が硬いから少しも風には動かない、さうして静かに、澄んだ黄金色の光線を浴びてゐるのが、さながら漆器に螺鈿を嵌めたやうだ。(秋江)

◇秋 草

萩が両方から蔽ふばかりに咲いてゐたり、桔梗

の深い紫の隣りに、芙蓉の優しい花が咲きまじつてゐたりしてゐた。秋草の中に湛えられた池も、古雅で静かであつた。(花袋)

黙つて薄の中に身をひそめてゐると、先きへ行つた人の薄を分ける音が、びしびしと聞えてゐるが、それが、かすかに遠くなつてしまふかと思ふと、後は何の音もない。すつ、すつと薄の葉が微かにすれ合つてゐる。(孤雁)

高尾山から、裏の薄原の中を分けて、二里半ばかりの小徑を下つて、相模の國へ出るのが面白い。身長よりも餘程高く、薄が一面に密生してゐて、身をかがめて見れば、その密生してゐる薄の下に、野龍膽が秋の名残を見せて咲いてゐる。(孤雁)

その老いた屋根の上に生えた草の、からくりに耄うけたのから、鳥の生毛のやうなものがふはくんと飛つのが、その時、梯子の下に淋しく佇む私の上を力なく落ちて、薄い黄昏の中に見えなくなつた。(鈴木三重吉)

芝草は、やや勾配をなして牛乳屋の屋敷を圍む小丘の上に、濃淡もなく小さな丈を立ち枯れて、心軽ろげに火の來るのを待つてゐるのであつた。たゞ、その近くに、深く枝を森り籠めた椎の古木が、蹠と幹をのべて、二三本押しかたまつて樹つてゐた。二人は小さな落木の枝をばちりばちりと折つてはそこらこゝらに火を移した。やさしく燃え移る火は、さわさわとわけもなく、こなたかなたに燃え廣がつて行つた。火

をむかへるに従つて、枯草の葉は、くるりと心地よい音を立てつゝひよい／＼とかじかまつて行く。そしてチーンと黒い炭の草になつてしまふ。ゆらゆらと漂ひける薄ら白い煙の中には、波浪のやうに動めき煽る晴々しい香があつた。(原田實)

◇ 稻

稻の穂は、北が吹けば南へ向いたり、南が吹けば北へ向いたりして、その重さうな首を休まず動かしでは、さら／＼と寂しく笑ひ始めた。(長塚節)

深い青い空の下に、黄色につらなつてゐる稻の色は、平和な、濃い日光に包まれて、古い遠い代のやうな裕けさが漲つてゐた。(鈴木三重吉)

稻

九月も半ば過ぎた。稻穂は種々で、或物は薄の色に見え或物は全く草の色、或物は紅毛の房を垂れたやうであるが、その中で濃い茶褐色のが糯を作つた田であることは私にも見分けがつく。(藤村)

◇ 紅葉・落葉

紅葉は、山の上よりも、寧ろその谷間の方に多い。さうして日本の楓樹と大分枝振りを異にしてゐる。太い、幹の眞黒な、ぶつきらぼうな、豪壯な大木が、此處彼處に柱の如く、ぼつりぼつりと立つてゐる。其の幹の縁に紅葉が紙を刻んだ如く、ちら／＼と着いて居る。(谷崎潤一郎)

林の中は、物の燃え盡したあとのやうにからツ

として木の葉の一つ一つがこまかくと金色に縮れを作つてゐるのでした。さうして風の吹く度に木の葉は金箔を散らすやうにざわ／＼とゆれてはその色を砕いてゐました。(田村俊子)

❖ 溪に、差し出た枝は、もう、ところどころ葉が赤くなつてゐた。霧と、風が、染みて早く色づいたといふよりは、溪のうす暗い底の方から、絶えず響いてやまない、石に激する水の聲に醒されて色づいた。

(未明)

❖ 温泉は湯壺の形をなしてゐるばかりで、屋根も何にもなかつた。その上には、紅葉が一杯に散つてゐた。私はその紅葉をかき分けて、谷川から透徹るやうな綺麗な水を汲んで来てうめて、その中に身體をつけ

た。(花袋)

❖ その度毎に、破れた蓮の葉は、ひからびた莖の上にゆらく動く。其の動きを支へ得ずして、長い莖は已に眞中から折れてしまつたのも澤山ある。揺れて觸れ合ふ破れ葉の間からは、殆んど聞き取れぬ程低い弱い、然し云はれぬ情趣を含んだ響が傳へられる。河風に吹かれる葦の戦きとも、時雨に打たれる木の葉の叫きとも違つて、それは暗い夜、見えざる影に驚いて埒から飛び立つ小鳥の羽音にも譬へよう。生きた身が聞分けると云ふよりも衰へた肉身にひそむ疲れた魂ばかりが直覺し得る聲ならざる聲である。(荷風)

❖ 不圖、気がつくと、電車の線路に沿うて、何か小さく、丸くなつて、かさこそと走つて行くものがある。

る。よく／＼氣をとめて見ると、砂塵の中にまじつて柳の落葉や、銀杏樹の葉や、榎の葉が、小さな一團をなして、今まで線路に沿うて眠つたやうに横たはつてゐたのが、けた／＼とましく電車が走つて来たので、目を醒まし、頭を上げ、競争するやうに、駈出したのであつた。細長い柳の葉と、扇面の形をして深く切れ込んでゐる銀杏樹の葉と、楕圓形の榎の葉とは、我先きに争つて、こけつ、まるびつ、砂塵を立て、砂塵を浴びて、一團となつて走つて行く。(孤雁)

❖ 雑草の延びたいだけ恣に延びて衰枯れた垣の内には、夜の間に後の山から吹き落された榎の枯葉がばさ／＼と散り亂れてゐる。わざと私を陰気にさせるためのやうに、變に濁り淀んだ空の色は、いかにも私

が、かういふ寂れた村に何の理解もなく剝げたやうに住まつてゐるのを味氣なく思はせた。(鈴木三重吉)

❖ 少しづつ動いて来た風は、やがてから／＼に乾ききつたやうな音をたて、高い梢から落葉をふり落して来る。人の去つたがらんとした廣場には、地に敷いた落葉が右往左往に迷ひ歩いた。(長田幹彦)

❖ おや——と、私は思った。「斯んなに晴れ渡つた好い天氣だといふのに可笑しいな？ 雨なのかしら？」屋根に、ばらばらと小粒の霰が鳴るやうな音を聞いて私は首をかしげた。

脊伸びをして外を見ると、それは落葉が屋根に散る音だつた。そんな音に氣づいたのは初めてだつた。——屋根は、見るからに軽々しい亜鉛板で葺いてあつ

た。生々しい白い薄つべらなトタン葺だつた。だから、落葉のあたる音までが、その下に住んでゐる人の耳に雨のやうに蘇やかに聞ゆるのであつた。あたりには落葉樹が多かつた。朝夕、狭い庭は孤色の木の葉で深々と埋まつた。(牧野信一)

日のあたたつた往還が水をかけられたやうに、さつとうす暗くなつたと思ふと、忽ち眼がさめたやうに明るくなる。木の葉が光つてとぶ。日光のなかを編目をなしてとぶ。太陽の破片がとぶ。空が皺んで、その皺んだ空の一部が吹き捲られて、さつと地に落ちる。(夕暮)

折々坊主になりかけた高い樹の枝の上から、色の變つた小さい葉が一つづゝ落ちて來た。それが空中

で非常に早くきり／＼舞ふ……それが容易に地面の上へ落ちずに、何時までも途中で、ひら／＼する。(漱石)

鳥は樹々の枝に歌をうたひ、梢におとなう風のそよぎも夢見心地で、時々はらりはらりと丁度黄金の蝶々のやうな枯葉が舞つて落ちる。その一枚二枚が道の上を風にあほられたり、日に向けて涙眼を見開いたやうな花を持つ薔の繁る上などに引つかゝつたりする。ポプラの樹々はお互に話をしあつて居るものの如く枝をたはめ合つては柔かに私語くと思へば、また森閑と静まる。(レイモント・朝鳥譯)

落葉は四邊に吹き散らされてゐる。亭の直ぐ前には、風が念にも念を入れて吹き集めたごとく可愛葉ばかりで、小ツちやな木の葉の山をいかにも恰好

樹木

◇柳

よく盛り上げた。(ケラン・前田晁譯)

窓の先の柳の芽が、日一日と大きくなつて來る。其大きくなり工合を毎日見てゐると、思つたよりも遅々としてゐるのに氣が付く。でも何時の間にか、淺黄の小さな膨らみが大きな緑色になつて、やがて青々とした、いかにも春を思はせるやうな色を着けて來る。ぱつと華やかに咲く櫻の花などを思ふよりも、ガスの光りを青く映す柳の垂れた枝を思ふ方が、すつ

柳

と爽かな感じを覚えさせられる。ひらりと飛ぶ軽快な燕の姿を其處に見るのももう間のないことであらう。(前田晁)

柳の枝は、軽く柔かく垂れ下つてゐる。そのこまかい、しなやかな葉は、無数に群れてその樹の形を圓くして見せてゐる。葉の色は微かに緑のかゝつた緑で、それにこの街の燈火がまっはりついて、ぼつとした白さをさせてゐる。そして低い聲でさわ／＼さわさわ囁くやうに身をもんで居る。(葉舟)

鴨の河添柳は昨日今日めつきりと伸びかゝつた。淺緑の髪を垂れながら、暖い日向に夢を貪つてゐる。其陰に立つと、枝垂の端尾がやつと額際にとどいて、春の香気が微かに腕に浸み透る。どうやら新しい

戀でもして見たいやうな氣持になる。(泣菫)

◇銀杏

下から仰ぐと日に餘る黄金の雲が、穩かな日光を浴びて、所々鼈甲のやうに輝くからまばゆい位見事である。其雲の塊りが風もないにはらくと落ちてくる。無論薄い葉の事だから落ちて音はしない、落ちる間もまた頗る長い。枝を離れて地につく迄の間に或は日に向ひ或は日に背いて色々な光を放つ、色々な變りはするものゝ急ぐ景色もなく、至つて豊かに、至つてしとやかに降つてくる。だから見てゐると落つるのではない、空中を搖曳して遊んでゐるやうに思はれる。(漱石)

銀杏の實が、いつの間にか黄熟して、葉と共に、ぼた／＼と地上に落下する。それを小供や子守などが、樹の下に群つて競うて拾つてゐる。ぼた／＼と磔のやうに吹き落ちてくる實をひととほり拾ひおはると、彼等はまた樹上を仰ぎ眺めては、また落ちてくるのを待つてゐる。(秋江)

直線的な枝に、芽がふつくりとふくらんで來ると、その大木は全體薄緑をして見える。其緑は一日一日と、見て居るうちに明かになつて、三日四日五日と日が立つに従つて、さつと照す朝の光に、房々した若葉がかゞやいて見える。——この樹の眠が醒まされたのだ。醒めて又この大氣を呼吸しやうとして居るのだ。その時に、もしこの樹の下に立つと、みづ／＼しい緑

の葉は、水禽の足の形をして、一房づゝさがつて居る。(葉舟)

◇松

松は皆黒松であるが、始終海から來る西風を受けて、枝も幹も曲り拗つた。そして、葉といふ葉が鹽分の爲めに白く粉を吹いたやうだ。下草の伸び揃つた上を、日影が網の目のやうに白く零れ射して、立籠んだ幹と幹との間から、眞晝の光を浴いた瑠璃色の鮮かな海がチラ／＼見える。(風葉)

松林の濃い黒い一面の緑が、巨鳥の翼を擴げて、何物かを掩ひ包むかのやうな姿をして、野と山との境目、野が山に迫つて、道が次第に傾斜をなさうとする

所から廣く横に互つて、山の裾を繞つてゐる。その濃緑の松の林は、平原地にある林の如く、砂塵を蒙ることなどは嘗てない。(孤雁)

年を経た此の松の林の中に入つて行くと、がう、がうと鳴つてゐる不斷の響がある。これも高原地ならでは聞かれない自然の樂の音である。如何にも、千古以來、吹きやまない、又千古の末までも、吹き絶えないと思はるゝ物の響……(孤雁)

赤松の幹は、ズリ／＼と焦げつくやうだ。脂がルビーのやうに、日を受けて赤く輝く。どの松も、どの松も、白い腹を炎天に向けた蜥蜴のやうに、視神經をイラ／＼させる。松の枝は、瘦腕を張つて、この道を通る旅人を、上からグイと壓へつけて、さうして突

つ放さうとする。(鳥水)

そよともしない松林、小鳥の聲一つ聞えない木立の奥には、同じやうにヒヨロ／＼と細く生えた幹が暗く並んで、引込められるやうな静かさが潜んでゐる。(藤村)

僅かに曲つた淡黄色の嚴丈な松の幹が、互ひに相當な間隔を置いて、轟々と突立つて居る。そしてその間にもつと若い松の木が、一列に竝んで居る。地は一面に青蘚に蔽はれて、その上に松の村葉が散ばつて居る。(ツルゲエネフ・田中純譯)

◇櫻・其他

細いすつきりした櫻の樹の枝が皮を剥ぎ肉を削

つて、骨立してゐる人間の骨格のやうで、いかにも寒さうで、身慄ひがする。其血管の走つてゐるやうな神経の末端の伸び出てゐるやうな微妙な果ての果てまでに、むごたらしい風が來て打當る。齒ぎしりをして、小枝が苦しがる。(孤雁)

この木はまだ若木で、さもすつきりとした肉の柔かさをを見せてゐる。土から出るいきれはその木を蒸してその樹肌の内を流れてゐる血の中に、酒を吸はしてゐる。暖かに、底に力の籠つた波が揺れるやうな呼吸がいつとなしに興奮して、怒漲した力を見せて來た。この木も此頃の濕つた空氣と、銀に光つた日の光とに潤んだ色をして上氣してゐる。(葉舟)

林立してゐる杉の樹から、ぼたり／＼露が地に

落ちる。神官の衣冠束帯した姿が眼に觸れた。こゝから手向山神社へ行く路は、一層深く杉がこもつてゐる。(薰園)

そこに二本ある桐の木、がら／＼に黒ずんだ實のさびしく落ち残つたのが、寒く濡れそぼちて、じめ／＼しい雨の脚に揺れてゐる。(鈴木三重吉)

◇果 樹

一すぢの小徑を中央にして兩側に果樹の多く植てある島の中を歩いてみた。そこは牧野とも一緒によく休みに來て、生つて居る桃を枝から直ぐにもぎ取つては味つたり、土の香氣を嗅ぎながら歩き廻つたりするところであつた。最早十月下旬の季節が來て居た。

枝にある佛蘭西の青梨は薄紅く色づいたのが澤山生り下つて居たばかりでは無く、どうかすると熟した果實は秋風に揺れて、まるで石でも落ちるやうに彼の足許へ落ちるのであつた。(藤村)

起きたり、伏したりしてゐる一帯の地——小山の上谷の底、皆密柑の島である。とある小徑の處へ出ると兩側には大きな果樹が蹲踞つて居て、光る葉や、深く暗い影や、まだ青々とした果物の顔を出したさまなど、暖國らしい感想を與へる。うんと力瘤を入れたやうな、土の上まで垂れ下つた枝が右にも左にもあつた。(藤村)

午に逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面に浴びせて、眼にあまる密柑の葉は、葉の裏まで、

蒸し返されて輝いてゐる。(漱石)

南國の空は紺青色に晴れてゐて、密柑の茂みを洩れる日が、きら／＼した斑紋を、花壇の周囲の砂の上に印してゐる。(鷗外)

黒ずんだ藁屋の前に、一本の柿の木が、淋しく立つてゐた。其の梢には、快く酒に酔つた色のやうに熟した柿の實が、此處にも、彼處にも連続して、ブラ下つてゐた。その秋の日の光線を受けた部分は、恰度、大きな珠玉のやうに、燦爛として、秋の情趣を悉く其處に集めたやうに思はれた。(梅溪)

杉垣の遙か向うに大きな柿の木が見えて、空のなかへ五分珠の珊瑚をかためて嵌めこんだやうに綺麗に紅く映る。(漱石)

次の日の朝雲は晴れた。私は起きると直ぐ葡萄棚の下へ行つて仰いでみた。葉の叢から洩れた一條の光りが鋭く眼を貫いた。私は顔を傾け變へた。露に濡れた葡萄の房が朝の空の中で克明な陰影を振りかざし一粒づつ満腔の光りを放つて静まつてゐた。私は手を延ばすと一粒とつた。(横光利一)

枯木の切れを力一ぱい投げ上げた。と、子供は一目散に栗の木の下から逃げた。立ちどまつて眼をあぐそこで力を失つて落ちて来た。あの赤黒い大きな栗のイガが今にも頭の上へ落ちて来るかと思つてゐたのに！子供は眼が眩みさうだつた。栗のイガが高く高く青い空の中へ消えてゆくやうな気がした。(土屋長村)

第三章 光 線

日 光

◇春の 日

午後になつて薄い雲が空を蔽うた。淡い日光が物の輪廓を朧ろに暈して、物影に青白い明るみを澱ました。彼は一人書齋に退いて、何處から來るとも分らないやうな雀の囀りを聞いてゐた。(豊島與志雄)

彼は立ち上つて室の前の廊下に出て、窓を開き乍ら下の庭面に眼をやつた。曇り空の明るみが庭一面

に澱んで、そよもしない新緑の樹々の間を奥深く見せてゐた。冬のやうな日の光りだと彼は思つた。そして萌え出たベン／＼草の長い莖を見守つてゐた。(豊島與志雄)

三月の末の薄曇つた日で、櫻の若木は、あちこちの杖に繪の具をこぼしたやうな、薄赤い、可憐な蕾を見せてゐた。曇り日に照らされた校舎の影が、大地の上へ煙のやうに、どうかすると、見る者の眼の迷ひでもあるかのやうに、あえかに映つてゐた。(谷崎精二)

昨夜雪に壓せられて唸つてゐた電線はもう麗かな春の日光にきら／＼炎のやうに輝いてゐた。雪に吹きつけられて、黒く濡れた電柱からは、ゆらく／＼と陽

炎が立つて、その中を透して見える遠くの野の景色が
伸びたり縮んだりした。(谷崎精二)

目はすぐ前の小枝に遮られて、それについて居
る小さい葉が、なよ／＼と少し重たさうに伸びかゝつ
てゐる。少しづつ、少しづつ、力が弱くなつて来た。ブラ
チナの光が、その葉の間に軽く渦を巻いて漂うてゐ
る。その葉の色とブラチナの色とが溶け合つて、銀の
光ある緑酒が今にも滴りさうだ。(葉舟)

今は風もない。花も、若葉も少しも動かず、た
だ日光が、其上を勇ましくはげますやうに照らして居
る。それを見るとこの草木の上に、或る力が加へられ
て育み助けられつゝあるもので、たゞひさまづいて、感
謝したいやうな心になる。(葉舟)

春の白日の中を行くのは、丁度明るい夢を見て
ゐるやうで、温い靄にまかれる氣はしても、ふうと捲
かれてしまはずに懐かしい印象が、いつまでも附きま
とつてゐる。原などに出て、林の中の楓の芽が赤く目
立つて、陽の光を受けけるのを見る時、其の一つ一
つから受ける明るい色なり、匂ひなりは、小さいなが
ら眼にこゝろよく泌みる。(薰園)

都は麗らかな春の日の光と暖かさとのなかに目
を覺ましつゝあつた。家々の前面はき／＼と照り輝
き、カナリヤは籠のなかで囀りかはし、歡喜は空中に
充ち満ちて、あらゆる事物に對して萬遍なく満足の色
を浮べてゐる通行人の顔を照らしてゐた。
(モウパッサン・則田晁譯)

夏の日

私は、野みちのほほけ茅花をぬいてゐた。

日が照つて、夏雲雀が六月の空に淋しい音色を飾つ
てゐる。路は白く乾いて、足もとにたつ夏のかげろふ
がちらちらと瞳にうつる。(夕暮)

倉と倉との屋根の間から、からりとした青い濃
い空が深い色に見えてゐる。かすれ／＼の雲が漲つた
日影にちつと固まつてゐた。下の土の上には午後のぎ
ら／＼した暑さを思はずやうに、黄色い日の色が土に
浸み入つて、赤い大きな蟻がちらちら走つた。

(鈴木三重吉)

白熱の夏の光が、ぎらぎらと目もまばゆいやう

に照らして、廣い街頭には人通りもない。まるで夜が
更けたやうに、白日の寂寞がその心を漲らして居る。
緑葉の陰はせまくはつきりと地に印されて、風が吹け
ばさやさやと音をさせる。(葉舟)

晴天が続いて、何も彼もが味がなく、白茶けて
しまつた地上に照りつける夏の太陽、殊に往來の石こ
ろの上に、何の容赦もなく、叩きつけるやうに、その
強烈な光を浴びせてゐる夏の日を見ると、くら／＼目
まひがして来た。(廣津和郎)

晴れた、高い碧空の下に森が少し鈍い灰がかつ
た暗い色をしてゐる。その中に木の幹が――楓の幹だ
つたらう――白つぼく、林立してゐるのが見えた。日
光は少しかすんだやうになつて、森の上に一ぱい漲る

やうに照つてゐる。風は吐息程にも吹いてはゐないのだ。一步づゝ、その坂の道を下つて行くと、丁度、波をくぐつて海の底にでも入つて行くやうな心持がされた。(葉舟)

今日は雲が低い。暗い色が深い。灰黒い蒸気がむら／＼と空に湧いて出るやうだ。そのくせ、風もない。あたりの木の葉がじつとしづれて、暗く重い蒸気に包まれてゐるやうだ。(葉舟)

窓の外には、烈しい日光が漲つてゐて、山にも谷にも、夏の力が溢れてゐる。木も草も、焼け爛れるかと思はれるばかりの炎熱は、今が眞晝であるといふことを知らせてゐる。(吉井勇)

遙かな河の彼方、地平線の眞上は、今や鮮かに

輝き亘つて居る。時々微風が流れ過ぎると、光は野を分けて更に輝き亘る。今や曙光が原一面に搖曳して居るのであつた。(ツルゲエネフ・田中純譯)

外には花壇の上に太陽が照りつけてゐた。百合や薔薇の香氣が蒸し暑く匂つて来て、僕の頭は何だか斯う非常に甘い温かい飲物に酔うたやうな氣持を覺えた。グラデイヨラスは火の燃えるやうに咲き匂ひ、シヨルテイアスは堪らない位に黄色かつた。砂利もびかびかと輝き一切のものがちつと動きなく暑氣を浴びて空中に蜂などがぶんぶん唸る音を立ててゐる下に、さも懶さうな風をしてゐた。(カイセルリンク・中島清譯)

見通しのつかないほど、濃厚な熱氣が降り注いだ。遠方のものがみんな動いてゐるやうに見えた。透

明な火氣が水のやうに野の上をちらちらと、前後左右に揺れ流れてゐる……閃き躍る波のやうに目まぐるしく流れるのだ。空には一片の雲もなかつた。そして太陽はその孤獨の中で、裸のやうに見えた。

(ヤークツレフ・米川正夫譯)

秋の日

菊の花が雨に打たれて萎んだまゝになつてゐた。萩の葉が霜枯れて地に落ちてゐた。そして常盤樹の葉は黒ずみ、落葉樹の葉は紅葉を呈してゐた。青い空と冷たく澄んだ太陽の光りとがそれらのものゝ上にあつた。(豊島與志雄)

鈍く力のない光が、寒さうに忍び込んで来て、

部屋の中などの器物にその薄暗い冷たい影を落すのを見ると、一緒に氣も滅入つてしまひさうだ。その上にもうその頃になると、音でも聲でも、何と言ふ淋しい響きを持つてゐることであらう。一寸言へば臺所あたりで、皿と皿とが觸れる音がしても、何處か四邊がしんとして居て、大きい寺の中で、響きわたる音のやうではないか。(葉舟)

恐らく此不思議な靈光とも見ゆる青い光、此の短き間だけ人間に臨む桔梗色の空は、大方の人には氣が付かず終つてしまふだらう。光は斜めに西方郊外の丘陵の上から、お濠の松の枝を透して、何處までも射し込んでゆく。松の林を透し、葉の落ちた櫻の間を透し、電車の塵の立ち舞ふ中までも射し込んで行く

が、光の末は、次第に薄れて、黄味がかつて茫となつてしまふ。(孤雁)

晝過ぎになると、日は山を外れて、温泉場の屋根を紅く染めた。遠く眺めると、山々も、野も河原も、一様に赤い午後の日に彩られて居る。其處にも、秋の冷かな氣が、雲の色に、日の光りに潜んで居た。(未明)

つめたい空氣が女の頸筋に双物の切れ味のやうに觸れてゐながら、日光の一點が女の額にぢり／＼と温みを傳へて來た。臉を上げると前髪の毛の亂れにきら／＼と青や赤の光がみなぎつて、それが睫毛の上でまぶしく／＼をらしく戦いてゐた。(田村俊子)

老母は切下髪にして、頤を襟の中に埋め背中を丸くしてぢつと池の面を見守つてゐた。その側に綾子

の大きな束髪や血の氣の多い白い頬や羽織の下に高く眠らんだ帯などが、しとやかなそしてまた活潑な運動をしてゐた。しつくり身についたお召の羽織の下に青春の肉體の運動が見られた。そして日の光りがそれらの上を鮮かに輝かしてゐた。魅をばくついてゐる金魚のまはりに、光線がきら／＼と水面に躍つた。向うの芝生の上に投げられた植込の影にも清らかな空氣が澄んでゐた。(豊島與志雄)

冬の日

山に近い冬田は乾上つて、畔にはうす青く露の藁が土をもたげてゐる。が、空はうす灰色に鈍つて、日のありどころさへわからぬ。満目肅條の冬景色は、

黄の一角に單純化されて、晝ともたそがれともわからぬ外光のうすあかりは人の心を寂しくする。(夕暮)

私はふと、七八尺ほどさきに、ほつと燃えあがる炎の影のやうなものをみる。炎の影はゆらゆらと雪の上で揺れてゐる。ともすれば青い空の方へ、みてゐるうちにのびてゆきさうである。と思ふと、ふと消えて、日が明るく流れる。紫がかつた水つぽい大氣のなかにどこかで鶴がないてゐる。(夕暮)

時々風に吹かれて、雲がとぎれると見えて、力がない日光がぱつと障子に映つて、四邊がはつきりとなる。さうかと思ふと、又灰色の雲が空一ぱいに廣がつて、薄暗くそこらが沈んで見えると、心細くおしつけられるやうになる。其の間を木枯が斷續して音をた

てゝ居るのであつた。(葉舟)

歩く毎に、白い息が朝日に映じて、ふうふうと消えて行く。路にざくり／＼と霜柱の崩れる音がして世の中は、しんと麗かに晴れ切つてゐる。私は今其處を歩いてゐる。俄に日が影つて、風の音がさあつと聞えた。寒い。(前田晁)

草は皆枯れてしまつた。たゞ日向の暖かさ。この枯草の色、ほのかな香が漂つて來るやうな色とそつくりのやうな、眠い、だるい、滲み入るやうな、この頃の日向に、暫くでもじつとこの身體をさらして坐つてゐてごらんなさい。日の光が、如何にも鈍く弱く慄へながら、だん／＼と頭の上を廻つて行くのが感じられるであらう。(葉舟)

木の葉の散り盡した枝々が、そこにもこゝにも真青な空に銀色で微細な蜘蛛手をかいてゐて、その小枝の亂れの間々を、日光があざやかな瞳子の光を白晝いつばいに瞬かしてゐるやうな、すつきりした快晴の冬の日がつづいてゐた。(田村俊子)

窓の外に掻きむしるやうな荒つぽい風の吹きすさむ日もあるけれど、どうかすると張りの無い艶の無い呆やけたやうな日射しが拂へば消えさうに翳々と開けた障子の外から覗き込んでゐるやうな眠つぽい日もある。(田村俊子)

右手の林の方を見ると、灰色がかつた鈍い空の下方に、紙を通す弱い灯影のやうに薄黄色い太陽が、どんよりと、裸になつた大きな椋の木の間、濁つて見

えてゐる。(鈴木三重吉)

曇りながらも、うす明るい、もの静かな冬の晝になつた。立ち列んだ町家の間を、流れるともなく、流れる川の水さへ、今日はほんやりと光澤を消して、その水に浮く葱の屑も、氣のせいかな青い色が冷たくな。まして岸を行く往來の人々は、丸頭巾をかぶつたのも、革足袋をはいたのも、皆風の吹く世の中を忘れたやうに、うつそりして歩いて行く。(芥川龍之介)

もし空に汚れた緋のやうな灰色雲が群つて、何とも言へず静かな、徐々とした共同の大運動を行つて居るやうな日には、さうして太陽がその中を潜り／＼何十遍何百遍と無く光つては微み微みでは又光つて行くやうな日には、その象牙の大彫刻のやうな山の連り

の上を、無限の光と陰とが飛びちがつた。

あらゆる地の光を揉み消してしまはうとでもするかやうに、隆起を躍りあがり谿谷を跳び越えて、恐ろしい魔物のやうに影が浸してくるかと思ふと、その後から又まるで引き剝がれるやうにその影は光に食はれて行く、……さうして、今にも動き出すかと思ふほど輝き切つて居る光の中へ、妙な陰りがふと射したかと思ふと、見る／＼そこから又陰氣な憂はしい灰色が四方八方へ軋ひ擴がつて、到る處に襲はれて明るみは息もつけないやうに逃げ出して行く。(藤森成吉)

◇曙・日の出

私はその夜遅くまで街を歩いてゐた。家へ歸つ

たときはどこかで鶏が鳴いてゐた。足がひどく汚れてゐて着物が肩に重く濡りついた。私は足を洗つて着物を着替へるとまづ煙草を一服ゆるゆると吸つた。空は静に緑色に變つて來た。街道では車の轍の音がし始めた。空氣は夜明けの色の中で一層冷めたくなつた。私は竈に火を焚きつけて湯を沸かした。やがて部屋は煙を立ち籠めたままだんだんと明るくなつた。遠くの高い建物の窓硝子は最初の朝日を受けて桃色にきらきらと輝き出した。雀は勇敢であつた。彼らは屋根から屋根を一團となつて蹴りつけるやうに飛び廻つてゐた。(横光利一)

爽やかな三月下旬の夜明だつた。霧とも言へない程の薄すらとしたものが、植込の下影に逃げ迷つてゐ

て、清々しく打晴れた空には、薔薇色の光が一面に流れてゐた、遠く都會の眼覚のどよめきを傳へながらも、空氣はまだしつとりと落付いてゐて、小鳥の眠りを護つてゐるらしかつた。(豊島與志雄)

もう眠れないかも知れない、こんなに醒めちやア、だめだ。が、まだ夜明にもならないなどと、彼はぢいつと身體を保つて、眼を開けたり閉ぢたりしてゐた。四邊はしんとして、もの音といつては、どこかそこの窓のらしい戸が、とき／＼微かな風にでも煽られるくらゐだつた。廊下に向いた障子の、箆め込みのガラス越しに、閉じた戸の間が、鼠色めいた外の明るさをよわ／＼しく透かしてゐて、まだ一人起き出さない時刻の静寂が、さみしく、しと／＼と、罩めてゐる。

る。(細田源吉)

窓の下を流れて居る、疏水の分れのぬるんだ水面に、ぼうつと水蒸氣が這つてゐる。右手の眞如堂の丘の新緑の梢に、キラ／＼と朝日が差し始めて居たが、東山との間の谷にはまだ横に朝霧が引いて、何やらの御陵の、目醒むるばかり美しいかなめ垣も、今醒めたばかりである。(伊藤貴慶)

つめたい洗盤の水からフト顔をあげると、繁つた葡萄の葉のうしろに、きらきらと一すじの光が走つた、と燦として長い黄金の棒が輝く、僕は、しばらくその光にくるめいた。それは、今山をはなれた太陽を受けて、葡萄の樹に掛け渡した乾物竿が、一度に照りはじめたのだ。(藤森成吉)

朱を注いだやうに波の色が眞赤に色づいて、それが色糸を編むやうに纏れて見えます。太陽は遙かに地平線の彼方から顔を出した。波は洗はれて其色が眞赤で、全く昨日の疲れを洗ひ落して新しい色に燃えてゐます。(未明)

軽く拍車の音を立てながら、私は静まり返つた庭を通りぬけ、駆け寄つて来たミリトンを撫で、やつてから、離れの階段に立つて、室の戸をあけた、どうしてか寝つけなかつた。私はランプを點して、窓をあけた。甘い花のかほりと、明け方の涼氣とが流れ込んで来る。月は蒼白くなつて、天心にかゝつてゐる。白楊からは長い紫色の影がのびてゐた。

(ラザレーフスキイ・白葉譯)

遠い木立の上、もう地平線にすれ／＼位の所で、是も驚嘆に價する程に美しい朝の星(私はいつも此星の名を忘れる)がふつと消えた。私の胸の奥では藝術家が眼ざめた、そして此場で直ぐ此遠い木立や、空のたゞすまひや、日の出前の刻々に薄れて行く雲の姿などが描いて見たくて堪らなくなつた。

(ラザレーフスキイ・白葉譯)

私は、人がまだ眠つてゐて、總ての自然が醒めかかつてゐるこの黎明の冷々とした身に泌みるやうな時刻が好きだ。空氣には朝寝の人々には知られない不思議な肌粟立たせるやうな感じが充ちてゐる。私はそれを吸ひ込み、それを飲む。すべての生命が、この世界の物質の生命が、蘇つて来る。(モウパッサン・孤雁譯)

夜が明けかかつて来た。星影が次第に消えて行つた。そしてヴイルフランシユの燈臺も、もうその廻轉する眼を閉ぢた。私は、まだはつきり目に入らないニス市の上に當つて、遠空の下に、奇妙な蔷薇色だつた閃きを認めた。アルプス氷河の絶嶺が曙光に照し出されたのであつた。私は舵機をベルナールに渡して、日出を見守つてゐた。爽かさを増した微風は私達を吹いて、紫色に慄えてゐる波の上を滑つて行かせた。アンジエラスを告げる鐘の音は三度忙しげな響を風に傳へて鳴り渡つた。(モウパッサン・孤雁譯)

空は次第に上の方が白んで来た。と不意に、不思議な光が何處からとも知れず湧き出して来て、彼のまはり數里に涉つて廣がつてゐる渺々たる海原のやう

な蒼白い山々の頂を不意にばつと照らした。この漠然とした光は、空間に擴がる爲めに雪の中から發して来たかのやうに見えた。次第に、一番高い、一番遠くの頂が柔らかな、肉のやうな蔷薇色を見せて、赤い太陽がどツしりとした巨人のやうなベルニイズ・アルプのうしろから現はれた。(モウパッサン・前田晁譯)

◇日没

紅い入日は頰れかゝつた花に似てゐる。花瓣が崩れ落ちるやうに雲が斷れた。黒い建物に狭い道を挿んで並んだ、町の往來に立つて、藥屋の金看板に氣を配つたり、高い煙突に心を馳せたり、いら／＼とした神經を休める餘裕がない、僅かの間に、無限に眼を樂し

ましたものは、此の紅い落日の外にはなかつた。薄皮の破れ爛れた巴旦杏よりも美しい。(未明)

次第に薄れて行く夕暮の反射を受けて、山々の色も幾度か變つたのである。赤に紫に、紫に灰色に、終には、野も岡も暮れ、影は暗く、谷から谷へ擴つて、最後の日の光は山の頂にばかり輝くやうになつた。(藤村)

短かい日は村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に眞倒に落ちつゝある。横にさす光は麥の葉をかすつて精い櫟の林が一しきり輝いた。畑のへりの茶の木の花は白々と光を帯びてゐる。筑波山は見る／＼濃い紫に染まつて来た。(長塚節)

追ひ駆けるやうに日の落ちるのが早くなつて來

て、家々の軒先や窓の上に取付けられた曇つた、薄い硝子がばつさり眼を開いたやうに輝き出すと、直ぐもろ黄昏の色が羅のやうに幾重にも其の上に蔽ひかゝつた。空は未だ夕日の影がほんのり残つて、赤いきれぎれの雲が大きな魚のやうに泳いで居る、人々がちつと其れを見上げ乍ら、あわたとしく過ぎて行く一日の名残を惜しむ。(谷崎精二)

夕暮近くK君と濱寺の海邊に出て見た。ふと見ると、大きな灼金のやうな丸い光茫のない日輪が今少しで波に接吻しようとしてゐた。「あ、好い、見給へ」からK君は指した。やがて日輪が波に觸れたと思ふとちき二分三分と沈んで、すつかり沈んで了ふのも瞬く間であつた。願ると、岸の松林の上に十四日の月が白

く出てゐる。(花袋)

空の夕焼が毎日つゞいた。けれどもそれは、つひ二三週間前までのやうな灼け爛れた真赤な空ではなかつた。底には深い快活な黄色を匿して、うはべだけが紅であつた。明日の暑さで威嚇する夕焼ではなく、明日の快晴を約束する夕榮であつた。(佐藤春夫)

連嶺の姿は、朝はくつきりと鮮かに刻まれて、青空の中へ、柔かに澄み切つた、南方海岸の理想的な青空の中へ、鋭く描き出される。けれど夕方は、森に包まれた山腹が黒味を帯んで、火のやうな空の中へ、真とは思はれないほどの真紅な、書割めいた空の中へ、一張の黒い幕を引き渡す。私は嘗て何處に於ても、此様な仙境めいた日没を、全地平線上の此様な火焰を、

此様な雲の輝きを、此様な巧みな宏大な色の配列を、此様な恣な華麗な稱讚に價する日々の新らしい効果を見たことがない。(モウパッサン・孤雁譯)

太陽は落ちて、まだ濃い残紅の映えが血と金とを混ぜたやうに輝いて、水の面にぼろと仄あかるく反射して居る。静かな水に今静かな波が一揺れ動いて、懶げなさゞめきが立つと同時に赤くきら／＼つとした。(レイモント・朝鳥譯)

彼は流れて渡つた。去年ライ麦で蔽はれてゐた野には、熟した燕麥の畦があつた。太陽は没して地平線上には廣い、赤い夕焼が、荒れ模様を豫示するやうに燃えてゐた。すべては静かであつた。

(チエエホフ・前田晁譯)

太陽は島の向うに沈んだが、空はまだ一面に火のやうに燃えてゐた、そして穩かな河の水は血に變じたやうに見えた。地平線の反射が家や、物や、人やを赤くした。侯爵夫人の髪に挿した深紅のばらの花は、彼女の頭の上に雲から落ちた深紅の滴りのやうに見えた。(モウパッサン・前田晁譯)

月・星

春の月

直ぐ真向ふの東山の頂が、ぼろと夢みるやうに明るんで来たかと思ふと、やがて白い月が其處から

ぼつと浮び出た。それと同時に今迄はあるとも見えぬ幻影のやうにたゆたつてゐた山の頂線がくつきりと夜霧の中に浮き上つて、向ふ岸の家並がまるで違つた遠近を示しながら益々黒く鮮かに描き出されて来た。

(長田幹彦)

私は外へ出て見た。ほつかりと水つぽい月夜である。煙草苗場からくる堆肥の匂ひがほのかに顔にふれる。どこかで地蟲が、ぢ、ぢ、と啼いてゐる。

煙草苗場には、布が一面にしるじろと張られてゐる。夜明の冷たい露霜を厭ふからであらう。それが月の光をほのかに反射してゐる。(夕暮)

外は朧である。半ば世を照らし、半ば世を鎖す光が空に懸る。空は、高きが如く低きが如く、据らぬ

腰を更けぬ宵に浮かしてゐる。懸るものは猶更ふわふわする。丸い縁に黄を帯びた輪をぼんやり膨らまして輪廓も確かでない。黄た帯は外圍に近く色を失つて、黒ずんだ藍のなかににじみ出す。流れれば月も消えさうに見える。月は空に、人は地に紛れ易い晩である。

(漱石)

夜の薄霧が鏡のやうに平かな湖水の上に、被衣でもかけたやうにふわりと被ひかゝつて、月が其上から、微かに穩かに照り渡つて居るが、處々、霧を洩れて湖面に落つる光は、さながら一ところわざと磨き立てた金屬の如く、きらりと眩しく光る。(花袋)

郊外に近い静かな、しんとした町を歩いてゐた。私の影は、淡く地上に映つてゐた。すべてが霞ん

でゐるやうな夜で、ヴェールを顔にかけた女神が、夢みるやうに、下界を眺めてゐるとでも云ひたい朧月が、柔かい絹のやうな光りを投げてゐた。ある家の黒板塀越しに櫻の花が白くほろほろと散つた。(梅溪)

月が出たと見えて、青味がゝつた薄明が庭を流れて、樹にも石にも淡く影を置いた。星がチラ／＼瞬いて微かに光を持った鉛色の、霧の薄らいた空へ、常磐木の木立はすらすらと黒い梢を突出して鎮まり返つてゐる。(風葉)

夏の月

東山の上が、うす明く青んだ中に、早に瘦せた月は、徐ろにさみしく、中天に上つて行く。それにつ

れて、加茂川にかかつてゐる橋が、その白々とした水光りの上に、何時か暗く浮上つて来た。(芥川龍之介)

町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返してゐるのであらう、自ら頂を腫げな月明りにぼかしながら、どの峯も、ぢつと物を思つてゐるやうに、うすい霧の上から、靜に荒廢した町を見下ろしてゐる。

(芥川龍之介)

長命寺邊の堤の上の木立から、多分舊曆七月の満月であらう、赤味を帯びた大きな月が昇りかけて居る——空は鏡のやうに明るいだけ、それを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星が唯一つ見えるばかりで、其の他は盡く餘りに明るい空の光りに掻き消されて、横ざまに長く棚曳く雲のちぎれが銀色に透き

通つて輝いてゐる。(長田幹彦)

居間の明るい灯は、簾を透して、梧桐の葉裏に照つてゐた。涼しい月が流るゝやうに袖を吹いた。ふと見ると向ふの家の周囲の大きな樺の樹の輪廓は、今昇つたばかりの月の明るい空に黒くはつきりと見られた。(花袋)

ふと氣づくくと、影繪のやうな東山の頂線の邊がぼろと蒼白く明るんで来て、そこらに輝いてゐた星の光も淡く褪せてくる。と、見る内にそこから眞圓い白い月が洗ひ出されて、蒼ざめた光は彼岸の家並を越えて、少しづつ斜に河原へ射し渡つてくる。冷々する夜風の底から何處か遠くの茶屋で騒いでゐる絃歌のさんざめきが微かに通つて来る。(長田幹彦)

秋の月

月は庭の隅にある、瘦せがれた檜の梢にあつた。従兄はその檜の下に立つて、うす明い夜の空を眺めてゐた。「大へん草が生えてゐるのね。」——信子は荒れた庭を氣味悪さうに、怯づ怯づ彼のゐる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜かな」と呟

ただけであつた。(芥川龍之介)
 路の傍に、彼の立つて居る足の下に、細い水が月の光を砕きながら流れてゐる。ふと、南の丘の向ふ側の方を、KからHへ行く十時何分かの終列車が、月夜の世界の一角をひびかせて、通りすぎた。その音が暫し聞えてゐた。彼には此の時、物音がなつかしかつ

た。月の光で晝のやうに明るい野面を越えて、彼は南の丘の方へ眼を向けた。(佐藤春夫)

星は深く空に沈み、相對する山々は、遠く闇の底に隠れて、限りなく高い圓い空の胸には、死にゆく魂のやうな白い月がかゝつてゐた。その青光りの光波の中に野は兩側に果しなく展開してゐた。吹く風は頬にかぐはしく、草地と云ふ草地は、霧に烟つて、霧はさながらに命あるものゝ如く樹々を包み、遠い地平線にむらがる森影は、あだかも濡れた墨繪の如く、微かに見渡された。(白石實三)

微風の黄昏は早くも過ぎて、今は眞蒼な狹霧が深く木立を包んだ明るからぬ冷たい月夜である。月は白く、古池の死んだ水の面、枯れた藻草の間に其姿を

映してゐたが、雨のやうな木の葉に打たれる波紋に於いて、ゆらゆらと細かく動く。(荷風)

高原の秋の月は殊に變化があつて面白いと思はれます。今まで澄みきつてゐた月の影が、俄かに霧にかくされたかと思ふと、篠突くやうな雨が降つて來ます。そしてものゝ五分も経たない間に、空がまた青海のやうに晴れます。一面に咲いた白い高原の草花の上を滑つて行く雨の脚が、見分けらるゝほど空は輝いて來ます。(吉田絃二郎)

夜が更けるにつれて仲秋の満月は大空高く潤んだやうに澄んでゐた。何處の屋根の上の涼み臺にも夜露が降りてゐるのがキラキラ光つてゐる。明るい藝者屋の門先には長い床几を出して、それに山の着物を着

冬の月

飾つた藝妓が、赤いのや友禪模様のや長襦袢の裾を高く捲つて腰を掛けて、口のかゝつて來るのを待ち笑ひさゞめいてゐた。涼しい夜風が意氣な街筋を流れて、櫛の跡の美しい鬢の毛を吹いた。(秋江)

今が丁度満月の月は森の梢を銀色に輝かしながら、葉漏れの斑點をギラ／＼と水の面におとして空に懸り、農家の窓を冴えて覗いた。犬はもう吠えない。森とした静寂、無限の沈黙が村にも一切の自然の上にも領して居る。(レイモント・朝鳥譯)

此の頃では、月のよくさし込む部屋を、私の寢室に擇ぶやうにしてゐる。この頃の月はその下で時

計の針でも見られるほどに明るいのである。どうかすると、その光で詩ぐらゐのものは書けるであらう。窓かけを引かすにおくと、窓一ぱいの中廣の光が水のやうに流れ込む。その優しい光は、床の上へ落ちてそこへ凍りついてゐる。(佐藤春夫)

その晩は珍らしく風の吹き去つた後で、深海底を思はせるやうな大空には蒼白い月光が際限もなく充ち溢れてゐた。觸れたら音を立て、崩れさうな脆い寒氣は萬象の面を恐ろしいまで透明にみせて、ひっそりした廢市の上には柵衣のやうな凄まじい色が慄へてゐた。(長田幹彦)

銀色といふけれど、深い雪の谿間を照らす月の光ほど澄んだ沈んだ懐しい色はない。日に照らされて

輝いた山も谿も、凝乎としてこの憐むやうな懐しい月の光に包まれて眠つてゐるのだ、何人か銀の杖を持つて来て、この山の一角を弾いたならば、谿全體が微妙な聲を立て、鳴り響きはしまいかと思はれる。(孤雁)

頸をすくめて、ひよつと見上げると、月の下に近く、黄色な雲が細長く一片靡いてゐる。鋭い月光の威嚴、白い齒をむき出して嘲るやうな物凄さ、思はず外套の中に身を縮める。(孤雁)

建物と建物との間から見える狭い冬の空に、大きな片割月の浮いて居るのを認めた。光澤のない赤いその色は、泣き腫した女の眼に喩へようか。弱々しいその光は、汚れた建物の側面から滑つて、遙か下なる空地の片隅に、云はれぬ陰惨な影を投げた。(荷風)

向う河岸に列んで立つてゐる大きな蔵と蔵との間から、丸い赤い大きな月が上るにつれて、漆のやうに眞黒だつた水が金のやうに光つて来る。月が高く小さく白く、下の水が生きた白魚の群を見るやうにきらきらと細かく光つて来る。(小山内薫)

終りの四分の一に虧け残つて、ぐつと一方に傾いた月は、疲れたやうに中空に懸つてゐた。もう西へ沈む力さへもなささうに弱り果てた上に、厳しい寒氣に捉はれて痲痺させられたので、據所なく高い所に残つてゐるやうに見えた。そして、下界を照らす寒い悲しげな光は、毎月、月が復活の終りに方つて、われわれに與ふるその消えさうな蒼白い光であつた。

(モウパッサン・前田晁譯)

星

空は今夜も拭つたやうに晴れひろがつて、丁度十五夜に近い中天の大輪の月が、茂つたナラの葉越しに無数の螢のやうな青い光を土の上へバラ蒔いた。：月光に蹴おとされてか、星はあまり澤山光つてゐなかつた。が、すぐ頭のうへ近く連つてゐる北斗星と、南に寄つた金星とは、今夜もはつきりと瞬いてゐた。

東の方にはもう火星がのぼつて、久しぶりで最も地球に接近して来たその星特有の、まるで眞赤な火花でも打ちあげたやうに爛々として熱光を放つてゐた。西の方の大きな波頭のやうに起伏した山の一部分に、やっぱり雨乞ひでもやつてゐるのか、かなり大きな赤い火

が、丁度その異しい星に應じるやうに燃えてゐた。

(藤森成吉)

冷かな夜の空気が何處ともなく流れて来て、彼の頬を撫でた。彼は初めて我に返つたやうに頭をもたげた。月の無い晴れた空に星が燦然と輝いてゐた。彼は空が晴れてゐるか曇つてゐるか、少しも氣付いてゐなかつたのである。否寧ろ、彼の心に映じてゐた空は重苦しい雲に閉ざされてゐた。そして今俄に、星の輝くうち晴れた空を見上げた時、彼の心は云ひ知れぬ力を得た。それは、凡てが許されるといふやうな、神は凡てを興へるといふやうな、一種朗かな力であつた。

(豊島與志雄)

空はと云ふと、日が落ちるにつれて、裾の方が

薄紫になつて、晴れきつて居る。そしてその薄紫といふのが、廣く一體に濕り氣を含んだ光を帯びてゐるので、如何にも靜かな落日の思ひがされる。その中に、いつも年が一つ、晴れきつて居る空ではあるが、落日の光が漲つて居て、何となく薄絹の中からもれて見えるやうに、その星が光つてゐる。初めは一つで、西の方に見えた。大きく深い胸から溢れるやうな光を放つて居たが、やがて遠く離れて北の方にも一つ見えた。(葉舟)

夜になると、僅かに覗かれた空から星が洩れて見えた。星の光は、絲のやうな金線を隣の家根の上に落してゐた。而して乾き切つた地上のものを濕つぽい夜の黒い布が隠してしまつた。ちやうど紺青の海が都

會の街の上に倒に掩ひかゝつたやうに見えたのであつた。(田村俊子)

冬の星は彼に對しては此の場合無数の謎の閃きであつた。月はなかつた。暗い町の夜更は彼に目かくしをあて、夜の闇を利用し得る者の爲めにのみ更けてゐるかのやうに彼を二度ほど小石につまづかせた。

(宮地嘉六)

朝

春の朝

庭の隅の煙草苗場から、あたたかく霧があがつ

て、朝の空に春はうつすらと眼をあいしてゐる。

苗場の軟かい土から生えた煙草苗は、どれもこれもさしわたし一寸程の、楕圓な厚葉をつけていかにも日の光を甘さうに吸つて、心持汗ばんでゐる。(夕暮)

家をめぐつて唯鉛色の朝霞、村々の森の梢が、幽靈のやうに光に浮いてゐる。雨かと舌鼓をうつたら、霞の中から、ぼんやりと日輪が出て來た。(蘆花)

春雨の霽つた朝は、暖いしめやかとでも言ふべき快さが身内を流れる。何か自分の心持が豊かにされたやうな氣がする。煙草を喫みながら、そぼぬれた庭地や木草を眺めてゐると、腹案を立て置いて筆を取らなかつた作のことが考へられる。文筆を取り得るといふことを非常に嬉しく感じる。(蕪園)

夏の朝

東の空に遠く高く綿を引いたやうにたなびいた雲が、黄と紅とに彩られ、その下の方、地平線に近く、灰黒色に屯した雲をかすめて鳥が飛んだ。地上を包む静かな空気のうちには、眼に見えぬほどの軽い霧が立ち迷つて、草の葉末には露の玉を結んでゐた。

(豊島與志雄)

裏山の松林に入ると、細徑を掩ひかくす草叢にはまだしつとりと露が置いてゐて、歩く度に上脛のあたりまでしつとと濡れる。燃えるやうな日光は青々と生ひ茂つた木の葉の間から斑のやうに零れて、下枝に張つた蜘蛛の巣や草葉が、露気を含んだまゝきらき

ら輝く。羽虫の群はその光の縞の中で環を描きながら飛び交つて、重苦しく淀んだ松脂の匂ひは息を吸ふ度に何とも言へない快い感じを與へた。(長田幹彦)

川の方の雨戸が細目に開いてゐて、障子がどんよりと白くなつてゐる。向うの山や海の上には、もう暑い日が漲つてゐるにちがひないけれど、こゝは丘の蔭なので、いつまでも冷やりしてゐるやうである。すつかり戸のしまつてゐる蚊帳の中は、まだ早い朝のやうに仄暗い。(鈴木三重吉)

赤味を帯びたやうな日影が、段々と朝の氣を消して漲つて行くやうに、すべての青いものゝ上に射し渡つてゐる。蜘蛛の巣の糸は光りに紛れて見えないので、ぢつとしてゐる小さい蜘蛛は、空間に喰ひつけ

れてゐるやうに動かない。土の上には濃い木の影が斜に映つてゐる。暫く雨が續いた間に、生垣の下草が長く伸びてゐる。(鈴木三重吉)

初夏の水分を含んだ空氣を透す日光は、縁に立つてる彼女の眼の前に、色硝子の破片を降り落してゐるやうな美しさを漲らしてゐた。何となく蒸し暑い朝であつた。彼女のセルを着たその肌觸りが、汗の中をちくちくしてゐた。(田村俊子)

東の空は既に雨雲が散じつとして仄白くなり、地平線に接した邊はやゝ薔薇色を呈せんとしてゐた。月は何處か白揚のかけへかくれて了つた。新鮮な朝風がそよ／＼として、又しても甘い花のかほりが漂つて来た。(ラザレフスキイ・白葉譯)

秋の朝

静かな夏の朝であつた。日は既に晴れた空に高く昇つて居るが、野は未だ露でキラ／＼して居た。やつと醒めたばかりの谷間からも、未だ静寂の中にある森の中にも、すがすがしい微風が流れて、小鳥が樂しさに朝の歌を歌つて居た。麓から頂まで一面に、咲きかけたライ麦の花で蔽はれた或る高臺の背に、小さい村が見えて居たが、その村に通じる一筋の狭い間道を、白いモスリンの長上衣を着た、圓い麥藁帽を被つた、バラソルを持つた若い女が一人歩いて居た。(ツルゲエネフ・田中純譯)

顔を洗つて外に出てみると、冷やかな空氣が彼

の頬を流れた。朝の光がちら／＼と紅葉した木の葉の表面に輝いてゐた。青い空と濕つた大地とが凡てのものに新鮮な輝きを與へてゐた。博士は爽かな朝の空気に頭を曝す心地よさを味ひながら、池の魚を眺めたり、植込の間を分け入つたりして、長い間庭に出てゐた。手を大きくうち振ると肩のあたりが伸々として来るやうに覺えた。(豊島與志雄)

翌朝起きて見ると、大分風は止んだがまだ雲ゆきも静かにならず、夜中に一時降つた雨の處々に残つて居る水溜の上に青い木の葉を吹き散らしてゐる。此の野分の朝の景色、これが秋の始めの最も潔い心持を引き起す。(虚子)

その翌日——雨月の夜の後の日は、久しぶりに

晴やかな天気であつた。天と地とが今朝甦つたやうであつた。森羅万象は、永い雨の間に、何時しかもう深い秋にも化つて居た。稻穂にふりそそぐ日の光も、そよ風も、空も、其處に唯一筋織絲のやうに浮んだ雲も、それは自づと夏とは變つて居た。すべては透きとほり、色さまざまな色ガラスで仕組んだ風景のやうに、彼には見えた。彼はそれを身體全部で感じた。彼は深い呼吸を呼吸した。冷たい鮮かな空氣が彼の胸に這入つて行くのが、いかなる飲料よりも甘かつた。(佐藤春夫)

次第に道路は明るくなつて、處々に青空ものぞまれるやうになつた。白い光を帯びながら、頭の上を急いだのは、朝雲の群。行先にあたる村落も形を顯し

て草葺の屋根からは煙の立ち登る光景も見えた。霧の眺めは今おもしろく晴れて行く。(藤村)

冬の朝

朝じめりのした街道の土を踏んで、深い霧の中を辿つて行つた時、遠近に鶏の鳴き交す聲も聞える。其日は春先のやうな温暖で、路傍の枯草も蘇生るかと思はれるほど、灰色の水蒸氣は低く集つて来て、僅かに離れた杜の梢も遠く烟るやうに見える。(藤村)

往來の人々は、いづれも鼻汗をすゝつたり眼側を紅くしたり、或は涙を流したりして、顔色は白つぽく、頬、耳、鼻の先だけは赤くなつて、身を縮め頭をかどめて、寒さうに歩いてゐた。風を背後にした人は

ころぶやうで、風に向つて行く人は又、力を出して物を押すやうに見えた。(藤村)

冬の朝

段々と遠い近い木立の輪廓がくつきりとして、青い密柑の皮が日に當つた部分から少しづつ彩られて行くやうに、東の空が薄く黄色に染つて、段々それが濃くなつて、而して寒冷なうちにも、ほつかりと暖味を持つやうに明るくなつた。(長塚節)

霏である。屋根の瓦は雨がふつたかと思はれる程ぬれてゐる。物みなしつとりとぬれてゐる曉である。……雨戸をしめた家は箱のやうに思はれた。(伊藤靖)

雨戸を繰る音に目醒めた。外がなんとなくさわついてゐるので、はてなと思つて聞いてみると、夜明

けからひどい雪だつたが今は少し小降りになつたといふ。さすがはこの國だと思ひながら、それがどんなに降るかを見ようために、私ははねおきた。障子を開けると外は案外に明るかつた。何時の間にかぐつすりと寝込んで、もう九時にもならうとしてゐた。なるほど庭一面に、また木立の枝にも、屋根の上にも、雪が降り積つてゐる。そして未だすつかり降りやんではゐなかつた。(原田實)

メリトンは考へに沈んで、一點を見詰めた。彼はあらゆるものを抱いてゐる滅びといふものに手を付けられてない唯だ一つの場所を自然界に探した。霧と斜めの雨脚との上に丁度でこぼこのガラスの上に迂り込むやうに、光つた斑點が迂り込んで直ぐに消えた――

―朝日が雲を破つて地球を見下さうと力めたのだ。

(チエエホフ・前田昇譯)

まるで空が溶けて、風もないのに地面へ下つて来るやうであつた。空中に於ける唯一の運動は、絶えず上から下へ降つてゐる霧か霧か分らない微細な雪であつた。裸になつた庭木の枝からは透明な水玉がかよつて散り敷いたばかりの木の葉に滴つて居た。菜園の土は罌粟粒のやうに、光澤光澤しく濕つた黒色を呈してゐたが、少し先の方はもう濁つて水氣を含んだ霧のゼールに包まれてゐる。(トルストイ・米川正夫譯)

夕

◇春の夕

春の静かな音の聞えない、黄色な晩方、彼は女と共に白い櫻の花の散るのを眺めながら送つた。甘い香気が何處からともなく油のやうに濃い空氣の中を流れて来た。女は夢を見るやうな眠むたさうな眼附をして、昵と長吉の顔を見入つてゐた。もう何處からともなくしつとりとした燕の羽子色のやうな夜が迫つて来て、女の顔は長吉の眼に仄白く映つた。黒ずんだ杉の森の中に赤い心臓のやうな夕日が沈んでからまだ

間がなかつた。そして空には、可愛らしい天使が悉く聖壇に蠟燭の灯を點けるには早かつた。(未明)

そして……その町には、房々と茂つた生垣の線の上には、薄い烟のやうな水蒸氣がまつはりついて、それがたへず微動して、黄昏の弱い光線がそれに漂つてゐる。(葉舟)

夕ぐれなど、草原を歩いて濕つてゐるやうな柔かさを、履物の裏に覚え、又爪尖きに感じられる時、身内に泌みわたつて来る心持は、懐しい寂しみである。一步又一步、夕ぐれの氣がだん／＼迫つて来る時、ひとりといふ感じに伴ふ慰安を覚えしめる。(薰園)

春の暮方の野はほんのりと明るく、まだ緑の浅い榛樹の立ちこめてゐる村々の白壁が浮び出るやうに

白く見えてゐた。自轉車が輕快に走つて行くのさへ目に附く。菜の花は暮れ方の靄の中に照りを見せて、闇は急にはその領土を擴げ盡すことも出来なさうに見えてゐた。(孤雁)

春は行く。行く春は暮れる。絹の如き淺黄の幕はふわり／＼と幾枚も空を離れて地の上に被さつてくる。拂ひのける風も見えぬ往來は、夕暮の爲すがまゝに静まり返つて、蒼然たる大地の色は刻々に蔓つて来る。酉の果に用もなく薄焼てゐた雲は漸く紫に變つた。(漱石)

夏の夕

夕焼が美しく燃えて、天地のすべてのものが其

の薄赤い影の中に隈どられて見えるやうな晩方であつた。空には桃色の雲が處々に靜かに浮いてゐた。地の薄緑に透いた所には、新酒の黄色い液のやうな透明な夕日の光があつた。この空の下を幾つかの鳥の群が鳴きながら通つた。唯一羽つうつと聲も立てず流れて来る鳥もあつた。これ等の鳥の黒い翼にも夕焼がうつつた。(野上彌生子)

廣い／＼麥の野中を過ぎ行く夕陽の景色を眺めた。紅の夕照がぼつと黄金色をなす麥の畠に反映する中に、青い夏木立が紺色になつて彼方此方に立つてゐる。……一點ルビーの様な赤い明星が輝き出した。路傍の人家には灯がつき、それが野川の水に映つて居る所もある。(荷風)

月見草や蓬の一面に生ひ茂つた河原の草地には

いつともなく涼しげな虫の聲がさも待ち焦れてゐたやうに宵闇を呼び始めて、ひそやかなせゝらぎの音と一緒に夏の夕暮の澄んだ氣持が何處からともなくしつとりと湧き上つて来る。(長田幹彦)

日暮れ前になると、極つて一度づゝはやつて来る驟雨が、すうつと物忘れでもしたやうに降り止むと山上の湖水はまるで秋のやうに明麗な薄暮に包まれて来る。向ふ山の峽にたゆたつてゐる夕雲は紅く湖の水面に落ちて、縞のやうに眞直な漣が音もなくゆらゆらとそのうへを渡つてゆく。(長田幹彦)

だん／＼松林の上が、青みがよつて、麓の林々がぼんやりとなつて何處からともなく薄白い靄が流れ

て来て、村や、森や、並木を柔かに包むと、靜かに日は暗くなつて、全く彼方の丘も、麓の村も見えなくなつて了つた。(未明)

騒々しくつて、埃もよく立つてゐる此の電車通りも、街燈の點く頃からは、外目には小瀟洒した涼し氣な住みよささうな町として見られた。鬱陶しく繁つて、しかも埃に汚れてゐる並樹の櫻も、白い燈火を帯びて夕風にそよぐと、葉蔭がみづ／＼しい色を帯びた。(白鳥)

太陽は空になかつた。方々で鯛がないてゐた。その爽やかな聲が彼の心に快よくひびいた。途はまだ暑かつたが、黄昏の風が緑にからんでゐた。太陽の餘映が低い空を眞赤に染めてゐる。(金子洋文)

今や四邊の景色は、夕暮の鮮かな色に輝いて居た。赤い空の移り行くに従つて、風にゆらめく木の葉も亦その閃きに色を變へる。水は遠く流れる黄金のやうに光つて居る。圓内に點在する赤味がかつた塔樓は碧緑の森の中にくつきりと聳えて居た。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

乾いた藪の上に、赤い草の上に、路上の柔かい埃の上に、樺の若木の細い幹や小さい葉の上に、もう燃えない沈み行く日の弱い光りが漂つて居る。あらゆるものが休んで居り、あらゆるものが和な涼しさの中に沈んで居る。何物もまだ眠つては居ないが、しかしあらゆるものが、宵と夜との歸り來る睡りの用意を急いで居る。あらゆるものが、人に向つてかう言つて居

るやうである。「お休みなさい、兄弟、あなた方にも睡りが近づいて來ました。軽い呼吸をして、悲しまないでお休みなさい。」(ツルゲエネフ・田中純譯)

はや太陽は沈んで、空は澄みわたり、蒼白くも明るくもあつた。刈り込である草原の上には鶺鴒がすうつと棚曳き、穀物畑の中には鶺鴒も鳴いてゐた。森の彼方から赤みがかつた大きな月が上つたが、これは實によかつた。一帯の土地が夏の薄暮に包まれて、穩かにひろびろと横はつてゐるのであつた。

(カイゼルリンク・中島清譯)

夕暮が來た、色彩に充ちてゐながら柔らかな、水のほとりの穩かな夕暮が、幸福の感じを齎すやうな靜かな夕暮が。枝を動かす一吹の風もなければ、セイ

又河の平らな、澄んだ面を波立たせる一戦ぎの風もなかつた。暖か過ぎもしなかつた。長閑で、住むのによい天氣だつた。セイヌ河の岸の恵み深い涼氣は朗らかな空の方へ昇つてゐた。(モウパッサン・前田昇譯)

秋の夕

風のない黄昏時の灰色が、靜かに押し寄せてゐた。公園の向ふの赤煉瓦の建物越しの、樹木の間に薄色のペンキを見せた丘の上に、夕映の濁つた橙色が、疲れた微笑した悲しげな光りを見せてゐた。(葛西善藏)

釣瓶落しの秋の日は、やつと傾きかゝつたと思ふと、たわいもなく林の向うに落ちこんでしまつた。クロオム橙色の雲が一頻り華やかに燃え盛つてゐる火

の海に、鴉であらう、黒い鳥の影が吹き散らされたやうに疎に飛んで往く。(泣菫)

小松や菅草の斑々とすがれた小穢ない晩秋の山頂からかけて、その脈々の間に落ち淀んだ午後の日は、かうした農家のひと村を一入に寂しく見せた。大きな茅葺きの屋根に不器用な瓦の棟を乗せて、疎らな人家の一群に交つて立つのが、昌一の家なのである。長縁の古い障子が、夕陽を受けて心持ち赫みを帯んで見える。跳ね釣瓶のかけはずつと長く土蔵の壁にまで届いて、夕暮に追はれた秋の鳥が、森の樹の梢に人間のやうに大きな聲を響き渡らせてゐる。(原田實)

女の手にある白い洋傘から、秋の夕暮が白々と擴がつて行く。女の胸には思はず悲しさがいつば

いに溢れて、たゞ人戀しさの中にその心が埒もなく埋もれていつた。(田村俊子)

かうして獨りでそこらを眺めて居ると、心もひとつそりして静かになる。……暫く止んで居た風が又吹き出した。と、露を含んだ冷たさが肌に感じられて、袂などもしつとりとするやうだ。ふつと遠くで何か音がした。その響が、しんとした廣い寺の堂で反響するやうに、そこらに傳つて行く。あたりが悲しみを含んで居るやうだ。(葉舟)

日が暮れて来ると、其部屋には燐を含んだ土が自然と光を發するやうに、黒ずんだ暗さの中に、黄昏の光が迷つて来る。私は又それに連れて息をひそめるやうにして、椅子の上に踞つて居る。その時には私

は必ずあらゆるものが、内から動き出して来るのを感じるのである。木も石も、ものを言はうとする時だ。

梢の間から古池の水の上に落ちる夕日の黄いろい繪模様は、もう消え失せた。空氣は俄に濕つて冷たく沈み返つた。けれども何處となく、淋しい風の音がして、木の葉が頻りと枯れた芝生の上に落ちる。植込の樹木や幹は、小暗い夜かけの中に見えなくなつたが枯れた其の葉や草の色は、黄昏の光に却つて鮮やかに浮き出して来る。(荷風)

夕暮が迫つて来た。それと共に氷のやうな北風が凋んだ葦の上を吹いて来た。太陽はもう樅の林の後に消えてしまつて、眞赤な、奇妙な形をした小さな雲

切れに蔽はれてゐる深紅の空は、一寸見るだけでもぞくぞく寒くなつた。(木下太郎)

濕氣を含んだ灰色の空が、鳶色をした廣い平野の上に低く垂れさがつてゐた。秋の香が、素裸な、じめじめした土や、落葉や、枯草やの物悲しい香が、濃んでゐる夕方の空氣を一層濃く重くしてゐた。百姓達は野ら一面に散らばつて、御告の鐘の音が自分達の家の方へ——其の藁葺の屋根が、林檎畑の風を除ける、今は葉のない木々の枝の間からあちらこちらに見えてゐる家の方へ、呼び返して呉れるのを待ちながらまだ働いてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

夕暮は迫つて来た。恰も疲れよわつた目蓋を閉ぢて、無限の闇に溺れ込む人の心持そのまゝに、夕暮

は迫つて来た。風は懐涼とした餘韻を長く曳つばつて地上を掃いて行くと、落ち敷いた枯葉朽葉のうづ高いのが空に舞ひあがり、妙に古びた腐つた臭ひがあたり

外はもう闇くなりつゝある。そして冷たくもなりつゝある。地は凍りついて、空氣が刺すやうな鋭い感觸を持つて居るが、霜のおりる時には有り勝ちの通り、音波は非常に明瞭に、微細な響をも傳へ、牛の鳴き聲も、池に追ひ込まれる足の音も、子供達や犬の躁ぐ聲も、戸の軋つて閉ぢられる音、バケツの水をうつす音さへも、いつさいが、池の面をわたつて、實に、はつきりと聞えて来る。二三の家の窓からはもう夕の灯が輝き出し、長々と火影を水の上に映して、たつ漣

にゆらくと碎けて居る。それと同時に森の後ろの方から、大きな血のやうに赤いまんまるい月がそろ／＼とのぼつて来た。(レイモント・朝鳥譯)

◇冬の夕

❖ 日が暮れかかつて、風が出て来た。頭の上をみると、裸の雑木の梢が揺れて、枝と枝とが觸れあつてゐる。空はうす青く乾き、冬の日は函根山の上に赤い一團の波紋を空に描いて、みてゐるうちに、熟れた果實が水に沈んで行くやうに沈んで行く。

❖ 私は寒くなつて、ぶるぶる體をふるわせてゐた。足もとには山背の葉が亂れて、落葉のほひが鼻のさきに沁みる。(夕暮)

つた海上にはいつの間にか濃い霧が一面に立罩めて、伊豆の山々も鳥影も、そしてすぐ間近な松原まで銀灰色の影の底に葬られてゐる。(長田幹彦)

❖ 深い溝渠の底からも、家々の陰からも、または行き來の途絶えた狭い街路の面からも、いつかしら濃い夜の闇が次第々々に湧きあがつて、その底には寒氣に懼えたやうな灯が、ぼんやり雨に滲みながら、遠く近くまたよきはじめた。私はその黄昏の死色が頭から足の爪先まで泌み徹つてゆくやうな寂しさに犇々と取圍まれながら、身動きもせず茫然としてゐた。

(長田幹彦)

❖ 一日森の梢に親んでゐた其日の空が別れる際にいたづらをして紫色の息をそこら一面に吹ツかける

❖ 昨日の天氣に引きかへて、今日は朝から灰色の霖雨が垂れこめてゐた。死つた魚の眼のやうな鈍い夕陽の在所がその岬の端に沈んで行つた。翼を濡した鷗の群が、佗びしげな啼音を人々の心のうちに残して暗い霧の中に飛び去つた。(池谷信三郎)

❖ 海の上は少し墨汁を加へた牛乳のやうにぼんやり暮れ残つて、そこらに眺めやられる漁船のあるものは、帆を張りあげて港を目ざしてゐたり、あるものは淋しいかけ聲をなほ海の上に響かせて、忙はしく配繩を上げてゐるのもある。夕暮れに海上に點々と浮んだ小船を見廻すのは悲しいものだ。(有島武郎)

❖ そとはもう夕暮近くなつて、後の松原では寒さうな晩鴉の聲がとぎれ／＼に聞えてゐる。どんより曇

のであらうと、みのるは然う思つて眺めてゐた。今日の夕方は木も屋根も乾いた色にひとつ／＼凝結して、而して靜かに絡み附いてくる薄闇の影にかくれて行つた。(田村俊子)

❖ 外はだん／＼闇が深くなつて来た。闇になつて行く冬の黄昏の色を見て居ると、水が氷つて行くやうな心持がされる。殊に水に向いて居る室の外の色が、暗くなつて行くのを見て居ると、寂しさと冷たさがひた／＼と襲ひかゝつて来るやうだ。(葉舟)

❖ すぐ眼の下は深い谷になつて、東山の一部がその向うに高く見上げられた。高田派の本山なる興正寺別院の墓がその中腹の深い樹立の中に光つて居た。手前の谷底の様などころには、××といふ名高い陶器

窯があつて、そこから立ち昇る煙が、夕暮の山の裾にたなびいて居たりした。眼を轉ずると、八坂の塔が眼の前に高く晴れた冬空に聳えて居て、その邊からずつと向うに、四條あたりの街の一部が遠く望まれた。

(加能作次郎)

夜

◇春の夜

誰か田圃道を來る。月があかるいのに提灯をつけてゐる。ぶら提灯の灯のいろが、月、光よりはそれでもうす赤くにじんで見える。水田のなかにも時折り

(蕪園)

さすがに夜は未だ寒かつたのに、街燈の燈火は春らしく美しく光つて、到る處に強い花の匂ひが漂うてゐた。上野の櫻はもう散りかゝつてゐた。自分達は闇の中にむら／＼と咲き爛れた花の蔭を、互ひに手を

取り合つて歩いた。花の氣と、若い芽生の息と、さまざまな春の匂ひの籠つた夜の森の空氣は、自分達の心を云ひやうもなく惱ましい快感に浸した。(江馬修)

その頃はもう、どこか春めいて居た。風が暖かみを含ませて、なまめかしく吹いて來るので、まだ冬着を着ては居るものゝ身體がのび／＼する。夜が更けて居るので、あたりがしんとして居る中にも、非常な力が籠つて居て、下から押し上げて來るやうである。

(葉舟)

外に出ると輝いた星としつとりとした空氣との春の夜であつた。何處かに溫氣を含んだ静かな大氣と軒燈の光りとが、遠くへ人の心を誘つた。壯助は誘はるゝまゝに明るい通りを人込みに交つて流れていつ

た。(豐島與志雄)

午後には曇つた空はまた何時の間にか美しく晴れ渡つてゐた。月の無い暗い空に星が燦然と輝いて、久遠の進路を大なる弧を畫きつゝ辿つてゐた。地上の深い静寂の上に今天體の悠久なる律動が力一杯に徐々と押し移つてゐるのである。彼は空を仰ぎ、そしてまた陰深たる木立の奥をすかして見た。心の中にたち亂れた情緒が息を潜めて、大きい圓い力となつて彼の胸の中から緊縮した。解き難い或るものが、そしてたゞ緊張し靈感する或るものが其處にあつた。不可見の或るもの不可知の或るものが、彼の周圍をとりかこんで、それが無際限に連る。心靈の孤獨と多元的宇宙の相互の愛とが、殆んど何等の矛盾なしに彼の心に感ぜられ

た。空と地とに啓示せらるゝ誘ひのまゝに彼は身を任せて何物をもうち忘れ、只ふら〜と歩き廻つた。

(豊島與志雄)

◇夏の夜

その晩は良い月夜だった。私は中央の長い甲板を通り抜けて、すつと船の舳の方までも水のやうな光を浴びに行つた。月夜ほど海上に神秘的な寂寞な感じを與へるものは無い。暗い海は波の上だけ照つて、長く一つところを見て居られないほど物凄しい。夢のやうな夜の世界はそここゝに浮かれ歩く人の影を映して見せる。ある影は六度抱擁したなどと言つて話して思々しさに笑ふ見張番の水夫もある。艦の方の甲板へ引返

して見るとM君や會計が浮世話に耽つて居る。べとべとして熱苦しい潮風に吹かれながら、私達は眠り難い夏の夜を遅くまで甲板の上を送つた。(藤村)

鐵の欄干に凭りながら、涯もない空にきらめく星の姿、白々とした雲の群などを望んだ。私は酷しい疲労もなしに——眼、耳、皮膚、其他の部分を通じて——蒸されるやうな身體の熱を樂むことが出来た。時ならぬ食欲をも感じた。(藤村)

空には五日ばかりの初夏の月が、雨を含んで懸つてゐた。薄い着物の棲をとつた、手首の白い女が心をそよるやうな匂ひを残して、幾人か四人の側を擦り抜けた。柳橋は青白い光の中に、人を何處へか誘ふ道のやうに懸つてゐた。黒い神田川は龜清の灯を倒さに

映して、手招きをするやうに柔かく揺めいてゐた。

(小山内薫)

夏の夜の大空は宵星の光を一面に刷いて、まるとつぷりと深く私達の黒い頭の上にかかつて居る。庭の隅の厩から馬の秣を喰べる音がきこえてくる。

(夕暮)

星も見えぬ夜の空を眺めてゐた。呼吸苦しい程蒸暑いのは、やがて驟雨の來ると云ふ知らせであらう。生温い風が絶えず鮮かな樹の香を送つて來るが、それとても、この不快な空気を癒すことは出来なかつた。

(吉井勇)

僕の部屋の窓は皆庭に面してゐて、すつかりあけ放してあつた。庭の薄暗がりの裡には、百合が幾つ

も白く光つてゐた。月はかなり高く登つてゐたので、栗の木の枝越しに斑になつた黄色い光を芝草の上に投げてゐた。すつと下手の庭の池には、蛙がやかましく鳴いてゐた。それから今又一つの或る音が、むかうの並木の暗がりの所から聞えて來た。それは深みのある娘の聲で、音を單調に長く延びて何かの歌を歌つてゐるのだつた。歌の言葉は僕には聞き取れなかつたが、一節一節の終りはライ、ライ、ラー、ラーとなつてゐた。その音が夏の夜中に寂しく悲しく響いて、僕は實際泣かずにゐられなかつた。けれども子供みたいに澁面をかいて泣くことが何となく僕には好い氣持もするのだつた。それから僕は寢臺の上に横になつて、庭の遠くの方から聞えて來る歌声にあやされながら、眠り

こんだ。(カイゼルリンク・中島清譯)

半月は今咽び泣く白樺の黒い葉をすかして、金色に輝いて居る。あたりの木々は、猙獰な巨人のやうにすつくと立ち塞がつて、無数の目のやうな隙間を見せるのもあれば、闇の塊のやうに重なり合つてゐるのもあつた。木の葉一つ動かなかつた。ライラックやアカシヤの遙か頂の枝は、何かに耳を傾けるやうに、暖かい空に伸び上つて居た。主家はもう黒い塊になつて居て、赤い光りがちらちらと、長い室からかゞやいて居た。静かな平和な夜である。が、その平和の下に、生きるものゝしめやかな息吹が、それとなく感じられるのであつた。(ツルゲエネフ・田中純譯)

村の方では一寸犬が吠え出したが直き静まつた

教會の傍からは夜番の拍子木の音がはつきりと聞えて来たが、その單調な響きも、その反響と共に、美しい、音楽的なものに思はれた。馬小屋の屋根の上が少し明るくなつたと思ふと、やがて月が一寸顔をのぞけた。そして五分もたつ中にそれはもう全身を――大きな、穏やかな、銅紅色の全身を現はした。また鶯が囀り初めた。川の方からは冷たい氣が漂つて来た、私の肩はひとりでに顫へた。(ラザレーフスキイ・白葉譯)

霧でくすんだ夏の夜である。どろどろな乳白色の霧が、露でしつとりとした土から立ち登る。藪や、森のほの暗い輪廓は、霧の温かい波の中に沈んでゐる。星はかすかに閃めいてゐる。空氣は厚ぼつたく、じめじめして、新しく刈込んだ秣の匂ひがある。牧場の

妖精達が沼地の上を舞ひ盛つて、魔術を行ふのは、かういふ夜だ。(ロープシン・青野季吉譯)

夜が来た、窒息させるやうな夜が。と不意に地平線が大きな火の鈎で裂かれて、そしてそれが眩しい青白い光で、既に闇に包まれた四つの顔を照らした。すると遠い響が、重たくて弱い響が、丁度橋の上を通る馬車のごろ／＼と鳴るやうに、地球の上を通つた。と大氣の熱は増し、空氣は不意になほ一層壓迫するやうになり、夕方の沈黙はなほ深くなつたやうに見えた。(モウパッサン・前田晁譯)

それは夜明け前の冷たい時だつた。草木も眠つて、一切のものが休息する、深い静穩の時だつた。夜の些細な響すらも黙つてゐた、ナイチンゲルももう

歌はなげれば、蛙も其の騒ぎを止めて、たゞ名も知れない一種の動物が、多分鳥が、何處かで鋸を引くやうな、弱い、單調な、機械のやうに規則正しい響を出してゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

砂糖大根を輪切りにしたやうな太陽は木立の後で獄の中へおしこめられて消えてしまつた。フエリイ・ボオトは鳥の波止場へ着いた。船の二つの鼻の孔から二つの碗が下りた。夜の十二時だつた。茶褐色の縞を浮べた不思議な橙色の、夜でもなく晝でもない時間が始まつた。湖の上には水蒸氣の柱が立ち上つた。私たちはとある一本の小徑に歩み入つた、行くに従つて其處に落ちてゐる魚の骨だの、紙きれだの、女の腰巻の紐だのが、だんだん少なくなつた。鳥は高い處に立

つてゐる花崗岩の峰の上で燃えさかつてゐる夏祭の祝ひ火の光りで照されてゐた。水の上にもあちらこちらに火が燃えて流れた。(モオラン・堀口大學譯)

欄干一つ隔てた露臺の向うには、廣い庭園を埋めた針葉樹が、ひっそりと枝を交し合つて、その梢に點々と鬼灯提燈の火を透かしてゐた。しかも冷かな空氣の底には、下の庭園から上つて来る苔の匂や落葉の匂が、かすかに寂しい秋の呼吸を漂はせてゐるやうであつた。(芥川龍之介)

四邊が何となく薄明るくて、穩かに静止した夜の光に映る雨側の人家の倒影が驚くばかり鮮明に認められ、道の泥濘や橋板や捨石など雨にぬれて凡てのものゝ表面が、銀器を光澤消しにしたやうに、鈍く底深

く光つてゐる。(荷風)

夜は凡てのものが、その心を露に表して相叫んで居るやうだ。山と山とは相近づき、林と林とは浮び出て、空も低くなつて山の上に懸り、日光の下に沈黙を強ひられて居る晝を送つて、今は各々の満腹の思ひを叫ばんとして相迫り合つて居るやうだ。(葉舟)

見ると、縁側の障子は、話に氣を取られてゐる間に、いつしか下棧のうへの處まで冴え返つた月光が一面に射しかゝつてゐた。處々に濃い庭木の蔭を倒して、濕氣を含んだ蒼白いその光からは、しつとりとした秋の夜寒が、ひし／＼と迫つて来るやうに思はれた。そして庭の面には暖れ細つた頼りなげな虫の聲が斷えだえに聞えて、表座敷の方から漂つて来る遠い絃歌の

さんざめきに纏れながら、大寺のやうな廣間の壁に云ひ知れぬしめやかな情趣を響かせてゐる。(長田幹彦)

山も川も平原も霧の底に眠つてしまつた。そして一日といふ人間の生命の墓場の方へ近く刻まれて行つた。人々は明日の野の勞働と收穫とを夢みつゝある。盗む者も、盗まれる者も、大地主も、小作人も同じやうな夜の愛撫の手に眠つてゐる。凡てのものは眠り、凡てのものは夢みてゐる。星は平等の魂の上にまたたき、微風は一樣に人々の夢を撫で、虫は野一面に秋の歌をうたつてゐる。(吉田絃二郎)

(どうもちと吸ひすぎた、かう吸つちやア毒だ)と彼は考へた、そして窓の方へ歩み寄つて、それを開いた。秋の夜の冷氣と、近く降つた雨氣とが流れ込ん

で來た。青すんだ、育ひたやうな、恰も濕つたモスリんで掩はれたやうな空の面には、瞬く星もなく、只月のかくれた仄明るい部分だけが、白く見えるばかりであつた。(ラザレーフスキイ・白葉譯)

月は冲天にまろく冴え渡つて、闇の天空を流れて居る。そして、蒼天にさながら並べ打つた銀の頭のやうに、二つ三つづゝ星は輝き、池の上には灰色な狭霧がおほひかゝり、その狭霧の皺が、村の上にも及んで居る。森羅萬象はあげて秋の夜の無限に深い沈黙に陥ち、たゞ夜更かしのほんの一人か二人の足音と、時たま吠える犬の外は何の物音もない。

やがて村は闇につゞまれ、深刻な秋の夜の静謐

に吸ひこまれた。村の家は、土の下にか、それとも屋根の上を蔽つて居る樹木のなにか、又はそれを繞る垣根にでも溶けて行くかのごとく小さくなつて見えるやうになつて来た。(レイモント・朝鳥譯)

冬の夜

※ ぞす黒く濁つた重い綿を大空にまばらになげつけて、それがうごかなくなつたやうな雲が斜めに肩をそびやかしてゐる。その切れ目から海底のやうな深い空が澄みきつて、雲のふちを冴えてながれる三日月は双物のやうにするどい、金屬的な細い線となつてひかつてゐる。風はハタとどつかへ落ちてかけもない。その静寂に凍つてゐる夜を潮鳴りがとどろくやうに高ま

る。(今野賢三)

※ 「今晚は……。」
何といふ寒さに顫へた聲だらう。屋根の上では高野豆腐がしんしんと凍る夜だ。つけ忘れた土間の豆ランブの光さへうす赤く凍りさうである。

「今晚は……。」
また誰か庭の方で呼ぶこゑがする。今頃誰が来たのだらう。あの寒さうな、濡れ紙を顔にあてるやうな聲は……、庭の檜の木の下あたりでありさうだし、公孫樹の木の下あたりにも思はれる。空では星が冷たく凍つてゐるのか、さや、さやといふのはその星の光が凍つて落ちて来るのか。(夕暮)

※ 私は作男の福藏の廣い背なかに負はれて、吹き

さらしの寒い夜更の河原路を家に歸るのである。川ひとつ向うは水平社の部落が、草山の山腹から川岸にかけて一面に黒い屋根を星あかりに見せてゐる。凍つていたやうにひっそりとしてゐる。

川は白い靄を溶かしたやうにぼつと烟つて、水音だけが、さ、さ、さと夜天にひびいてゐる。福藏の足元には提灯の灯あかりがまろくおちて、枯草にゆらゆらと揺られて行く。(夕暮)

※ 二人は青山墓地の中を歩いて行く中に、いつかあの白熱瓦斯のともつた通りを避けて、うす暗い枝みちに這入つてゐた。霧れた空は月の光を漲らして青み渡つてゐた。ところどころに臆病にふるへるやうにして突立つてゐる木立を洩れて来る月光が、二人の歩い

て行く小みちに青白い斑點を浮かしてゐた。もう霜が降つてゐると見えて、地面がザクザクしてゐた。

(廣津和郎)

※ 地に白い煙のやうなものが、ぼつと立つて居る。目の前に續いて居る町の先がぼつと見える。私はその中に立つて、ふつとどこかに何か隠れて居るやうな気がした。そしてその横町を右に曲つた。やがて、又左に、又右に……たゞ冷かなしんとした夜の暗さの中に、白いものがあたり薄く立ちこめて居るだけだつた。

(葉舟)

※ 一足外に出ると、其の瞬間から、わたしは寒さが骨の髄まで染み渡るを覺えた。それは大地が凍て、死んだやうに見える夜であつた。凍つた空気が双逆ふ

やうに身體に觸つて、チク／＼と痛みを起す。風はそよりとも吹かず、空氣はちつと動きもせず激んで、人の身を噛み、刺し、木や草を枯らし、虫を死なしめる。小鳥は枝から固い地上に落ちて、其のまゝ硬ばつて死んでしまふ。(モウパッサン・前田晁譯)

氷河、マンモス、曠野、何處となく家に似た黒い夜の岩石、岩石には洞窟がある。誰か知らぬが、夜岩石の間の細路で角笛を吹き、鼻で路を嗅ぎ出しながら、白い粉雪を吹き散らしてゐる——事によつたら、灰色の長い鼻をしたマンモスかも知れないし、事によつたら風かも知れない。いや、事によつたら、風は即ち最もマンモスらしいマンモスの、凍つた唸り聲かも知れない。唯一つはつきり解つてゐる——冬だ。がち

がち音のしないやうに、齒を固く喰ひしばらなければならぬ。石の斧で木片を削らなければならぬ。毎晩自分の焚火を痛から痛へと、段々奥深く移さねばならない。毛深い獣の皮をもつと餘計に被らなければならぬ。(ザミヤーン・米川正夫譯)

灯

仄暗い電燈に照さるゝ甲板の上には唯上陸を待ち侘ぶる心のみがあつた。私も甲板の欄近く行つて、遠く暗い海のかなたに、點々とした美しい燈火のかがやきを望んだ。あれが神戸だらうか。いや、あれは明石だと傍に立つて教へて呉れる船員がある。次第にそ

の光は輝きを増して來た。數をも増して來た。彼處にも、是處にも、と言ふやうに起つた。闇に隠れた山の容は見えない迄も高く傾斜らしいところに續く燈火があり、港に満ちた燈火があり、海岸には海岸らしくそれを知り得る燈火の列が水に接して並び輝くあたりは、そこがもう神戸であつた。(藤村)

愛宕の山にも、肌寒い秋風が訪れる今日此頃となつた。窓から眺めると、眞下に見える町の灯影がまるで温泉町のやうな情趣を帯びて、しつとりと明るく浮え返つてゐる。(長田幹彦)

すぐ眞下は何十何とも知れない深い／＼谿間で、一帯に濃く激んだ暗闇の底には、茶屋々々の縁臺の緋毛氈が明るい燈の火に照らされながら點々と見えてゐる。

る。そしてだら／＼下りになつた鳥邊山の樹立の彼方には、京の街が數多い灯の氈に飾られながら、まるで光の海のやうに擴がつてゐる。(長田幹彦)

夜になると總てのものが生き返る。山が黙つて深く目を閉ぢると、地が大きく目を開く。この大都會の中は燈火で賑かに歌ひ出す。家の上には濃いきれで、空氣が重くなつてどろつと垂れかゝつて居る。その濁つた海の底に人の群が住んで居る……(私は今、大きい坂の上立つて居る)この夜が更けて行つて、この賑かな燈火が自然と、ひとつそりとなつて行くと、この家が建て連ねられて居る下の土が幻のやうに浮び上つて見えて來る。夜は一しきり浮び上る燈火で、都會は花が笑ひだすやうになる。(葉舟)

新築の西洋風の窓が村の闇を明るくしてゐる。こんもりした森の中では、小さい灯が燃えてゐる。村は變りかけながら併し静かだ。小さい犬はすぐと濃くなつた冬の夜の闇に勢よく跳ね廻る。(細田源吉)

ある時、日が暮れきつて間もなく、武藏野を汽車でわたしは通つた。次第に暗くなつて行く野のあちらこちらに、ぼつりぼつりと農家のともし火が悲しく青く光り出した。それはまるで夜の武藏野を監視してゐる眼のやうに思はれた。何といふ淋しい其の光であつたらう。(前田晁)

かうして自分は常のやうに寝入つたのだが、夜中に、ふと目の上に何だかやくと灯が射してゐるやうな感じを以て目がさめて、寝てゐての錯覚なのか

と茫とした目を開けると、どうしたのだらう、本當にあまりがついて、ぼろ／＼と物古く隣いてゐる。(鈴木三重吉)

女はつと立つた。昔風の黒天鷲絨の襟のかゝつた襦袢の裾がはらりと畳を這つた。灯はゆら／＼と揺れる。障子を細目に開けると暗い沖に由良の燈臺の火が明滅した。瞬間、警笛の聲のやうなものを聞いた氣がした。濃密な夜が見通すことも出来ないやうに立て罩めてゐる。また燈臺の仄光を認めた。底氣味の悪い海峡の水路が展開した。(今東光)

私を繞つてカンヌの町は、數多い燈火を伸べ連らねて居た。灯影に照らされる町を、海から眺めやるくらゐ美しいものはない。左手に當つて、舊い區劃の

火

土地の家々は、次第に高く上へ／＼と建てられて居る、其處の燈火は星の光と混じつて居た。右手にはクロワゼットの幾つかの瓦斯燈が、大きな蛇のやうに、一哩半も長く續いて居た。(モウパッサン・孤雁譯)

電氣廣告が燃えてゐた。或る石鹼の廣告がある大きな建物の正面に血の上げ潮を寄せてゐた。建物は一瞬にして闇に没し終つたかと思ふと次の瞬間には青くなり縁になりして、著名な踊り子が拍手の度毎に別な色の肩かけをしてお辭儀をしに来るやうにして見物に禮してゐた。(モオラン・堀口大學譯)

小さい橋を渡ると、だら／＼と下る道が、ずつと暗くなつて、夜更けのやうだつた。傍に引き添つて歩いてゐる女が、ちよつと立ち停つて、巻煙草に火をつけた。ぱつと、氣持よく燃えついた赤い火が、蒼いほどに女の白い顔を浮き出させた。(細田源吉)

明子と海軍將校とは云ひ合せたやうに話をやめて、庭園の針葉樹を壓してゐる夜空の方へ眼をやつた。其處には丁度赤と青との火花が、蜘蛛手に闇を弾きながら、將に消えようとする所であつた。明子には何故かその火花が殆んど悲しい氣を起させる程それ程美し

く思はれた。(芥川龍之介)

今しがた四つ張網の五艘の舟が舳を並べて潔く漕ぎ出して行つた。其の後から日が暮れた。篝火が焚き出された。十個ばかり並んだ普通の釣舟の火から少し沖の方に、陸から見ると菱形になつて四個の篝火が他の舟よりは二倍も三倍も大きい光を放つた。とそれからすつと沖に一つ離れて更に大きな火が輝き出した。この五つが四つ張網の篝火であつた。(加能作次郎)

彼は慌て、戸口へ遁げ出した時火は既に赤い天井を造つて居た。煙は四方から檐を傳うてむらむらと奔つて居た。蛇の舌の如くべろべろと焰が吐き出された。吹き募つて来る疾風は直ぐに其の赤い舌を吹き干切らうとした。後からくと勢力を加へて吐き出す煙

は焰の穂の如く壓し磨かされた。(長塚節)

凄じい光景が突然彼の前に展開された。むくむくとした黒煙が渦巻いて、向ふの高臺の木立の上に倒れかゝつてゐた。その間を方々に、赤い焰がどつと舞ひ上つて、火の粉が高く撒き散らされてゐた。大地から出てくる何とも云へないどよめきが、遠く空間に漂つてゐた。(豊島與志雄)

別荘に火を點けてから、シランチイは静に傍の方へ退いて、地べたに腰を下した。そして明るい煙が輪を造りながら、庇とバルコンを支へてゐる木の圓柱の周りを渦巻き始めるのを、ちつと見物にかゝつた。まるで黒いレースのやうに、飾りの透し彫りがゆらゆら揺れて、薄桃色をした火が無数の隙間を潜り出した。

第四章 天象

空

◇春の空

まるで煤のやうに濃い煙が、螺旋状を畫きながら天に沖したかと思ふと、やがて不意に、さながらありたけの力を集めたやうに、眞赤な物凄い巨火が煙の蔽ひを投げ捨てた。

家は蠟燭のやうに燃えた。(フェーゲン・米川正夫譯)

火は風に逆つて、貧しい松の森の上を走つて居た。それは不齊な線をなして、もつと正確に言へば、曲つた舌の上の厚いぎざぎざの壁のやうに動いて行つた。そして煙は風に攪はれて行つた。コンドラットの言つた事は正しかつた。それは實際に上火事であつて、たゞ草を焦がして行くだけである。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

空が廣い。その曇つた銀の光が、無数の層をなして、低い兩側の家の屋根の上を覆つて居る。家は黒く乾いた色をして、その薄明の中に沈んで居る。この家の間から、廣い空を見ると、この曇つた銀の光が、神経を柔かく麻痺させて行くやうに、今迄の騒がしい中の、黄色い電燈の光も、疲れた心持も凡て忘れてし

まふ。微かな電氣の力を全身に感じて居るやうな興奮と眠りに誘はれて行くやうな痲痺が自然と傳つて来る。(葉舟)

二月の半ばごろから動いて来た春のこゝろは、三月になつて漸く齊うて来る。空の青が、柔かい滑かさをもつて、仰ぎ見る人の眼に言ひやうのない和らぎを與へる。(薰園)

見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば揺ぐかと怪しまれる程柔かき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。(漱石)

抑へ付けるやうな暗い空は、明るい淺黄色の幕と變つて、何となく、心が軽く躍るやうだ。庭の赤い

土に芽ぐんだ木の梢を見てみると、淺黄色の空と調和するその若々しい緑色が鮮かに目に映つた。(梅溪)

夏の空

私は、頭をあげて空をみた。五月の空は濡れてゐるのではないかと思はれる程の青さで、交叉した竹の梢の上にかかつてゐる。後には午前の日がちらちらと水か何かのやうに笹からこぼれてゐる。(夕暮)

水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の來た方をふりかへつて佇むのに似てゐた。そんな時には、土耳古玉のやうな夏の午前の空を、土耳古玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に映してゐるのであつた。(佐藤春夫)

空はどんより曇つたやうな、曇らないやうな、日影は見えてゐるものゝ、くつきり青い空から照らし付けるのではなく、仰いで見たとけでも暑さうな、ぼんやりした色をしてゐる。大早の折の空模様だ。(孤雁)

今迄曇つてゐた朝空から薄日が射して、圓い山一面の青芝が、てらてら滑かに光つた。いかにも平和に満ちた、柔らかな暢々とした景色である。見てゐる間に、だんだん空が青く晴れて来て、山に射す陽の色が濃かになつて来る。(薰園)

秋の空

光の落つる西の空を、不思議に思つて仰ぎ見ると、何とも言ひようのない美しい色に輝いてゐる。枯

梗色といはうか濃い紫が、つた色、光はその中から發射せられて、此塵の立ち舞つてゐる都會へ降りそゝいでゐる。それも、一年に秋の暮方に於てのみ見る一回か二回の、然かもほんの一刹那の現象だ。(孤雁)

また雨になりさうなやうすの、低く下つた、灰色の雲の早き擴がりを見入つた。見る限り動いてゐるものゝ影もない。たゞ黒く濕つた島の中の小川が黄色に淀んで、遁げ落ちるやうに流れて行く。(鈴木三重吉)

そのすぐ上から、悪病にでも詛はれたやうな、變に物暗い陰氣な、午後の空の色が、家の中に暗く倦み疲れた人間や、すべての汚ならしい地上のものを腐らせようとするやうに、低く底黒く壓へ下つてゐる。(鈴木三重吉)

山は遠く霞んで見えて居た。けれども十月半の
の
大空は、かぎりなく晴れ渡つて、雲一つなく、鋼の
やうに青かつた。背中からは、温かい日がぼかりぼか
りと射した。(佐藤春夫)

冬の空

すつと空が明るくなる。霞は何處へか行つてし
まつた。而して眞青な海面に、漁船は蔭になり、日向
になり、堅い輪廓を描いて、波にもまれながら淋しく
漂つてゐる。機嫌買ひの天気は、一日の中に幾度とな
く、かうした顔のしかめ方をする。(有島武郎)

窓の戸を細目にあけて、たそがれ行く町の空を
ぼんやりと眺め入つた。雪になるらしい空合である。

むかうの四つ角の火の見櫓に烏が二三羽とまつてゐ
る。(加藤武雄)

自分は門を出ると、道が眞白く、燃え立つやう
な色をしてゐるのに眼を射られた。驚いて、空を見上
げた。日輪は鋭すぎる位、らんらんと光つて輝いてゐ
た。空が大きく見えた。ときすました刃物のやうに光
つてゐた。(千家元磨)

青い空はすつかり自身の口から吐き盡してしま
つた白いものを、遙かに見下ろして笑つてゐた。その
面にいつばいに光があふれてゐた。(田村俊子)

風

春の風

宵闇の空、水気を含んだ、ひやくする風がそ
ろつと吹いて来る。(葉舟)

白い不二の山の見える峠の掛茶屋などの破れ葺
簀に、白い櫻の散りかけてくる寂しさは、何とも言へ
ません。薄ら冷たい風の間、山裾からは、早くも炊
ぎの煙が二筋三筋とのぼつて来ます。(白秋)

その日は朝から風が吹いて、遠近の樹木はザワ
ザワした。椽側へ出ると、廊下は砂塵でザラ／＼して

ゐた。庭の隅にある櫻の花は、風のために大方散つて、
その花片が、此處彼處に一かたまりに吹き晒されてゐ
た。(梅溪)

その翌日から、武藏野獨得の名物といはれてゐ
る黒風が、幾日も吹きつゞいた。それは實際ひど
い風だつた。朝のうちは氣持よく晴れて、けふこそ晩
春の穏かな日であらうと喜んで思つてゐると、十時ご
ろから、どこか遠くで、ざあつといふ物凄しい呻りごゑ
が起つたと思ふと同時に、一陣の砂埃を吹いて来るの
がはじめであつた。見る／＼うちに、風はますます砂
埃を巻いて、忽ち、東西南北、四方八方、地はどこま
でも涯しがなく、天は三四段の高さまでも、ぐる／＼
と渦巻く砂埃で赤暗くなるのであつた。まるで火事だ。

どう見ても火事である。(前田晁)

夏の風

岡の上へ出ると、なまぬるい微かな風が、黄色くなりかけた麥を渡つて来る。麥の穂と穂が擦れる音が聞える。強い掩ひ被さつて来るやうな叢の香氣は二人を沈黙させた。(藤村)

富士山が深碧の裾を廣げて居る。その裾とひよろ松との間は、一面の玉蜀黍畑で、半分赤くなつた葉と、半分赤くなつた莖とが、紅毛を出した長い實と一緒に、風の吹く度に、彼方へさら〜、此方へさらさら、一齊に靡く——靡く毎に、葉と莖とが光る。

(小山内薫)

とうとうと云ふ物の響が、ふと私の背後に起つて、消えるでもなく、初まるでもなく、空中にたゆたつてゐる。振返つて見ると、赤松の林だ。樹上に高く風がからんで吹き去らない。薄紅い鱗を付けたやうな松の樹が、幾本も眞直に立つてゐて、頭だけを動かしてゐる。月は上からその葉の茂みを洩れて、地上に縞を織る。樹の根を繞つて、薄紫の草花が微かに咲いてゐる。とうとうと亘つて来る風につれて、かすかではあるが、松の香が漂ふ。(孤雁)

風はまた思ひ出したやうに後から追掛けて来て、一列の樺林に打當かる。林はしどろに姿を亂して騒ぐ。その中を風は、無理やり樹々を押し分けて、水上へどつと出たかと思ふと、やがてそのまゝ、音は低

く遠くかすかに消えて行つてしまふ。動揺する空氣の働きも、重くるしい闇の力に壓せられて、自づと鈍るものと見える。(孤雁)

私は花瓶に水を入れ變へると、その杓で冷たい水を一口飲んだ。何もすまい。こぼれた花瓣もまだ昨日のままに散つてゐた。風情がある！私の慰めとは、これだ。逃げられた男の恍惚とは、逃げた妻の美しい習慣を忘れぬことだ。窓が閉まつてゐた。私は窓を開けて風を入れた。カーテンを買はねばならない。猫がひらりと何處かで飛び降りた。新月がひとり空に残つてゐた。(横光利一)

二三日上らなかつた正面の噴水がけふからまた上つた。刈つた芝が美しい。百合はみんな凋れて了つ

た。ばらばらと通り雨があつたあとに、全く秋の半ばのやうな涼風が吹いた。(犀星)

秋の風

その日は特に険しい天氣で、夕方になつてからは、恐ろしい風が吹き出したので、百姓達は、皆非常な不安に攻められた。今最後の發育を遂げやうとしてゐる總ての作物が、荒い風に會ひ、強雨にたゞかれるといふことは憂ふべき事である。で、彼等は、田の見廻りや何かにせわしく、私共の畑も、三人の小作男で、充分圍はれたり、突先え棒をあてがはれたりした。

(中條百合子)

秋風は岡の上に吹き渡つて、既に黄ばんだ山櫻

の葉をばら／＼と振り落す。草は伏たり起きたりして、
楊の葉も白く裏がへる。(藤村)

西風はどうかするとばつたり止んでしまつたか
と思ふ程静かになつた。泥を干切つて投げたやうな雲
が不規則に林の上になつとひつついてゐて、空はまだ
騒がしいことを示してゐる。それで時々思ひ出した
やうに、木の枝がざわ／＼と鳴る。(長塚節)

西風が吹く日が多かつた。朝は好い日和で、今
日こそ大丈夫と思つたやうな日にも、午後からは大抵
林が潮のやうに鳴つた。(花袋)

冬の風

風が吹いて来ると、例のしやがれたやうなばら

ばらと言ふ音をさせて、木の葉が枝を打つ。澄みきつ
た空が、次第に黄昏れて行くのを見て居る。その身の
すぐそばでその音がするのだ。(葉舟)

路は少し坂になつてゐる。私はそれを上り切つ
た。と、私は頬を削られるやうな思ひがした。風は四
邊の木立に高く鳴つて、寒い／＼音を立てゝゐる。
(前田晁)

風が耳際をひゆうツと唸つて、街を横ざまに吹
いて過ぎる。と、煙のやうな灰色の砂が、軽く渦を巻
きながら、風の後を追つて行つた。私は、いつものや
うに、炭屋の路次を北へ向いて、通り抜けやうとした。
風は右側の板塀の上に、高く結び立てられた檉垣にさ
あつといふ音を立てゝ、ほの暗い左側の長屋の軒下を、

すうツ、すうツと寒く吹いて通る。(前田晁)

其時どこからとも知れず、一陣の風が起つて街
を吹いて過ぎた。さツと吹き過ぎるに従つて、家毎の
戸は音をたてた。其音をきくと、街がおびえ恐れて、
戦慄した様な感じがする。街に落ちて居た紙片が、俄
かに生きたものゝ様に舞ひ上る。(青果)

木枯が野山を吹きまくる光景は凄しく、烈しく、
又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は撓み、幹
も動揺し、柳竹の類は草のやうに靡いた。(藤村)

遠くの方からごとと音を立てゝ風がまた打當つ
て来た。障子の破れ目が鳴り、天窓ががたびしやいつ
て戸袋が煽られる。一寸間を置くかと思ふと、また襲
つて来る。一陣また一陣、次第に其音が高くなつて来

るかと思つて居ると、最後にどつと打當つて屋根でも
剥がれはしまいかとばかり烈しく過ぎた。(孤雁)

夜眼にも白い砂ほこりが時々遠方に舞ひあがつ
たかと思ふと、忽ちさつとまたもとに吹きつけてくる。
まだ十一月末の、暮れきつて間もない八時近くだつた
が、風はもう真冬の木枯を感じさせるやうに冷たかつ
た。(南部修太郎)

雨

春の雨

黒い色に光澤があつて、細かい滑かな粉末が飾

を通したやうに綺麗な庭の上に、静かな春の雨がふる
と、しつとりとした美しい濡れ色となつて、庭石の青
すんだ色や、女松の細長い赤い幹の色にうつつて趣の
ある色彩を作る。(野上彌生子)

ふと雨の音に心づいて、窓の方を見た。窓が開
け放してあつた。いつの間にか強くなつた雨の餘沫が
窓の敷居を濡してゐた。そこから見える夕方の雨の空
に、白絹のやうな光があつて、ぼち／＼と雨の雫が、
水晶の點々を並べてゐる楓の枝の薄紅い芽の色に、そ
の光を映ろはせてゐた。(田村俊子)

巴里は雨の多い處だ。併し春の雨は細くして光
線のやうだ。行人は傘もささず、むしろ樂しげに濡
れてゆく。もし濡れすぎると思へば、身ぢかなカフエ

に懇めばよい。(山本鼎)

木立に透かして能く見ると、折々は二筋三筋の
雨の糸がとぎれ／＼に映る。斜めにすうと見えたかと
思ふと、はや消える。空の中から降るとは受け取れぬ、
地の上に落つるとは猶更思へぬ。糸の命は僅かに尺餘
りである。(漱石)

街の中には傘の影が亂れてゐた。電車に乗ると
雨の中を花見に行つて来たものか、派手な様子をした
若い女や、男共などが澤山乗つてゐた。やがて電車は、
お茶の水の濠邊に沿うて走つたのである。濠邊の櫻が
雨の中に咲いて、頻りと散つてゐる。(未明)

雨が静かに降つてゐる。ほんとに静かに降つて
ゐる。窓を明けて見てゐなかつたら分らないほど静か

に降つてゐる。そして其のほのかに煙つた向うの丘の
傾斜の一角には、紅梅の花が、周囲がまだ朽葉色に眠
つてゐる中に獨り目覺めたやうにぼつかりと咲いてゐ
る。机にちつと頬杖を突いて、それをうつとりと眺め
てゐる春雨の朝の快さ。朗かに晴れた日もいゝけれど
雨もかう静かに柔かだとまた別様の趣があつてよい。

(前田晁)

梅 雨

或る月に雨が續いて降つた。夜が明けても、雨
の水で日の光が暗かつた。青葉はだらりとして、幾日
も乾いた事がなかつた。ものについてゐる陰はすべて
水づいて、腐つてゐる。太陽の日で、焼き亡ぼされて

しまふ。いろいろの毒が、恣に漲つてゐる。生きて
ゐるものゝからだはこれの爲めに、すべて腐蝕されて、
微が生えて、地の上に腐つて行きさうである。(葉舟)

どか落ちになつた足許から、遠く／＼隅田川と
江戸川との水積地が、紙のやうに平らに廣がつて、ど
んよりと動きもせぬ雨雲が、僕の心のやうにそれを蔽
うてゐた。面は静かに降るともなく降つてゐる。

(有島武郎)

降りつゞく雨の日は木葉一つ動かすに沈み返つ
て、平生は朝から聞えるさまざまの街の物音、物賣の
聲も全く途絶えた午前の十時頃が丁度夕方のやうに薄
暗い時、いつもは他の物音に遮られて聞えない遠い寺
の時の鐘が、音波の進みを目に見せるやうに響いて來

に聞えて来る。埃だらけな道筋は、通り過ぎた大雨の名残を僅かに留めて、蒸を立てて居る。かうして雲が過ぎ去ると、何處ともなく微風が吹いて来て、草は濃緑と金色に染め分けられる。木々の葉をぼつたりとくつつけ合つて、涼しげな隙間を作る。と、あたり一面に、強い香りが濛ひ流れるのであつた。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

公園の樹々は、重苦しく沈黙してゐた。雷雨の近付いて来る徴候があつた。最初の雷鳴は、白い雲の後からやつて来た。黒い影が地に落ちた。縦の梢は騒ぎ始めて、黄い埃が立つた。雨が木の葉に、喧しく落ちて来た。最初の光りが青い焰をつましましやかに閃めかした。(ロープシン・青野季吉譯)

大粒の生温い雨が彼女の額に落ちた。そして微かな、殆ど氣も付かない位の戦きが、今しも始まりかけてゐた雨の戦きが、簇葉の中を走つた。やがて、騒ぎが遠くの方から走つて来た。木の枝に風の當るやうなざわ／＼した騒ぎが。それは、地上や、川の上や、木の上に、どつと流れ落ちて来た夕立だつた。(モウパッサン・前田晁譯)

モントルウの附近へ来た時に急に雷雨が襲つて来た。激しい稲妻が峰から峰を縫つて走つた。けたたましい物音でわれ等の汽車を包んだ。吸り泣きの聲がきこえて来た。私の同室の女客もびくつとして眼を覺して、無意識に十字を切つた。吃驚したのでかの女は旅に出た南國の女によく見るやうな尾羽うち枯した鳥

の哀れな様子をした。(モオラン・堀口大學譯)

◇暴風雨

廊下には、裏の林の木の葉が、雨に濡れて散り込んでゐる。銀箭のやうな雨脚が、烈しく庭に落ちて来てゐるのが、それと蠟燭の火に見える。裏の林は鳴つて、枝と枝との觸れる音、葉と葉とのすれる音が一つにかたまつて、轟と云ふ音を立てた。空は墨を流したやうに暗かつた。(花袋)

びゆうと一吹きふいて来ると棟木が身慄でもするやうにぎい／＼鳴つて、その餘勢は裏の雑木林の中で凄じい絶叫をあげる、時々枝と枝とが軋みあつて赤兒の悲鳴のやうな奇怪な音響も聞えて来る。雨はそ

の勢に煽られてまるで小石でも巻きあげてくるやうにばら／＼と雨戸に吹きつける。波浪の碎ける轟響はその合間合間に地の底を傳はつて物凄くひびいてくる。(長田幹彦)

不圖眼を覺ますと、秋雨とも言はれぬほどの激しい降りで、風が加はつたか、礫のやうに戸に打ちつけてゐる。黒い大きな魔が押し寄せるやうに、南の方から遙かに海を渡つて来たらしい風が、轟と音を立てて、さまざまの地上のものを皆お辭儀させたらしく、私の二階を嘲弄うやうに一振り揺り動かして、北の方へ駛せ過ぎた。(小劍)

一夜暴れた風雨の跡は其處にも此處にも見えな。豪雨に洗はれた道路には、石が出て居て、それが

車の轍に軋つて鳴つた。ある家の小屋は、誰か力のあ
る人でも持つて来てそつと其處に置いて行つたといふ
やうに道路の真中に幅をきかして吹き飛ばされてゐ
た。(花袋)

◇秋の雨

或る夜、庭の樹立がざわめいて、見ると、静か
な雨が野面を、丘を、樹をほの白く煙らせて、それら
の上に降りそいでゐた。しつとり降りそいで初秋の
雨は、草屋根の下では、その登音も、雫も聞えなかつ
た。たゞ家のなかの空気を、ランプの光りを、しめや
かなものにした。さうして、それ等のあひだに住んで
ゐる彼に、或る心持ち、旅愁のやうな心持ちを抱かせ

た。(佐藤春夫)

直ぐ前の縁側の端にたつた一匹死後れてゐるや
うな赤蜻蛉が、寂しげに雨を避れて便りのない自分自
身を考へ入つたやうにぼつねんと冷たく棲つてゐた。
その赤い體の色のにじんだやうな、脂のある薄い羽衣
には、小さい雨の粒が微かに溜つてゐる。(鈴木三重吉)
廂を掩うて居る桐の木がもう落葉して居るので
其落葉へ雨はばしやんと打ちつける。廂へもじとじ
とと打ちつける。さうかと思ふと草鞋で歩いて来る足
音のやうにしとくと遠い響が聞えて来る。蟬が減入
るやうに鳴いてゐる。さういふ錯雜した響の中に夜は
しん／＼として更けつゝあるのを感じしめた。

(長塚節)

灰色な瀧なす大雨が注ぎかゝると、地上の色を
一切奪ひ、彩を消し、世界はいつべんに暮色のなかに
渦巻かれ込んでしまふ。すべてが混雜し、紛糾し、夢
のなかにでもさ迷つて居るやうで、泥沼に化した田や
畑やから、痺れた森から、また荒廢しきつた野から名
状すべからざる悒鬱がたち迷ひ、その悒鬱の魔は流れ
て恰も重苦しい雲の塊りの如く、悲しげな十字路に行
き、わびしげに腕を伸ばして居る十字架の影に遷り、
人氣なき道路の上を通つて行く。その悒鬱の魔に觸れ
ると、樹木は恰も恐怖するが如くに俄に打ち震へ、疼
くが如くに泣き出す。その魔はまた捨てられた巢のな
かや、頽れた小屋のなかなどを覗いて行き、名もない
屍を埋めた墓地のなかの棺の中までも匍匐りこむで

行き、腐り朽ちたぼろぼろの十字架にも絡り、此の地
方の田舎一面に行きわたる。(レイモント・朝鳥譯)

◇時雨

加茂の河原には丁度狭霧でもかけ渡したやうに
時雨がしとくと音もなく降りしきつてゐる。團栗橋
の上を行く傘も灰色に霞んで、すがれた河原の草叢に
も何處となく悲しげな色彩が漂つてゐた。(長田幹彦)
空の真中の一點が、ほつかりとほぐれて、其處
がだん／＼赤味を帯びて明るくなつてきた、その明る
さに追はれるやうに、時雨の数が軒の處に數へられる
ほど少くなつてきて、ぱらり／＼と小さな雨の足を掠
らしてゐたけれど、それもいつまでも見成つてゐるう

ちにいつともなく途切れて立ち消えて行つた。さうしてほんのりと目にとまらないやうな日射しが向ふの堀から見える松の枝に斜に色をこぼしてゐた。(田村俊子)

私は北國の月夜に心を惹かれて、淋しい町に出で見た。氷りついたやうな月を仰ぎながら、とある横町へ曲つて三町も行くと、急に、空が暗くなつて、雲が月を呑んだと思ふ間もなく、颯と時雨が降つて來た。私は狼狽して、小さい蕎麥屋の中へ駆け込んだ。外にはばら／＼、ばら／＼と雨が屋根を打つ音がした。その音が妙に旅愁を誘つた。(梅溪)

雪

道は針葉樹の密林にはいつた。息をとつて行かれさうだつた風は、そこで急に凜ぎでもしたやうに遮ぎられたが、雪はまだ落ちて來た。低くも三丈以上の木々が、ガツシリと枝を組み、葉を重ねて、舊い農家の廣々とつた土間に立つて眞黒に煤けた屋根裏でも仰いだやうに、厚ぼつたく天をかくして、そこでは雪さへも暗い腹を見せてゐた。それでゐて、どこからともなく粉雪がハラ／＼と落ち續けた。吹き晒しとは比べものにならないほど薄くはあつたが、大地ももとより雪に覆はれてゐた。(里見諒)

雪の重みで可なり太い枝が折れてゐるところがあつた。新しい雪が堆く行く道の道を塞いでゐる。葉末を雪に抑へられた枝は、裂けた口に蒼白い地肌を露はして、まだ十分跳ねあがる力をこめたまま、ヂツと静まつてゐた。(里見諒)

村が絶えて、いよ／＼危ぶんでゐた野原に差しかゝると、いつ人間が其處を歩いたか分らない程に、足跡が處々絶えて、また其の先にあつたりした。私は、下を向いて眞白な雪を見詰めたが、其の淺く穴となつた足跡を探して僅かに路の走つてゐる方向を知つた。かうして人の足跡を見ることが出來たのも四五丁の間であつた。私の眼は、雪の光りに疲れた。そして、募つて來る吹雪のために眼口を閉ぢられて、雪の上に

立つたまゝで顔を反けなければならなかつた。(未明)

しばらく、このほんのりと明るい、薄氣味の悪い、不安な色を帯びた世界を見てゐると、忽然として、海嘯のやうに、白い渦を巻いて、吹雪が西から起つて、東の方へと野を駆けて來た。私は、身を竦めやうと思つてゐるうちに、もう屋根の上は一面に雪烟の中に隠れて、目も口も開くことが出來なかつた。暫らく兩手を顔に當て、じつとして、吹雪の過ぎるのを待つて、やつと眼を開けて、頭を巡らすと、たゞ四方は、何處も白い壁を立て廻したやうに、一寸先を見透すことも出來なかつた。(未明)

高原の畑地を眼がけて吹きおろして來る風は、割合に粒の大きい軽やかな初冬の雪片を煽り立て／＼

横さまに舞ひ飛ばした。雪片は暮れ残つた光の迷子のやうに、ちかちかした印象を見る人の眼に與へながら、悪戯者らしく、散々飛び廻つた元氣にも似ず、降りたまつた積雪の上に落ちるや否や、寒い薄紫の死を死んでしまふ。たゞ窓に來てあたる雪片だけが、さらさらさら〜とさや〜かに音を立てるばかりで、他の凡ての奴等は残らず嘸だ。快活らしい白い啞の舞踏！

(有島武郎)

庭は静かである。遠くの方で鳥渡の間鳥の鳴聲の聞えた後はいつも軒先の冬の日影に終日聞かれる雀の囀もない。水晶の洞窟のやうにこんもりした雪の植込を隔て、垣根の外に往來にも物音は絶えてゐる。川端の大通りを過ぐる電車の響も日頃に比べては殆ん

ど聞取れぬ位で積る雪の薄明るさと其上に降る雪、滑る雪の相觸れる低い悲しい響は、深い沈静平和の底に一縷の優しい情緒の糸をば何といふ事なく柔かに揺ぶる。(荷風)

後の田圃では、水こけの悪い田に降つてる内から雪は溶けつゝあつたので、畦畔が殊更に白い線を描いて目に立つた。其處にも、堀の邊の赤い實の錆びた野茨の枝に堅に成つたり横になつたりして、ずん／＼消え行く雪を悦ぶやうに頬白がちよん／＼と渡つた。夕方には田圃の白い線も途切々々になつた。何處の梢も白いものを止めないで疲れたやうに濡れてゐた。雪は悉く土に落つてしまつた。(長塚節)

シン〜と降りつむ雪の氣勢は、小屋がけ同様

の校舎をめぐつて、細かな白い魔ものの群が、衆を恃んで、ひそめきながら八方から取り圍まうと押し寄せて來るかとはばかり、靜かに、然し重くるしく立ちこめてゐた。(里見淳)

この一週間の間雪が降り續いてゐたので、蔦色の土地は、秋の施肥でもう肥やされた土地は、鉛色に變つて、大きな氷の敷物の下に眠つてゐた。白い帽子を冠つた藁葺の家は寒かつた。そして圍ひの内のまるい林檎の木々は、楽しい花の季節でもあつたやうに眞白に粉をふいて、花が咲いてゐるやうに見えた。(モウパッサン・前田晁譯)

雲・霧・其他

◇雲

一番私達の眼を驚かしたのは雲であつた。午後の日影を帯びた白い堆積は、大きな影を山から山へと漂はせて、谷から谷へと動いて行つた。「何うだ、あの雲の影の大きいこと！」私達は思はずかう言つた。後の谷は雲で包まれてゐるために殊に廣く大きく見えた。そしてその白い堆積の中からは、山の巔が丁度海の中の島のやうに其處にも此處にも顯はれて見え

た。釜のやうな深い大きい谷からは鼠色の雲がもくもくと巴渦をなして上つた。(花袋)

磯から見た夕暮の雲の色彩は何とも言はれず美しかった。赤く燃えたやうな色をしてゐるものもあれば、代赭色に染つた周囲を金色で縁どつてゐるやうなものもあつた。或は鼠色に、或は褐色に、オレンジ色に、かと思ふと、羊の毛のやうな眞白な雲が大きく地圖のやうに一方にひろがりわたつた。黒い雲の間から数條の線を成して海上に落ちてゐる日の光は、人をしていかに自然の偉いなるかを思はせた。そして時にはその雲が空の半を蔽つて烈しい銀箭のやうな雨が海を打つた。(花袋)

わたしは机の前に坐つて、窓から、直ぐ目の前

に悠然と其の全容を見せてゐる駒ヶ嶽を眺めてゐた。其處にはたゞ一抹の、ほんとうにたゞ一抹の雲が、淡く中腹にかゝつてゐるきりであつた。わたしはそれを見詰めてゐた。と、それが、その一抹の雲が、西から東の方へのろくくと、のろくと移つて行く。そしてたうとう山の肩からすべつて行つて、澄んだ青空の中へ消えて行つた。(前田晁)

わたしはちつと目を凝らして見た。そして、おや！と驚いた。雲は山の中腹から、丁度煙が湧き立つやうにそろ／＼と湧きあがつてゐるのであつた。木らしい木もない、澤らしい澤もない、まる裸といつてもいゝやうな其の山腹から、しづ／＼と湧き出して來るのであつた。

へえ！雲はあゝして湧くものか！岫より出づとは聞いてゐたが、あんな骨だつたはげ山から、まるで地雷が群れ立つやうにして湧くものだとは思はなかつた。

おや！いつかそれが見る間にだん／＼強く、烈しく濃くなつて來た。そして駒ヶ嶽は其の中腹から上をすつかり雲の中に没してしまつた。

何といふ早い漲り方であらう！いつか日もかげつてゐる。青空は心細いほど次第に其の領域を狭くしてゐる。さつきまで朗らかな聲で歌つてゐた鶯も淋しい涙つぽいやうな聲に變つてゐる。(前田晁)

空は限りなく晴れて、どこまでも青く澄んでゐる上を、綿の光つたやうな濃い雲がしきりに飛んで行

く。風の力が烈しいと見えて、雲の先が吹き散らされる。青い地が透いて見える程に薄くなる。或は吹き散らされながら、塊まつて、白く柔かな針を集めたやうに、さゝくれ立つ。(漱石)

向うの原つばの上の空を、灰色の塗料のやうな雲がひたおしに東から西へながれてゐる。風もないどんよりとした大氣の濃んでゐる夕なのに、空には氣壓の推移があるとみえて、その雲のながれゆくさまは空を押して傾けて大地をも曳きすつて行く位だ。(夕暮)

細く延びた岫から、すつと、沖にかけて、いかにも、昨夜の風の名残らしい影を留めた密雲が低く凝つてゐて、同じく日光に染められてゐる。その物々しい雲の姿は、今日もまた風かと眩かすにゐられないほ

どだ。(牧水)

弱々しい日光が、むかう岸を蛇つて、ほんのりと雑木林の半分を金にした。と、蔭つてゐた日光が、またぼつかりと足下まで照り亘つて来て、遠い思ひのする雲の峰が、行手に立ちならんだ、白い風車や、限りもなく土の起伏を浸してゐる麥の穂や、古い灰色の木造の家並などの上に、縞になつて流れてゐた。

(前田河廣一郎)

空には暴れ模様があつた。動かない大きな雲が、はるか地平線に、黙つて、重たさうに、しかもあらしを脊負はされて、待ち伏せしてゐるやうに見えた。

(モウパッサン・前田晁譯)

春のあしたには、透き通つた空にくつきりと姿

を現はすふつくらと丸味を帯びて白光りする雲がある。乳色の地にその輪廓を描き出した薄絹のやうな雲がある。灰色の遠空を後に控へて、浮び出た鼠色の雲がある。深い憂鬱にとざされて、容易に暮れ果てぬ平原の日没時に現はれる洋紅色と金色の雲がある。同じやうな形をした數知れぬ羊毛のやうにむくむくと重なり合つてゐる癖に、どこかの隙間から青空の一片を覗かせてゐる雲がある。悠々と静かに通つてゆく雲があるかと思へば、大急ぎで通り過ぎる雲もある。灰色の雲が空一杯に被さるとき、不透明な、布越しのやうな、鼠色の光を地上に落すこともあるが、これがまた、秋の景色に一段の情趣を添へるものである。

(アンソリン・笠井鎮夫譯)

霧

一寸霧が霽れるのぢやないかと思ふと、またすぐに一層濃いのが襲つて来た。

「何時まで歩いてても歩いてるといふ氣がしないね。」と私が云つた。

「まるで夢遊病者みたいだね。」

「さうだ。そして馬鹿に遠い所に來たやうで、それで何かが僕達のすぐ近くに居るやうだね。すぐ側に何かの奇蹟があるやうな……。」

「すぐ側だつて？」

「私達は何かに吃驚して後をふり返つてみた。濃霧が深く立ち罩めて何にも見えなかつた。(豊島與志雄)」

立ち並んだ人家の上や通りの中を、濃霧は徐々におし流れてゐた、そして物影にはそれがゆるやかに渦を卷いた。人は自分のまはり十歩の所と、それから垂れ籠めた濃霧の帷との外には、何にも見なかつた。

何か不可思議なものが靜に流れてゆくのが、はつきりと心に聴かれた。凡てのものが濕つてゐる、そして柔かく息を潜めてゐる。人は自分の先に何かがあるか、また自分の後に何かがあるか、それを想ふことをしなかつた。そして空には星があるかまたは月があるかを知らなかつた。自分の踏む地面が堅い地盤であるかどうかを想はなかつた。

凡てが朧ろに浮んでゐる、しつとりした重みで靜に浮んでゐる。凡てが自分自身に還つて、自分の胸のう

ちだけで柔かい呼吸をしてゐる。露はなものが身を沈めて、秘められたものが姿を示してゐる。(豊島與志雄)

至るところにすぐ眼の前に濃霧があつた。そして濕んだ軒燈のまはりには静に光りの輪が描かれて、耳に聞えない音を立てゝゐた。

人はもはや普通の空気を呼吸するやうな気がしなかつた。何かに魅せられた軽い水の中にも居るやうであつた。物の音はその主體を失つて、たゞ空中に漂ひながら消えていつた。凡てが夢のやうにぼんやり浮き出してはまた隠されてゆく。(豊島與志雄)

晝でも高山の霧は見なれぬものには、不思議である。それであるのにこの闇——この夕暮から一轉して目たく間に、人を殺すやうな、寂寞に歸する闇の

ものゝあるやうに思へたが、やはりそのまゝの姿で、最前からの話を續けて居た。するとたして例の霧があらはれた。

はまた破るゝさまがそれとさやかに指された。水聲に破られて霧が瀬と共に流れて下るさまは、めづらしい眺めを私に與へた。

私はじつと立ちつくした。

深く封じた霧は、山より吹おろす風につれて、時の間にまた破れて行つた。次第に、谷をめぐる峯の尖や、山の鬚や、また嶺の上に聳えた松や、黒い大きな山の肩などがあらはれ出して來た。霧は早く早く流れた。

中を、あらはれたり、消え去つたりする霧を見ると、丁度他界の靈魂が、闇に乗じて縦横に往來して居るやうに思はれる。(葉舟)

かうして居ると、霧が何方からともなく顯はれて來て、向ひ岸の林を包んだ。と見る間に、湧き出るやうに、湖の面に廣がつて、今まで見えて居た湖水を、渺茫とした大海のやうに見せた。濛々として白い霧の足は、次第に近づいて來る。湖心にある島が隠れると、兩岸の林も包まれてしまつた。——山も——さう思ふうちに、こゝに立つて居た私達も、いつか其白いものの中に巻きこまれて、月も見えず、星も見えず、すぐ傍のお光さんもわからなくなつた。(葉舟)

この闇に向つて居ると、二人は何か襲つて來る

香港を出た翌日の午後には、濃い霧が海上に集まつて來た。われゝの旅の着物は皆な酷く濡れた。甲板に置いてある藤椅子も、何もかも濡れた。しまひには、一面に水蒸氣の籠めた湖水のやうな波の上で、

餘儀なく一時停船するほどになつた。島は多し、おまけに潮流は急なところで、進んで行くには危険だともあつた。霧の晴れるのを待つ間、甲板の片隅では牛肉を餌にして釣を垂れる水夫などもあつた。(藤村)

それは月のない晩で、星のない晩で、空気が湿気で濃く見えるやうなあの霧の深い晩であつた。丁度百姓の言葉で「わせ」と呼ばれてゐる早熟の林檎が摘み採られる時分だったので、ほのかな林檎の香が畑の方から漂つて来た。セセルが家畜小屋の傍を通つて行くくと、肥料の上に眠つてゐた生きた動物の暖い臭ひが狭い窓から吐き出されてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

◇霞・霧・露

戸を開けて海に居るのかと思つた。家をめぐつて唯鉛色の朝霞、村々の森の梢が幽霊の様に空に浮いて居る。雨かと舌鼓をうつたら、霞の中からぼんやりと日輪が出て来た。見る／＼日の威力は加はつて、光は白く霞に咽ぶ。(蘆花)

今まで弱々しいながら、明るい光を輝かしてゐた日の影は、何處かへ隠れて、四邊には、見渡す限り、灰銀色の霧が濛々と立竪めてゐる。と見ると、その霧は幾塊にも、幾塊にも分れて、或ものは老杉の梢からは瀧のやうに、また或ものは外廊の屋根から湧きあがるやうに、もくもくと物凄く蠢めいて、いづれも言ひ合

せたやうに南へ南へと流れて行く。(長田幹彦)

細い草葉の数が、一枚々々讀めるやうに鮮かですつとりとした夜露の玉が麻裏草履にこぼれかゝり、二三步の間に素足はつや／＼と濡れて光つて来た。(谷崎潤一郎)

蜘蛛の網は、日光を反射する露でイルミネエトされて居た。薔薇の葉をこぼれた露は、轉びながら輝いて蜘蛛の網にかかると、手にはとる術もない瞬間的の寶玉の重みに、網は鷹揚にゆれた。露は絲を傳うて低い方へ走つて行く、ぎらりと光つて、下の草に落ちる。(佐藤春夫)

私はそのまま裾を捲つて露の溜つてゐるきらきらした雑草の穂の中へ降りて行つた。

微風が朝の香りを籠めて草の上を渡つて来た。草玉が青い實を静に揺つた。數列の葱が露に輝きながら劍のやうに垂直に立つてゐた。(横光利一)

空氣は僕を、まるで暖かく濕つぽい布みたいな肌ざはりで包んでゐた。庭の立樹の葉の繁みには、しつとりと置く露が、さらさらと音を立て、何やらひそひそ囁くのだった。(カイゼルリンク・中島清譯)

僕等は斜に森を分けて、矮い木の間を屈みながら行くと、頭や肩には露がぼたりぼたりと落ち、足は羊齒の葉に濕つぽく弾かれた。さうして行くのは又しみとした氣持で、それで氣分も又恢復した。(カイゼルリンク・中島清譯)

第五章 地象

山水

◇春・夏の山

丁度深い溪の眞上にあつたや、午下りの太陽はもう殆どきれいに雲の吹拂はれた大空から、輝かしい光線を投げて、黝んだ、疲れた緑に掩はれた山の肌を心地よげにぼか／＼と暖めてゐた。(白葉)

満山が寂として静まり返つて居るやうで、その中に立つて居ると、僕もこの自然の中の一つになつて

居る心がされる。その時後の方で鶯が鳴きました。すると、その聲が林から林へと反響して消えて行く——その静けさ、そのなつかしさ、僕は何事も考へる事が出来ませんでした。(葉舟)

私は夜ふけて、よくひとりて眼を覺してゐるやうなことが多かつた。雨戸をも引かない廊下の障子には、明るい月の光がさし込んで、慈悲心鳥がキ、キ、キと空を掠めて鳴いて通つた。ある夜は、曉近く凄じい山風が吹き起つて、樹といふ樹は軌り、枝といふ枝は撓ひ、葉といふ葉は鳴つて、いつもきこえる水聲さへも、全くそれに没却されて了つたことがあつた。日光の山の氣象の烈しさに私はその時初めて觸れたやうな気がした。(花袋)

淡青の色を全山に漂はせて、澄み切つた八月空の下に立つてゐる山の姿に對すると、如何にも、伸びやかな感じがする。頂上から劃して来る外輪の太い一線は長く／＼裾野へ引いて、其末は草原の中へ没してゐる。其線のなだらかさ、其色の薄青い心持のよさ、思はず手を伸べて、其山の肩へ、或は其の肌へ、觸つて見たいやうな気がして来る。(孤雁)

川に架つてる長い假橋を危く馬車に揺られながら、顧みると、日本アルプス山脈が雪を冠つて、遠く聳えてゐる此方に、黒姫、戸隠の山々、つゞいて越後境に妙高山の頂きが雲に入つて居るのを見た。其の山から吹いて来る風が、夏装ひをして来た私に冷やりと感じさせた。丁度、其の朝は雨霽りなので、水分を

帯びた風が餘計に冷やつかせた。それでも、青葉の色は山裾の林を染めて、明るい陽があたつてゐるが、澱んでゐて芽えない。(薫園)

丁度小雨が烟るやうに降つて居た。急勾配の無数の山が、小さな汽車の列を押し潰さうとでもするかのやうに、左右から窓に迫つて立つて居た。そのどの山と云はず、杉、榎、栗、……あらゆる種類の黒ずんだ緑の樹が、——雨に濡れてそれらの色は愈々濃くなつて居た。——頂きから裾まで鬱々として、恰かもプランに植ゑた毛のやうに密生して居た。その間を眞白に砕けて、磊々とした岩や石の隙間を縫つて高い音を立て乍ら流れ下る川に沿うて、列車は曲りくねりつゝ、遅々として溯つて行つた。漸く一つの山裾を折れて、

今度は少し広い所へ出るかと思ふと、そこには再び新しい山々が白い霧を巻いて突つ立ち、その先には天を摩すやうな高い山の姿が、雨に烟つて刷いたやうに薄く、而も巍々として聳え重なつて居るのだつた。

(藤森成吉)

◇秋・冬の山

野を罩め、町を罩め、山を罩めた一面の薄霧のなかに、銀閣寺畔の村々で落葉を焚く煙がほの／＼と薄紫にのぼりそめる朝まだき、近江がよひの荷馬の後について、道芝に置く露を踏み分けながら、白川口から登山した私は、漸次と日が高くなるに従つて琵琶の湖面を雙眸におさめる尾根を越え、老杉森々と

した無動寺の谷も過ぎて、十時少し過ぎる頃には、黄褐色にうらがれた四明嶽を左手に仰ぎながら、胸を突くやうな急坂を、根本堂の方へ向つて、息せき登りつけてゐた。(長田幹彦)

凸出して居る所は凸出し、凹んで居る所は其まま凹んで、降つた雪は山の巒通りに巒を描いた。しんしんと一晩中雪の降り積つた翌朝によく見るやうな、幾ら見あげても見あげても、唯玲瓏として青く限りなく空の澄み徹つて居るやうな朝には、血の燃えたやうな太陽の光を真正面に受けて、それらの巒の隆起して居る部分は、皆一様にキラ／＼と銀のやうに輝いた。凹んだ蔭になつて居る部分は、それに引き換へて悉く柔かい鼠色に滲んで、恰かも、白く光つて居る部分を

空中へ浮き立たせようと努めてゝも居るかのやうに見えた。(藤森成吉)

北海道の冬は空まで逼つてゐた。蝦夷富士と云はれるマツカリヌプリの麓に續く膽振の大草原を、日本海から内浦灣に吹きぬける西風が、打寄せる紆濤のやうに、跡から跡から吹き拂つていつた。寒い風だ。見上げると、八合目まで雪になつたマツカリヌプリは少し頭を前にこよめて、風に齒向ひながら黙つたまゝ突立つてゐた。(有島武郎)

街道を挟む兩方の山には、如何にも荒涼たる山の冬が充ちてゐる。幾里にも並んだ山の波は、どれもこれも、裾から頂まで無残に落葉し盡した雑木林で覆はれてゐる。その赤裸になつた雑木の頭が、山頂の

澄み切つた空の緑にくつきりと浮いて見える。(江口漁)

黄昏は次第に重く胸を壓すやうに迫つて来る。その時、田の水は澄んで、灰色空を胸にうつし、その空の中に、一列に並ぶ山の峰をかすかに浮ばせてゐる。この時の山の姿の淋しさ。漠々たる灰色の無限の空を蔽うて、其中に頂を見せてゐる一帯の山、空際、見えるものとは此の淋しい山の頂だけ、其外はたよりない雲の姿ばかり、寂しい中にも一種言ひ難い懐しさが籠つてゐる。(孤雁)

足もとから、雪のためにフツクラと滑らかにされてゐるほどよい勾配の斷崖が、何千丈とも知れぬ谿間へと走つてゐる。白い泡を嚙んで、山水がその底を

落ちて行く。が、耳をすましても微かな音さへ聞き分けられないほどに遙かの下だ。彼方の連山が、その谿間に鼻を突込んでゐる。鉈を並べたやうな杉が、山の足から中腹までスクスクと立ち並んでゐる。(里見淳)

日はもう山の頂の向うに沈んで、其の頂はまだ空からの反射で紫色をしてゐたが、谷の深いあたりは次第に灰色になつて来た。と彼は不意に恐ろしくなつた。沈黙、寒氣、寂寥、山々の冬の死といふやうなものが彼に取り憑いて、血の循環を止めて凍らし、四肢を硬ばらし、氷結して動かぬ物と化せしめて了ふやうに思はれたので、急いで住居の方へ走り出した。

(モウパッサン・前田晁譯)

◇丘

丘はどこか女の脇腹の感じに似て居た。のんびりとした感情をもつてうねつて居る優雅な、思ひ思ひな方向へ走つて居る無数の曲線の集合から出来上つた一つの立體形であつた。(佐藤春夫)

その丘は、わけても、彼の庭の樹々の枝葉が形作つたあの穹窿形の額縁をとほして見るときに、自づと一つの別天地のやうな趣があつた。丁度いい位に程遠くで、さうして現實よりは夢幻的で、夢幻よりは現實的で、また雨の濃淡によつて、或る時にはやや近く、或る時にはやや遠くに感じられた。或る時にはすりガラスを透して見るやうにほのかであつた。(佐藤春夫)



眼鏡をかけて見ると、天地は全く別個のものに見え出した。今日は、天地の間に何かよるこびのやうなものを見ることが出来た。空が明るいからである。丘がはつきりと見えた。成程、丘はいつもとは違つて見える——丘の雑木林の上には鳥が群れて居た。うすれ日を上から浴びて、丘の横腹は、その凹凸が研ぎ出されたやうな丸味を見せて、滑らかに緑金に光つて居た。苗木の畑である數百本の立竝——成程、違つて居るのは其處だ。その立竝の竝と竝との間の地面の緑色が、どういふわけか、黒い紫色に變つて居るのである。はて！何時の間にこんな變つたのであらう？何のために變つたのであらう？彼は實に不思議でならない氣持がした。彼は世にも珍らしい大事が突發し

たかのやうに、しばらくその丘の上を凝視した。その丘は、彼には或るフェアリー・ランドのやうに思はれた。美しく、小さく、さうして今日はその上にも、不可思議をさへ持つて居る。(佐藤春夫)

◇河川

田圃なかの長い田川の土堤を、母に負はれて私はどこかへ行くところである。田川には青い異人芹が一面に生ひ繁つて、ゆらゆらと揺れてゐる。うすく霞つた春あさい日の光にそそられて、水はちろちろと音をたててながれてゐる。

私は母の背にそのちろちろといふ水の音をきいてゐると、脇の下にしるい細い冷たい指さきが觸れるやう

に感じられるのである。私はそのちろちろと脇の下をくすぐる水音をちつと我慢してきいてゐたが、とうとう泳へきれずに笑ひ出してしまふ。(夕暮)

宿の裏手から、一面に茅や薄の生えた野中の往來に出たところに、Mといふ畫家の新しい別荘が、低い青芝の築地をめぐらしてゐたが、その前を右手に町の本通りの方へ少し行くと、一條の細流が道を横ぎつて流れてゐた。ほんの一またぎにも足りない小さなせせらぎではあるが、丁度その眞上に高く雲中に聳えてゐるM山の雪解の水を思はせる清冽な水が、常に泉の滾々と湧くやうに、ちろ／＼と音を立てながら一直線に急な傾斜をなして溢れ流れてゐるのであつた。

(加能作次郎)

私は旅をする度に、分水嶺といふものに常に多くの興味を感じる。沿つて来た川が段々細く細くなつて、つひには草の中にもかくれて埋れてしまふやうに思はれる。もうなくなつたかと思ふと、まだ何處かで音がしてゐる。さゝやかな音がしてゐる。まだ流れてゐるなと思つて、段々峠に登つて行くと、遂には音が聞えなくなる。長い間一緒にやつて来た川だ。こんなことを考へると、私は何となくさびしい氣がして、暫し立つて、来た方を振り返つて見る。

けたり、畑が見えたり、村が見えたりする。綺麗な瀬が開いて見えてゐたりする。(花袋)

深い箒川の溪谷を遙かに左右に瞰下しながら、一人は上衣を脱ぎ、二人は襦袢一つの肌脱ぎになつて、坦々たる岨道を、靴に、日和下駄に、疊付きの下駄に踏み亂して躡つて行つた。道を除く外は満目すべてこれ鬱蒼たる緑樹で、たゞ箒川の清流が、巖に激して雪白の泡沫となつて碎け散るのが、ふと木隠れの音の一段高く聞える時に、遙かの下に明らかに目に入つて来るばかりであつた。(前田晁)

山と山の奥山にまだ雪が残つてゐて、霞のなかに、牙や齒のやうに鋭く光つてゐる。その下からこの市街へながれる急流が老いて川床が高まり、あえぎあ

えぎ蒼い肌をさらしてゐる。河原は高まる一方である。流れは川床の間をくねりながら苦しうに見えた。耳を澄して聞いてゐると、瀬の音にはえも言はれぬ疲労があつた。(犀星)

やがて水を撃つ棹の音がした。舟底は砂の上を滑り始めた。今は二挺船で漕ぎ離れたのである。……河の面に映る光線の反射は割合に窓の外を明くして、降りそゞぐ雲の眺めをおもしろく見せる。舷に觸れて呟くやうに動揺する波の音、此方で思つたやうに聞える船のひびき——あゝ静かな水の上だ。荒涼として岸の楊柳も處々、時としては其冬木の姿を影の様に見て進み、時としては其枯々な枝の下を潜るやうにして通り抜けた。(藤村)

その橋の下を低く、割合に細い一筋の瀬となつて走つて流れてゐる。しろくくと、河原の小石は白く乾いて、遠く何處までも續いてゐる川の瀬は川の上の方は細く白く、ぼつと消えて了つてゐる。廣い河原の兩岸は柳原で、柔かな緑は、たゞ一つの色となつて融け合つてゐる。(空穂)

暗い河原には黒い水が瀬をなして流れて、何處かで微かに咽ぶやうな瀬音が聞えてゐる。彼岸は同じく河沿に黒い家並がみえて、咽つたやうなこんもりした柳の樹蔭には冷たく濕んだ軒燈が一つ二つ躰いて、時々上からも下からも小さな提灯が靜かに歩いて來る。(長田幹彦)

其處には幅の狭い、岸の低い、水一杯にふく

れ上つてゐる川が細かく建て込んでゐる兩岸の家々の軒と軒とを押し分けるやうにどんよりと物憂く流れて居た。小さな渡し舟は川幅よりも長さうな荷足りや傳馬が、幾艘も縦に列んでゐる間を縫ひながら、二た竿三竿ばかりもちろくと水底を衝いて往復して居た。(谷崎潤一郎)

私の宿は夜でも欄干の雨戸を締めないで、加茂川の水音は始終雨の様に聞える。此の邊の積の朝霧の景は格別であると人に教へられながら、寢坊の私はいまだに一度も見たことがない。いつも東向きの縁側から、ぢりぢり射し込む日光に攻め立てられつゝ、午近くまでうとうと眠つて居る。蒲團の中で眼を覺ますと額越しに障子の中硝子を通して、青い青い空が眺めら

れる。枕から一尺ばかり頭を擡げれば、東山の頂が硝子の中に現はれて來るのだが、それさへ億劫な氣がして、ぢつと仰向けに臥て居る。すると川面から反射する光線が、天井、襖、障子の嫌ひなく黄金の鱗を描いて波紋を作り、さながら活動寫眞を見るやうに、加茂の流れが部屋の四壁へ、漣を立て、流れて行く。降雨のあつた翌朝などは、天井に映る水面を視詰めて「今日は大分水嵩が増して居るな」と思ひながら相變らさうとくと眠る。(谷崎潤一郎)

て居る小鳥がバツと飛び出して、また其中に隠れてしまふ。河の水は廣くたゞえて、音もせず、丁度夏を押し流して行くやうに流れて居る。(葉舟)

馭者の振り上げる鞭の先きの空は、破れてうす青い色が微笑んでゐた。彼方の地平線には、國境の山が起伏してゐた。渡り鳥の影がしばしば黒く竿のやうになつて、その頂きを越えて、あちらに消えて行つた。坦々とした河面は、折々、細かな網目の如き、無数の縞を織つて閃めいたかと思ふと、また、無地の青色によんだ。(未明)

河口から續いた大海の上、淡青の空は爽かな白っぽい夕の色を漂はせて、信天翁の飛んでゐる沖の方から、白帆が行列になつて河へ這入つて來る。河の水

は流れるでもない。海岸まで兩岸に沿つて青い蘆が叢生してゐる。その青い蘆の葉は光を反射して青玉のやうに輝く。爽かさは一層増して来る。(孤雁)

水はちやうど宇治川のやうな、しかしあれよりも静かに淀んで、川上の山の重なり方も、あれほど迫つてはゐない。まして少し出て行けば、直ぐそこは廣い日本海へそぐところなので、眺めは極めて漂渺としてゐる。水はまるで静水のやうで、ところどころ磨き立てた硝子面のやうに平靜なところもあれば細かい縮緬皺の寄つたところもある。(秋聲)

ある日の午後、私は川のほとりに立つてゐた。何とも言はれない静けさが私の前にあつた。それは其日が静かであつたためか、またはその午後が静かであつたためか、それともまたその川の流れるさま、その兩岸を埋めた淡竹の藪のさまが、さうした静けさをあらたに漂はせたのか、兎に角それは何とも言はれない静けさであつた。瀬をなして流れてゐる水さへも、今日は音をとどめたかと思はれるばかりであつた。私はじつと立盡した。周囲をめぐつて聳えてゐる山もすべて皆私に無限の親しさを寄せてゐるやうな気がした。(花袋)

あつたためか、それともまたその川の流れるさま、その兩岸を埋めた淡竹の藪のさまが、さうした静けさをあらたに漂はせたのか、兎に角それは何とも言はれない静けさであつた。瀬をなして流れてゐる水さへも、今日は音をとどめたかと思はれるばかりであつた。私はじつと立盡した。周囲をめぐつて聳えてゐる山もすべて皆私に無限の親しさを寄せてゐるやうな気がした。(花袋)

その狭い堀割——大きな湖と大きな入海とを連絡してゐるその堀割が私には面白かつた。堀割には水が満ち漲つて、汽船の波が立つ度に、岸に生えてゐる萱や、眞菰や、蘆荻の新芽がゆらくと動いた。岸の向うは田で、ところによつては、げんげが赤く咲いてゐたり、馬ごやしが緑に繁つてゐたりしたが、蛙が好い聲で、いかにも春が楽しいといふやうにして鳴いてゐるのがきこえた。(花袋)

それは橋の方へ直接に降りて行く道で、その橋の下には溜りの水が水車の方に向つて流れ、うつろな泡立つ響を立て、動いて居る。彼は橋を渡り、溜りの岸を縫つて行つた。溜りの上には暗い水あかりのなかに岸の樹々が漆のやうな影を投げ、全く暗澹として居

るが、まんなか邊は、流石の樹の蔭もとどかず、鏡か鋼鉄かのやうにはつきりと星の輝きを映して居る。(レイモント・朝鳥譯)

兩岸にセメントで造つたラツパのやうな型の穀類船積機と貨車との並んでゐる間を通つて私たちは北風にかきみだされてゐる大河を下り始めた。なほ暫くの間、緑色の圓屋頂、窓硝子の破れた宮殿の正面、それ等の建物の前に立つて檢閲してゐるやうな騎兵の銅像、維納は二つの瓦斯タンクの間で、失業者の群に取りかこまれて不幸な未亡人のやうにさびしげに私たちに禮をしてゐた。軍器だの、何だかわけのわからぬ古鐵だの、鐵條網だの、車輪だの、金鍔だのを沈みはせぬかと思はれる程に一ぱいに積んで行く舢舨に行き

逢つた、戦争が済んでしまつた後でもかうして一大帝國が一塊づつ降服することを續けてゐるのである。やがてダニユウプ河が擴がつて、どの大河とでも似た河になつた、空より外のもの皆拒絶して、自分と平野の間に柳の木をはさんで、時にまた遠くに見える、搗く小麦がないので動かすにゐる、水車小屋に暫時の支點を取つて、橋から逃げるやうにして……。

(モオラン・堀口大學譯)

果樹園は丘の上から始まつて、なだらかに傾斜をしながら、河岸の方へ下つてゐた。其處には柵が繞らしてあつて、丸く刈り込んだやうな柳が、行儀よく並んでゐる。その枝の繁みを通して、錦織の袈裟のやうな水面がぱつと燃えて、その頂きには輝かしい一條

の帯が横たはつてゐた。それは川かも知れないし、空かも知れないし、またたゞの空氣かも知れない——何かしら透明な、眼眩めくやうなものであつた。

(フエーデン・米川正夫譯)

果して、夕景近くヴォルガが現れた。幅二露里ばかりもありさうな大きな河だ。砂洲がまるで黄色い帯のやうに、岸に沿つて横たはつてゐる。その間に、夕日を受けて赤味がかつた水が、きらきらと光つてゐた。河の彼方、遠く五露里ばかり隔てた白い山のほとりに、細かい埃が夕雲のやうに立ち罩めた間から、教會が見える——一つ、二つ、三つ……澤山ある。

(ヤーコヴレフ・米川正夫譯)

湖

洋々とした北浦の水は、既に汽船の周圍にあつた。湖の西に繞つた丘陵は、その上數尺のところにも今しも赤い夕日をたゆたはせて、そこに靡いた松や、林や、または村落を黒く見せたばかりではなく、その光りは閃々として、水面に美しく輝きわたるのを私達は見た。霞ヶ浦のやうには濁くなかつたけれども、利根の河口にも劣らぬほどの濁さを持つたこの湖水は、さながら大河を下つて行くやうな感じを人々に與へた。夕日の明るい光線の中に一つく浮んであらはれて来る帆の影は、黒く黒くなつて見えた。(花袋)

船を中心として遠く揺らめきながら擴がつて行つた。一と片の雲もない空からは、眞夏の光線が眞直に注ぎ下して来て、帽子で遮つてゐるだけの頭の上に浴衣がけの肩へ痛みを感じる迄に照らして居た。私たちは眼を擧げることが出来なかつた。青い湖面からは涼しい氣が起つて来たが、それはきらきらする光線の反射の中に吸ひ取られて行つてしまつた。(空穂)

湖に向ふ者の心の静けさ。自分が何處をどう歩いて来たかも知れず、突然その岸へ連れて來られたものやうな氣がする。波の静けさ、伸びやかさが心を静めてくれる。波は柔かい手で撫でよくれるやうな氣がする。びつしや、びつしや岸へ忍び寄るその音が楽しい囁きとなつて、耳から胸へ、胸から身體全體へ

軽く行き互る。(孤雁)

湖面は夕日を受けてギラ／＼輝き渡る。西の空にはもく／＼と白い雲が湧いて、それが遠くなるにつれて次第にうす黒く、最も遠い雲の上を壓して眞黒な層雲が厚く長く敷いてゐる。日はその白い雲の頂から、また黒い雲の間から、光線を放射して湖面は青光を照り返してゐる。正北面に當つて湖の對岸は低く山を見せ、その上に遠く遠く藍青の高峰が微かに浮ぶ。此濃藍の遠い峰くらゐ、かゝる景色に尊さと懐しさを加へるものはない。一體が明るい景色だ。(孤雁)

湖は今鏡のやうに澄んで、午後の鮮かな日影が其の半面を照して居た。空氣の加減か、それとも水の深淺の加減か、濃い碧と深い藍とがくつきりと線を漂つてゐる。(ロープシン・青野季吉譯)

沼

私達の前には、さびしい錆色をした大きな沼があらはれ出して來た。それは成ほどこれが印幡沼かと思はれるやうな古い古い沼であつた。向うの岸の低い丘には、松の林や杉の杜が一面に連りわたつて、それからすつと蘆荻が風に吹きなびかされてゐるが、その錆びた色をした水の上に、曇つた空のどんよりと映つてゐるさまは、何とも言はれない佗しさとさびしさを

引くやうに限られてあつて、白堊や赤い煉瓦を點綴した對岸は、丁度明るい水彩畫のやうな色彩を見せた。

(花袋)

湖水は鬱蒼とした森に見え隠れに、數哩に亘つて點在して居た。一番大きい湖に向つて、なだらかに傾いて居る丘は、一面に青草に蔽はれて、水上の翠色を更に深からしめて居る。滑らかな湖上には、汀にも漣一つ立たない。それは恰度、巨大な聖盤に浮ぶ輝かしい鏡を想像させて、空がその底に落ち、木々の葉がその透き互る胸に眺め入つて居るやうであつた。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

ヴェルサイユでは、公園にゐると、高臺から湖が望まれる。湖の縁は、綺麗な小さな森と優雅な花床

私の心に誘つた。とても私は霞ヶ浦あたりのあの明るい色彩をそこに發見することは出来なかつた。(花袋)

いかにもあたりはしんとしてゐた。半ば曇つた空の鈍色をした雲が、錆びた沼を一面に蓋をしてゐるやうに思はれた。一鳥も飛ばず、一波も颯らざるさまが、何とも言はれない寥廓とした心持を私に誘つた。

私はかうして舟に坐つて、沼の唯中に泛んでゐるといふさまを、數千年も前の時代に置いて見るやうな心持がした。(花袋)

秋十月か十一月頃、此沼の岸へ來て立つて見たまへ。沼を取り圍む満山の樹木盡く霜に染つて、白樺の葉は黄に、橡の葉は朱紅に、櫻楓は紅になつて最も早く散り、檜櫟が樺色となつて、幾團の彩雲は盡く

落ちて沼に寫り、朝日夕日が峯に滑つて、林中より沼の面を照らし出す時、其美しさと云つたらぬ。……夕風が陣々として峯を亘つて來ると、木の葉は盡く飛躍して沼の面に降りかゝる。沼は波立つて浮べる木の葉を呑み込まうとするやうに白い齒を出して騒ぎ立てる。山谷動揺して、怪しい鳥の聲、猿の叫び聲なども交つて聞える。一夜又一夜、嵐が荒んで、林中薄くなり、沼の面は隙間もなく木の葉が浮いて、沼尻の方へ吹き寄せられて、溪流となつて里へ落ちて行くのである。(孤雁)

海洋

春・夏の海

肘が其の長いリボンのやうな葉に觸れると、さらさらといふ軽い音が後に起つた。すると、わたしは、この沼が惹き起した力強い不思議な感情の爲めに、かつて覚えなかつた気分になつた。(モウパッサン・前田晁譯)

ろがねの細鱗を疊んで濃やかに動いて居る。春の日は限りなき天が下を照らして、天が下が限りなき水を湛へたる間には、白き帆が小指の爪程に見えるのである。(漱石)

ガタ馬車が東伊豆の海岸に添うて、高い崖の上を走つた頃には、雨はもう綺麗に上つて、只時々、團雲とも言ふべき雲が、正午近い日の面をかすめて、大きな影を峰から道へ、道から海上へと流して行くに過ぎなかつた。高みから見る雨後の海は、凄い程の紺碧を湛へてゐた。(白葉)

一天麗かに晴れて、海は紺青を流すやうな平らかな風である。白砂の上に並び立つ青松の根もとを洗ふ波の音もゆるくのどやかである。白い砂は何處までも

續いて、青い松も、それに伴つて連つてゐる。(蕪園) 今が丁度夕風の時刻で、密りと鎮まり返つた濱邊は、唯波の音のみ忍びやかに刻み寄せて居る。晝の光を吸込んだ砂地の熱は涼しい夕の天と溶け合つて、オゾンに富んだ海の香が濕とり漂つた。(風葉)

船は亞利比亞の海へ入つて行つた。そこには油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は幾趣幾様かの渦と、皺と、紋とを描いて見せた。白い雲の影は海に映るほどの日で、その静かさは熱帯らしい静かさであつた。どうかすると海は蛇の肌と滑かさとも見せた。私はまた波の間に群れ飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた。未だ曾て望んだこともないやうな夕日に燃える火の海をも見て行つた。(藤村)

海の色は麗かさ、それは何とも云へぬ澄み互つた瑠璃色だ。濃厚で豊麗で光輝に満ちてゐる。裸の子供どもが二三人泳いでゐたが、その肉體が鮮かな紅色になつて見える。(白秋)

見渡す限り行く船の影もない。右手に續く海岸の岬の一番向ふ方が、空と水とに紛れて薄すらしてゐるあたりに、大きな羊のやうな暑さうな雲の峰が立つてゐる。近い彼方の港に並んだ帆柱が、陽炎のやうな日光にほろほろと揺れて見える。(鈴木三重吉)

海の面は是よりは青くはならないほどに澄みかすんだ。そして夕方に近付いた空に白雲の塊が赤裸で相争ふ男達の姿のやうに相重つた。近くの山には一日中に最も暑い斜日が照りつけて、緑の色は金鍍金され

てきら／＼と輝いた。(木下李太郎)

一體に波は極めて穏かである。幽かに幽かに、岸を音づれて咽んでゐるやうに思はれる。海と云ふよりも湖水のやうな感じがする。海とすれば、平和な海、少女の戀心を表象するやうな海だと云ひたい。夏の太陽が鮮かに其の姿をばつと現はして、四方を照らすと、海の色は一段藍青の色を濃かにして、黄金の細波の上に浮ぶ白帆が、更に鮮かさを加へる。其の白帆は、殆んど動かないやうだが、ちつと注視してゐると、少しづつ動いてゐる。(梅溪)

私達はもう一度波の上を滑つて外海へ向ふ。岸は消え、私達の周囲は全く暗くなる。有らゆるものから遠ざかつて、空漠たる夜の中へ、海の深い沈黙の中

へ、突き入つて行くことは實際一種の感じのするものである。心を傷める幽妙は情緒を味はせるものである。此の世を去つてでも行くやうな思ひのするものである。如何なる國にも達しないやうな、最早如何なる岸邊も、如何なる日影もないやうな思ひがする。私の足許には一つの小さな燈火が、私の進路を示す羅針盤の上に光を投げて居る。(モウパッサン・孤雁譯)

散亂した小石や、瘦せた小草の密生した平地には、夕やけ空の蓄薇色した反映が横たはつて、海は歡ばしげな微笑に輝き、鹽しめりと沃度との香が漂つて、静かな、撫でるやうな浪の音の中に、若々しい聲の和したのが高く華やかに擴がつた。(チリコフ・白葉譯)

海は、空と同じやうに、星とくらげとでキラキ

ラ光り、砂濱へ打寄せては、重々しく呼吸してゐた。そこでマルシヤは雄大な美と詩的な力とに懣惑され壓迫されて、涯しなき海原の怖いやうな暗碧な深淵へ、自分を擱んで引込まうとしてゐるやうに思はれる浪の一寄せ毎に、顛へ上つては後退りした。

「私何だか、此方の海は怖いやうですわ!」とマルシヤは自分を笑つてゐる同行者達の背後へ退きながら呟いた。

夜通しマルシヤは睡らなかつた。物すごい海は間断なく夜の沈黙の中に呼吸してゐて、彼女には絶えず今にも大きな浪が寢臺の邊迄押寄せ来て、自分を擱んで海中の深淵へ引込んで行くやうに思はれた。胸は騒がしく、歡しかつた——たうとう彼女の空想は實現さ

れた——彼女は海を見た！（チリコフ・白葉譯）

◇秋・冬の海

❖ 暗い海面の上に、通り矢の小島がまだその上にも黒く、その黒い島の上には、同じく黒い松の木が一本くつきりと見えて、よく観ると、それが秋の夜風に揺れてゐました。さうした時にきつと細い二十日ばかりの月がその隙間から覗いてゐます。濕やかな雨を含んだ小さな雲も薄青い金色に光つて消えてゆきます。而して、その下から幅の細い金いろの線がきら／＼と海面に脚を引いてゐるのです。その金色の波の上を小舟はその水脈を揺れ立たしながら沖の方へと漕ぎつめて行くのでした。（白秋）

❖ 秋は、日本海にもはいつたらしい。海の上の景色が穏かでないかつた。ちぎれた灰色の雲が、魔鳥のやうに、翼が波頭を掠めてゐる。つい、昨日までは、うす緑色をたゞへて、そのあちらに、未知の國があるやうな憧がれを感じしめた。（未明）

❖ 彼の足は波の音のする方へ向つた。橋の畔から竹籤の様な處を通り抜けて、小高い砂山のある處へ出ると、一筋の細道が枯草の中に在つた。所謂濱道だ。夫を辿つて海の方へ行く前に、彼は先づ四邊を眺め廻した。右に墓地がある。花などを供へた新しい墳墓がある。死人に手向けた水もある。彼はその茶碗を取つて渴いた咽喉を潤した。夫から古い石塔の倒れたのを見つけてその上に腰を掛けて考へた。萬事休す！ 斯う

思つて起ち上つた頃は、最早海も暮れかゝつて來た。蒼茫として彼の眼前に展けた光景は永遠偉大な自然の繪畫でもなければ、深祕な力の籠つた音楽でも無い。海はたゞ彼の墳墓である——冷い、無意義な墳墓である。不幸な旅人は、今自分で自分の希望、自分の戀、自分の小さい生命を葬らうとして、其の墳墓の方へ歩いて行くのである。到頭彼はその墳墓の前に面と向つて立つた。暗い波は可怖しい勢で彼の方へ押寄せて來た。（藤村）

❖ それは雨の降る暗い夜だつた。今は港の有様はどうなつて居るか知らぬが、その時分は、岸近く汽船が入れなかつたと見えてかなりの沖合に錨を下した。雲のやうな冷たい雨が、横なぐりに降りしぶいて居り、

眞黒な海は、さば／＼と腹立たしげに落着なく騒ぎ立つて、空も海も一樣に黒く暗澹として居た。そしてその暗中のさわめきの中に、水夫等の罵る様な聲や、數多の乗客の互に呼び合ひ、叫び合ひ、警め合ひ、咳き合ふ聲や、雑多な物音などが打ち雜つて、一體に凄愴な氣が漲つて居た。雨と、波の飛沫とに、すべての物が濡れて冷たく痛々しく、暗い夜空に、人魂のやうにぼつ／＼と浮んだ檣頭の赤い灯も、かゝる夜の氣分にふさはしく、一入物凄さを増すものゝ如くであつた。（加能作次郎）

❖ 海の上は唯狂ひ暴れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹きまく風が、思ひのまゝに海をひつぱたくのでつるし上げられるやうに高まつた三角波が、互に競つ

て取組み合ふと、取組み合つただけの波は忽ち眞白な泡の山に變じて、その巔が風にちぎられたから、すさまじい勢ひで、目あてもなく倒れかゝる。(有島武郎)

あすこが羽田邊かしら、そんなことを彼女は心の中で思つた。足許の石垣の裾には、波がさみしく打ちあてゝゐた。鈍色の、果もなくひらけた静かな海は、とろつと眠つてゐるやうで、その沖をいくつかの船が通つてゐた。風が冷たく吹いた。(細田源吉)

海は鉛色の、動かぬ敷布のやうに、四方に敷かれて、そして狭く小さく見える。濃い霧がその上に覆ひかゝつて、帆柱の頂上を雲の中に隠し、そして其の柔かな、朦朧したもので眼を眩まし、疲れしめる。太陽が此のほうとした中に、曇つた鈍い赤色をして懸

つて居るが、夕方前には、それは異常な、不思議な、物凄しい光りに輝いて居た。丁度何か重い絹の織物のやうな長い眞直な褶が、船首から海の上を順々に過ぎ、過ぎるに従つてそれが廣げられる。そして皺みつゝ、濁くなりつゝ、一搖れしては再び滑かになつて消えて行く。單調な音を立て、廻る旋轉器に攪亂されて、牛乳のやうな白い泡沫が飛ぶ。そして幽かな響をなして、碎けて蛇のやうな逆流を造り再び溶け合つては又霧に吞まれて消えて行く。(ツルゲエネフ・草野紫二譯)

海は懶げに歌つて、静かに岸に匍ひ寄り、それを侵してゐた。雷があつた。邊際はすつかり白い霧に塗りつぶされてゐた。波は空に溶け、岸は水に溶け合つてゐた。じめじめした水氣を含んだ霧が私を包んで

ゐた。私は鹽氣のある濕りを吸つてゐた。私は水の騒音を聞いた。一つの星も、一條の光もなかつた。透き徹るやうな闇黒が私を取巻いてゐた。

(ロープシン・青野季吉譯)

◇海 岸

村から岬の鼻の手前を向うに越えて出てゆくと其處にも廣い美しい磯と海とが開けた。この海は大洋である。熱帯地方まで通じてゐる海である。安乗、大王、その向うは渺漫として際涯を知らない海である。従つてこの磯にはいろいろなものが流れ寄つた。難破船の板の一部のやうなもの、パケツのやうなもの、何年かを海に漂つた太い綱のやうなもの、熱帯地方を思

海 岸

はせる椰子の實のやうなもの、さういふものが無限に流れ寄つて來た。この磯からは、夜は安乗の燈臺の廻轉する灯の光が螢か何かのやうに明滅して指さされ

た。(花袋)

燈臺から下りる路は、丘の腹の處を縫つて行つた。伯耆の大山の頂に白い雲が懸つて晴れ、晴れては懸つた。朝日が正面からさして、波頭は光り、路傍の草や萱に置いた露は美しく煌々した。丘と丘との間には、浅い小さい谷が幾箇所もあつて、其處に綺麗な水が淙々と流れてゐた。燈臺に勤める人の家らしい小綺麗な家屋が深い樹木の中に見えて、垣の木槿が紅く白く咲いてゐたりした。(花袋)

月は頭の眞上と云つてもよい位の空に高く澄ん

で、干潟の所々に行潦のやうに残つてゐる水の面に、きらきらと銀砂のやうに散つてゐた。

静かな晩で、眞冬でありながらさう寒くもなかつた。私は磯臭い月下を、俗にあをさと唱へてゐる青海苔の芝草のやうに生えてゐる干潟を無心に歩いて行つた。破れた茶碗や、罐詰の空や、時には古下駄の半ば砂に埋つたのなどが、下駄の齒に觸れた。(前田晁)

到るところ、果てしない海岸に沿うて、水打際
にちかい町々や、山腹の高處に巢くつてゐる村落や、
樹木のこもり茂つてゐるなかに點在してゐる別荘
や、すべて此等は、夜の間に遙か高い雪國から舞つて來
た巨きな鳥が、砂の上に、或は岩の上に、あるひは松
林の上に、産み付けて行つた白い卵のやうに見えてゐ

る。(モウパッサン・孤雁譯)

海面は水が光つて來て、錨の上に揺れてゐた大
端舟のマスツが鋭く巻かれた螺線状をなして其の上に
映り初めた。遠くの方から汽車の汽笛と軍樂の響とが
聞えて來た。太陽は沈んだ。漁夫達は岸邊で夕餉の支
度を初めた。その焚火の炎の舌は、暗紫色な、殆んど
黒い位の傾斜の地に、益々明るく際立つて見えた。
(ラザレーフスキイ・白葉譯)

港

滴るやうな鮮緑に包まれた港の入口が、島々の
眺望が、早や私の眼にある。私は二度も赤道を越え亞
弗利加を遠廻りして漸く海上の本街道へ出て行つたや

うな氣がした。往きの船旅で見に行つた波止場の岸！
赤黒い倉庫の建物の光景なぞがもう一度私の前に展
て來た。熱田丸へ漕ぎ寄せる土人の軽いカノオは、あ
だかも私の方へ歸つて來る三年前の記憶そのままであ
つた。(藤村)

夕立を帯びて風の涼しい水蒸氣の多い空氣の中
に、香港の港が次第に近く見えて來た。私の周圍には
立つて港を望む人ばかりであつた。例の泣き易い女の
兒もその時は着物を着更へさせて貰ひ、赤いリボンな
ぞを髪にかけて、おとなしく母親につれられて居た。
静かに水道を動いて行つた船が港に入つた頃は、早や
陸上に燈火を望んだ。港はまだ暮れきらない頃だつ
た。支那風の帆檣が群立する間から夕方の煙の立ち登

るのを眺め見たばかりでも、身は既に東洋にあること
を感じた。(藤村)

とつぷり日が暮れた。何となく磯臭いにほひが
紛と鼻の先へ來た。私は暗い知らない外國の町を歩き
ながら、そのにほひを嗅いで見た。何處からそんな海
草の乾くにほひが傳はつて來るのか、さうした暗夜の
空では港町らしい何物をも見ることは叶はなかつた。
しかし海に近く來たことだけは感じられた。(藤村)
そこにある港の聲は土の色に濁つた冷たい感じ
のする水を渡つて聞えて來て居た。何程のごちやごち
やとした遠い近い物音がそこにあつたと言ふことも出
來なかつた。動揺する波のつぶやき、櫓の音、汽笛な
ぞに混つて、時々鐵板でも投出すやうな、騒がしく高

い音が河口の空に響き渡つた。そればかりでは無い、新嘉堡から香港へ、香港から上海へと歸つて来るにつれ、私の耳の底にある聲が次第に判然と聞えて来るやうな氣がした。私は聞きたいと思ふ故國の聲が自分の耳の底にあるのか、それとも早やこの港にあるのか、いづれとも言ふことの出来ないやうな氣もした。

(藤村)

朝靄の籠めた山の裾から傾斜に添ふて町のある地勢が、何となく荒涼とした感じを與へる。港内には、閑散らしく碇泊する一隻の英吉利の軍艦を見るのみで、商船の數とても少なかつたが、でも煙の混つた空氣を通して煤けた煙筒と帆檣と、帆綱と、その間を飛ぶ鷗の群なぞを見るのは港らしかつた。(藤村)

高い煙突や停車場と思ふ邊からもうくと吐き出される煙は銀色に薄れた大氣の中に定かならぬ縋を描きながら凍てついたやうに漂つて、鐵板を打つ音や汽笛の響などが雜然としたどよみを作つては幽かに水を渡つてくる。蒼ざめた海の面には海の鳥が四五羽づつ群をなして高く低く飛びちがつてゐた。(長田幹彦)

黄昏になつた。灰銀色に光る海から夕靄が息吐きながら湧き上つて、沖に繫つた船影や、長い棧橋や、税關の巍然とした建物を朦朧とたて罩める。その様がるで灰色の眠りにでも囚はれてゆくやうだ。處處に黄褐色にくすんだ燈が點る。ランチが青い舷燈を人魂のやうに長く曳いて岸の近くを駈る。沈みきつた大氣の底に、かすかに海の嘆息が聞える。(長田幹彦)



下つて行く海岸の路は、次第に前に内海港を見るやうになつた。しかし、有名な港としては、大阪から宮崎へ行く唯一の交通路である港としては、規模が小さく、地形が暴露して、成ほどこれではしける時には船が入ることが出来ないで困るであらうと思はれた。港と言つても、決して少しも灣入してない。汽船は皆な外洋に泊さなければならなかつた。丁度何島から來た汽船は、今少し前乗客を上陸させたばかりで、引ちがへて此方から出て行つた舳は今しもその舷側に近かうとしてゐた。しかしそのさびしい港のさまが、外洋に暴露された港のさまが、私にあるフレツシユな印象を與へた。(花袋)

◇灣

此のあたりの八景の一だといふ荒木巖頭に照つて居た強い夕映の色が褪せて、夕嵐が巖上の松の梢を動かしたかと思ふと灣内には早や半分ほどしまきが立つた。そして其しまきが次第に沖の方へ擴がり進んで行つて水平線まで達すると海一面が黒ずんで來た。(加能作次郎)

町は知多半島の一帯突つ鼻にあつて、前には遠く渥美半島の蜿々として長く横たはつてゐるのが見え島の多い湖水のやうに静かな渥美灣の風光はかなりに佳かつた。この町の海岸線だけを見ても、その屈曲の様がなかなか複雑した趣を持つて居て、私の眼を娛し

ませてくれた。(廣津和郎)

渺々とした大きな灣が、わたしの前に目に達く限り廣がつて、それを抱いた二つの丘の果ては杳かに烟霧に蔽はれて見えなくなつてゐる。そして此の大きな黄色な灣の真中に、曇りのない黄金色の空を戴いて陰暗な尖つた異様な小山が砂地の真中に高まつてゐた。丁度太陽が没したばかりで、餘光がまだ燃えてゐる空の下に其の奇怪な岩の輪廓が聳えてゐて、絶頂には繪のやうな記念碑が立つてゐた。

(モウパッサン・前田晁譯)

月光と周圍の燈火とが、驚くべき灣の面に——名ぐることの出来ない色彩の面に映つてゐた。それは暗い藍色と綠色とが優しく柔らかに混り合つたもの

で、ある部分は、水が綠礬のやうに見え、またある部分分は、水の代りに、流動する月光が灣に充ちてゐた。そしてこれらのものはみんな色の調和を保つて、静寂と發揚とを吐いてゐた。(チエエホフ・前田晁譯)

◇波

舩に近く白い大きな花輪を見るやうなのは、われわれの船から起す波の泡であつた。忽ちその泡が近い波の上へ擴がつて行つて、星のやうに散り亂れてやがて痕跡もなく消えて行つた。私は遠く青く光る海のかなたに、無数の魚の群かとも思はるゝ波の動搖をも認めた。條理もなく、筋道もない海。先蹤もなく、標柱もない海。豊富で、しかも捉へることの出来ない

やうな海。何處を出發點とも、何處を結末とも言ひ難

いやうな海。私の眼に映るものは唯日の光であつた。波の背に反射する影であつた。藍色の波の上に浮き揚つて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相撃つて時々揚がる水煙であつた。光と、熱と、波とは殆ど一つに溶け合つて、私は自身の身體までその中へ吸はれて行く思をした。(藤村)

大船の心安さ。私は波打際の砂の上に身を置くやうな海から離れた心持をもつて、しかも岸から窺ふことの出来ない海の懷をまのあたりに近く見て行つた。巻きつゝある、開きつゝある、湧きつゝある、起りつゝある、奔りつゝある、放ちつゝある、延びつゝある、狂ひつゝある、亂れつゝある、競ひつゝある、

溢れつゝある、醸しつゝある、流れつゝある、止りつゝある、轉びつゝある、陥没りつゝある、渦巻きつゝある、波は波の中に滑り入りつゝある。(藤村)

私は燈臺の後の岩の上に立つてゐた。其處は海面から少くとも四五十米の高さを持つてゐた。廣い廣い廣い海！ 碧い碧い碧い海！ 隱岐の島の姿が微かに見えて、渡つて行く船もなければ、一鳥の影も見えない。私は立ちつくした。岸から少し離れて、岩が五つ六つ立つてゐて、それに波が來ては碎けた。(花袋)

畝を成して沖から押寄せて來る波は、眼下に錯落して横はつた無數の岩にさゝらのやうに碎けて、時には巨人のやうに屹立した大きな岩の半にまで及んだ。早い早い雲は、鼠色をした波の上をりり〜黄い

日の光をわびしく落してゐたが、それも瞬く間に掻き消すごとく消えて行つて、さびしい荒涼とした海には、一帆の白きをすら認めることが出来なかつた。

(花袋)

陸地に近づくとも波はなほ怒る。鬣を風に靡がして暴れる野馬のやうに、波頭は波の穂になり、波の穂は飛沫になり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまた真白い波になつて、息もつかせず、後から後からと山裾に襲ひかゝつて行く。山裾の岩壁に打ちつけた波は、沸へくりかへつた熱湯をぶちつけたやうに、湯気のやうな白沫を五丈も六丈も高く飛ばして反りを打ちながら海の中にどつと崩れ込む。(有島武郎)

砂濱に崩れる波が、とろゝ汗のやうに白くなつ

て、ぶつくと泡を立てながら四人の傍まで打ち上げられては、又さつと海中へ流れ落ちる。流れ落ちたあとの砂地は、硝子を張つた如く、つや／＼と光つて、それが見る見るうちにところ／＼と艶消し色に禿げかゝると、又第二のところゝ汗が打ち寄せる。(谷崎潤一郎)

雲なく晴れ渡つた八月末の焼くやうな日で、沖は硝子のやうに澄み、潮の流れは濃く薄くその表面に描かれてゐた。一寸見れば滑かな極めて静かな波であつたが、幅の廣い間隔の遠い土用波が力強く寄せてゐた。逆ふものゝないのが物足りないやうなその波は、悠々岸まで碎けさうねつてゐたものゝ、磯の上を越え押寄せる處では、奔流のやうに激して、泡沫を高く吹き上げ、動く雪のやうに岸へ溢れて来た。(有島生馬)

何處まで吹いて行つたらば自分の役目は果たされるのか、その目當てが附かないので、風は自暴自棄になつて無暗と波の上に打當つて来る。波は時の進むにつれて、動亂が烈しくなり、細かく碎かれ廣く集められ、言ひ合せたやうに、一時に眞白な總を振り翳して一哩にも亘つて、一樣の陣立をなして、爽快に陸地へ迫つて来る。が、直ぐその中から謀反者が出る。この散兵線は小さな歸り波の一つ二つの爲めに破られ、それを収集する暇もなく、全隊が總崩れの醜い姿を見せてゐる。(孤雁)

汀の蘆原の中へ立つた。月光微茫、波の音の微妙なこと、私が生來初めて耳にする水の音だ。遠く遠く寄せて来たのが、もう力を失つて、只爬ふやうにし

て蘆の根元へ忍び寄る、さあ／＼と同じ調子を取つてゐる。暫し黙してゐると其微かな響は胸の中に忍び入り、身體ぢうが震へるやうに思はれる。悲しいやうな、懐しいやうな、波の彼方が速りに戀しく思はれて耐らない。(孤雁)

鈍い、低音でありながら、巾のひろい土にこもつた無気味な、どろどろといふやうな音響が原つばの向ふから地につたはつてくる。まるで地の底で唐臼を挽いてゐるやうな、どろどろといふ言葉のあらはす音響そのままの重く濁つた氣分が、庭に立つてゐる私の足の爪さきから頭の方へくる。「福さん、あの音は何だらう。」と私は作男に訊いた。庭を掃いてゐた福藏は、

「あれは土用波です。海が荒れてるので、とふと立ちどまつて、原っぱの方をみて教へてくれる。庭の隅に生えてゐる草の葉が細かくふるへてゐるやうだ。(夕暮)

それは前のよりもすつと大きな、どつしりとした波だつた。慎重に寄せて来て、横になつて狙ひを附けるやうに見えた。と不意に立ち上つて、天童のやうに肥え太つてゐる横帆二塙船の左舷の頬べたに、びしやりといかにも力強い平手打を食はしたので、船は一枚毎にぶる／＼と身震ひした。そして高く欄干の上に、遙かに甲板の上に、冷たい鹽重吹を打ち附けた。

彼等は暫くの間、さつと浪が引く度毎に坂にな

(ケラン・前田晁譯)

森林

つてゐる濱を駆け下つて、そして次ぎの浪が来るとまた駆け上つて、遊んでゐた。で、若い男の誰かが追附かれた時か、でなければ、いつもよりは大きな浪が、傾斜地の上につつと泡の總を送つて来て、興じた人々をまつしぐらに逃げ出させたりした時は、殊に其の樂しさが大きかつた。(ケラン・前田晁譯)

森の晩夏にはもう秋の氣がほのめいてゐた。朝まだき、踏みわけける下草の露が下駄の鼻緒を濡らして彼方に見ゆる祠の赤い鳥居に觸れる秋の氣はひが眼に

ひいやりと感じた。何處となく、森の木の葉が、がさがさと、秋らしくなるやうな心持がした。(葉園)

この頃今日のやうな日に、たつた一人で人を離れて来た森の中を歩いて見ると、自分の身體が濃い沈静なもので包まれてゐるやうである。柔かく底に冷さの含まれた空氣が、顔にひたつと纏ひ附いて、沁々とした。自然とこゝに立つて見て居ると、この丘の昔野であつた時の姿が思ひ浮べられる。このやうな木立の丘は、この武藏野では到るところにあるのだ。(葉舟)

ズムがあつて、その少しばかり不足して居るかと思へるところには、家の草屋根が一つ、その單調を補うてゐる。(佐藤春夫)

丘は落葉林だ。この頃は、丁度四月の初めだが、丘の上の、栗や、樺や、楓などは、まだ芽を出して居ない。落葉した梢が、薄紫の空に、黒くはつきりと影を寫してでも居るやう。細い枝の先まですかして見える。それを足を止めて、目を閉つて何かの音を耳で聞かうと思ふやうな心持になる。(葉舟)

煙つてる林の中に、朝日の光線が布幅ほどの縞になつて斜に光を刷いてゐます。何處か林の一角に強く突き當つてる日光がそこから林の全體を斜にぼかしてゐるのです。林の中の土の濕氣がその微かな光線に

干されてゆるやかに息を吐くやうに乾いてゆく蒸発の生温い感じが、草履で歩いてる女子の足のまはりにほの／＼と纏繞つてゐるのです。(田村俊子)

彼等はすつかり森に包まれ、恐ろしくこんもりした森の枝は風つ氣一つ通さず、その梢は太陽の光に焦げるやうになつて居るのだ。蒸れたやうな梢が力なく凋むで垂れ、かすかな菌類らしい臭が充ち、鼻腔が甘酸っぱいやうで、地に落ちかさなつた乾いた橙の枯葉や干沼の匂がむつと迫つて來るのであつた。

(レイモント・朝鳥譯)

深い叢には青蕈が生つて、その強い香りが、麝香のやうに胸を衝く。高い松が枝の網に遮られて、陽は殆んど射して來ないが、森の中は暗くもなくて、息

塞るやうに暑い。重い透明な樹脂が、大粒の汗のやうに出て來て、粗い木の皮を滴り落ちる。影も日向もない静かな空氣が顔を打つ。あらゆるものが沈黙して、吾々の足音さへ聞えない。吾々は毛氈のやうな藓の上を歩いて居た。(ツルゲエネフ・田中純譯)

私は切株に腰を卸して、膝に肘をついて、しばらく凝として居た後に、頭を擧げて、四邊を見廻した。おう、私を取り巻く一切が、何といふ静かで陰森として居るのだらう——いや、陰森として居るばかりではない。同時に、冷え、凍り、脅しつけるやうだ！私の心は沈んだ。恰度その時、恰度その場所、私は死が自分に息吐いて居ることを感じた。死の絶えざる壓迫に觸れたやうに感じた。私を取り圍んで居る此の淵

のやうな森の静寂の中で、若し何かの響きが一つでも聞えたなら！木の葉の囁きが一瞬間でも起つたら！私は殆んど怖ろしいやうな氣持で再び頭を垂れた。(ツルゲエネフ・田中純譯)

森は海よりも更に陰鬱であり、更に單調である。何時も變らない、何時も押し黙つて居る松林に於て殊にさうである。大洋は囁いたり愛撫したりする。様々な色を以て戯れ、様々な聲を以て語る。その寫す空からも、久遠の息吹が通つて來る。が、その久遠は、吾々から遠く距つて居るとは思へない。……暗色の不變の松林は、時には陰鬱な沈黙を守り、時には鈍い唸り聲に充たされる。——それを見て居ると、自分の空寂を感じる念が、更に深く、更に強く、人の心に沈ん

で來る。(ツルゲエネフ・田中純譯)
縦林の青い塊が、長い、連続した棟のやうに、私の前に横つて居る。此處、彼處に、白樺の矮林が、綠色に點綴されて居る。天空の凡ては松林にかき抱かれて、白く輝く堂塔や、光り擴がる牧場は、何處にもない。満目これたゞ樹木、何處を見ても、ぎざ／＼の樹頭の浪と、揺曳する煙霧、森林の久遠の煙霧が、目を遙に棚曳いて居るばかりである。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

第六章 都會と田舎

都會

◇晝の街

やがて私達は新嘉堡の方で見て来たと同じやうな陰氣な町の中を歩き廻つた。鮭の一つも食つて見たいと思へば、どうしてもさういふ町を訪ねなければならなかつた。港へ来て日本人の町と言へば、きつとまたさういふ場所を教へられた。そこは南清の一部とも英領の殖民地とも思はれないほど、日本の港町や船着

場にあるやうなものが有る。暖簾がある。格子窓がある。二階の欄から乾した着物がある。夜と晝と取違へて居るやうなその界限へは手持無沙汰な日の光が射し入つて居る。何もかも飽き疲れて、ひっそりとして、欠びをして居るやうにも見える。(藤村)

風の往來へ出た。往來は相不變、砂塵が空に舞ひ上つてゐた。さうしてその空で、凄しく何か唸るものがあつた。氣になつてから上を見ると、唯小さな太陽が白く天心に動いてゐた。自分はアスファルトの往來に立つた儘、どつちへ行かうかなと考へた。

(芥川龍之介)

まはりが東京でも指折りの高臺で、郊外にもすぐ近いので、あつちにもこつちにも高い木や森などが

聳えてゐた。そのあひだに、まるで大瀟に荒れ立つ海のおもてのやうに、高低の瓦屋根がギツシリつらなつてゐた。遠く高い二階建ての家は、あたかも海の中の望樓のやうに眺められた。(藤森成吉)

高臺寺の方から清水の方へ私は歩いて居た。名産の陶器を賣る店が並んで居た。左手にすぐ見上げられる東山の中腹には、寺院の墓が見えて居た。陶窯から登る煙が山の麓になびいて居た。夕暮に近いそのあたりには、見物の人々はあまり多くは見られなかつた。

西洋人が二三人、通辯らしい男と話しながら來るのに出會つた。ホテルの名を染めぬいた紫の小旗をさした人力車がその後から續いた。女の案内人に導かれた田舎者の群にも二三度會つた。(加能作次郎)

◇夜の街

夜は駒下駄を鳴らして四條の納涼に出かけた。電燈の明るい中をいろ／＼な人がぞろ／＼と通る。橋

際のピヤホールには、舞妓と藝者とお客とがビールを飲みながら騒いで居るのが明かに見える。晝間見た時にはこんな處で納涼が出来るかと思はれるほど殺風景であつたが、夜は驚くほど賑かで明るかつた。涼み臺の灯と兩側の電燈とが一緒になつて水に映つてそれがチラ／＼と綾をつくつて流れる。女達は綺麗な水に足を浸けたりなどした。(花袋)

その夜は割合に静かで、奥のすつと一目に見わたされる引手茶屋にも客が少く、娘達や仕込の子など

が店先の縁臺に並んで腰掛けて團扇を揺がしてゐるのが眼に入つた。それでもある家の二階では、鼓の鳴る音が静かにして、妓や客の笑ふ聲が簾の中から落ちて来た。(花袋)

三條通から京極へ入ると、もう眼の覺めるやうな明るい光が私の眼の前に波うつて来た。兩側のせまこましい店々には、電燈や、白熱瓦斯がめまぐるしいほど明るく照り輝いて、小兒の喚めく聲や、ものを煮る匂ひの臭苦しくたちこめたなかを、思ひ思ひの扮装をした群集が眞黒になつてぞろぞろ往來してゐる。

(長田幹彦)

夜は静かに蒼く煙つてゐて、風のない沈んだ空氣の冷やかな濕りが、心持よく感じられる。ところど

ころの二階の障子に映る火影を残して、既に寢静まつた裏通りの街は、板塀越しの樹木と屋根と架橋の影が、柳の間に立つ蒼い瓦斯の光に、朦朧と霞みわたる肅條な夜の畫面を作つてゐた。(荷風)

やがて、堅く凍つた溝板に、駒下駄の齒を鳴らしながら元氣よく路次を出て行つた。外は北風が劇しく吹きつけてゐた。十五日過の通には人の往來も少く、兩側の店も淋しかった。砂埃に吹曝されてゐる薄暗い寄席の看板などが目についた。(秋聲)

黄昏の長い初夏の夕も暮れた。遠くの方に月の出の薄明の漂つてゐる空には、まだ打止まない火花の音も聞えたけれど、遊び疲れた人達は、家に歸つたのか、休息の場所を求めて立去つたのであらう。賑やか

過ぎたあとの町は、妙に寂しく静まりかへつてしまつた。(水上瀧太郎)

瓦屋根と瓦屋根とが續いて並んでゐる都會の形は、晝は白ちやけてゐて何の面白味もないが、夜見ると、かなりの魅力のあるものだ。青黒い空に月などの出てゐる時は殊にさうだ。二三丁はなれた盛り場の明るい灯が、空にぼうつとした暈を描いてゐる。

(廣津和郎)

水のやうに濕んだ青い夜の空氣に縁日のあかりが溶けこんで、金清樓の二階の座敷には亂舞の人影が手に取るやうに映つて見え、米屋町の若い衆や二丁目の矢場の女やいろくの男女が兩側をぞろぞろ往來して、今が一番人の出さかる時刻である。中之橋を越え

て、暗い淋しい濱町の通りから後を振り返つて見ると、薄雲りのした黒い空がぼんやりと赤く濁染んで居る。

(谷崎潤一郎)

池の向ふの柳の蔭に、人影が夢のやうに動いて、氣味い樂隊や囃の音、騒々しい銅鑼のやうなもの響きが、重い濁つた空氣を傳つて来た。するうちに、よどんだやうな碧い水の周りに映る灯の影が見え出して、木立のなかには夕暮の色が漂つた。(秋聲)

都會は九月であつた。夜空が時どき氣紛れな稲妻を散らせた。私の耳は電化された都會の交通機關が夜とともに錯雜して行きながら私を焦點として構成する力動的な音楽を聞くことに疲れ果てた。(藤澤村夫)

大通りには絶間のない群集が動いてゐた。夏の